

---

# AnotherWorld ~ 異世界で覚醒する聖神 ~

クアンタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Another World ～異世界で覚醒する聖神～

### 【Nコード】

N5793U

### 【作者名】

クアンタ

### 【あらすじ】

地球は日本出身の何て事はない、ただの一般市民だったはずの少年、葉月風の異世界での冒険の物語。

地球では普通の高校生だったはずの、風は異世界で予想だにしない存在へとなっていく!?

風は、異世界で何になるのか、それはまだ分からない

## プロローグ（前書き）

はは、どうもクアンタどすえー。

いきなりエセ京都弁でごめんなさい。

えー、今回はまだとある右席の方が終わっていないのに、オリジナルの方を投稿しちゃいましたが、

三日に一回はこっちも、更新しようかと思えます。

オリジナルは色々構想もあるので、一応は期待しておいてください。

## プロローグ

そこに一人の少年がいた。少年は黒に少し茶色が混ざったような色の髪と、同色の瞳。

そして、東洋人によくある顔立ちをしている。

有り体に言えば、そこら辺に居てる人間の一人という程度の存在である。

そんな彼にも特技の一つや二つは有る。

一つは、何故かは知らぬが妙に運動が出来るということだ。これは運動が出来る、というよりも最初は出来ないが後から出来るようになるまでの、早さが凄いということだ。

他には、何故か相手の考えが少し読み取れたっばい時があったり、ケンカの仲裁がうまかったり、まあそんなどこにでも居そうな少年である。

しかし、そんな彼はこれらの特技よりも、もうちょっとかっこよく産まれたかっただと思ってる。

彼の容姿は中の上、見る人が見たら上の下といった評価になっている。

しかし、一般的な視点なら十分だと思うが、彼の通っている学校はハイレベルな容姿の生徒ばかりなのだ。それはもう、モデルやアイドル顔負けの美形揃いだ。

だから、彼は願う。

どこか違う世界で普通に、普通の人達とくらしてみたい、と。

だから、彼の足元に光り輝く魔方陣のようなものが現れたのは、必然だったかもしれない。

あるいは、数奇な運命の巡り合わせによって、居るか定かではない神のイタズラで彼は導かれたのかもしれない。

こうして、彼が冗談半分に望んだ違う世界に、彼は招かれた。

ここは、アンスタイン。

地球とは、地球がある世界とはまた違う世界。異世界である。

この異世界で、自らの従者、というか使い魔を召喚するための儀式が執り行われている。

儀式が行われているのは、レッサー王国が他国に誇るレッサー王立魔法学院だ。ここでは、入学して数日すると魔法使いにとって、生涯の相棒となる使い魔を召喚するのだ。

そう、この世界には、魔法があるのだ。

そして、今まさに使い魔を召喚しようとしているのは蒼い髪が腰まで伸びている美少女だ。

その肌は白人のように白く高い鼻と、蒼い髪と同色のくりっとした瞳は人形をイメージさせる。

そして、人形のような少女は、朗々と使い魔召喚の呪文を詠唱しはじめる。

「我が名は、リディア・エル・レッサー。アンスタインの神々よ、私に生涯の友を、お与えくだ……ッ!？」

リディアが詠唱しているその瞬間にイレギュラーは起きた。

このアンスタインの地では突発的に魔力の暴走現象が発生する。

これにより、規模の違いはあれど、何らかの影響を与えていくのだ。

今回は、リディアが詠唱していた召喚の“魔法”に干渉した。

その結果、喚ぶ対象は人間サイズでありながら、範囲は異世界に至るまで広くなつた魔法が完成した。

余談になるのだが、この召喚の魔法とは、人間に好意的だったり喚ばれても構わないという生物が優先されて、召喚される。

それは異世界であっても、だ。

そして、暴走した使い魔召喚の魔法が招いたのは

。

数秒前まで地球にいた少年

名を、葉月はつき凧なぎという

は、呆然とその場に立っていた。

しかし、考えてもみてほしい。いつものように、我らが平和ボケした日本の町を歩いていた只の高校生の少年が いや、大人であつても、足元が光った瞬間に急に目に入るものが中世のような景色に変わったら、呆然とするしかないだろう。

そんなわけで凧は、残ったなけなしの理性で今の状況の答えを導き出そうとしたが、答えなど出ない。

それもそうだ。

何故なら、彼の目の前には自分の学校で慣れていていたとしても、驚くほどの美少女がいた。

周りには、彼女でほどはないが、それでもかなりの美形がいた。

その目の前にいてる美少女も、突然現れた人間に驚いていた。

なにせ、来ても小型の生物だろうと思っていたら、人間が現れたのだ。驚かない道理がない。

結局は、お互いが向き合ったまま硬直するという奇妙な構図が出来上がったのだった。

使い魔召喚の儀式の監督役である、学年主任である四十かそこのいかつい感じのアインス・ルミル・スヴァンは、突然の出来事に混乱していた。

伝統と歴史あるレッサー王立魔法学院の、神聖なる使い魔召喚の儀式でこんな事態になるとは、夢にも思っていなかったのだ。

そんな訳で混乱していたのだが、仮にも監督役。

すぐに冷静さを取り戻し、場をおさめにかかった。

凧とリディアが 意図せずに 見つめあっている所に、  
アインスが声をかけた。

「あー、こほん。リディア君。こっちに戻ってきてくれないか？  
ほら、そっちの少年も」

その声にようやく、二人は反応した。

「えっ、ええええっ！！ ひ、人が来たあああ！？」

「どどこだ、どこ！？」

口を開いた途端、一気にやかましくなった二人に辟易しながら、手を鳴らす。

「ほら、静かにしなさい。ここの監督役は私だ。私の指示に従いなさい。分かったね？」

「す、すいません」

「？ えーと、俺も指示を聞く必要あるんすか？」

そこで、凧ははたと気付いた。なんで、俺はこの人らの言葉を理解してるんだ、と。

凧は昔から、自分の常識の外にあったものに対しては何故だか、頭が回った。

その頭が導き出した答えは、すなわち異世界というものであった。凧にはこれがどうも、しっくりときた。

そこで、監督役と言っていた男が声をかけてくる。

「君、ちょっと良いかい？」

「え？ ……別に構いませんけど」

目の前の巨躯の男は、自分を上から下まで見下ろした後、口を開いた。

「これからちいとばかし、事情を聞くために学院長室まで来てもらうが、別に良いよな？」

その聞き方をする時点で、返事は聞いてないのと同じだと思った。が、しかし他にやることは思い付かないし、断ってさまよっていても野垂れ死ぬだけなので、頷いておくことにした。

「そうか、来てくれるか。じゃあ俺に着いてきてくれよ?」

さっきのは公的な一人称だったのか、こっちがこの人の素か、と益体もないことを考えつつ彼の後に着いていく。

道中で様々なものに目が行くが、そこでどう説明しようと思いを捻らせることになった。

## プロローグ（後書き）

しばらくは、プロローグだけになるかもしれませんが待っていてください。

一気に三話くらいは投稿する予定です。

## 設定（前書き）

プロローグで出てきた人物の設定です

プロローグ時点なので、どんどん増えていきます。

下手したら設定だけで、八ページくらいはいきそうになるかもしれませんがせん。

まあ、それまで続いたららの話ですが

## 設定

~~~~~人物~~~~~

葉月 凪はづき なぎ

本作の主人公

両親とは物心つく前に生き別れてしまい、引き取ってくれる親戚も居なかったため、他者との繋がりを大事にするようになる

隣の家に住んでいた笹岡老夫婦は、自分を孫のように扱ってくれたのでとても感謝している

日本の某県の某校に通っていた高校二年生

17歳

176センチ

61キロ

保有能力はまだ公開しないがきちんと決まっている

チートな特殊能力がてんこもり

プロローグに書いてあった特技が、伏線になっている

イメージとしては、茶色が混じった黒髪黒目の優男が一番近いイメージになる

性格は、何かに順応しやすく、芯が一本通っている

リディア・エル・レッサー

本作のヒロイン

レッサー王国第三王女

上に第一王子、王女、第二王女がいる

優秀な兄へと家族の関心が向いており、幼いときから一人であった

ために、かなり強く他者を求める傾向がある

かなり肉感的な体をしており、さらに超がつくほどの美少女なので  
学院内では人気が高い

レッサー王立魔法学院に通っている

魔法学院三年生

16歳

162センチ

52キロ

スリーサイズ

86 / 54 / 84

イメージとしては、ストレートロングの蒼髪で蒼瞳の優しい顔を  
した超美少女

性格は、誰にでも優しく、物腰柔らかで、ていねいな接し方をする  
しかしこれは、嫌われて自分から離れていってしまうのを恐れてい  
るから

得意な魔法は水属性  
アクア・エレメンタル

オウン・アビリティ  
保有能力

『王家の加護』

王族ならば誰でも持っている、保有能力。【く神の加護】よりは劣  
るが、運が良くなり自分への流れを手繰りよせることができるよう  
になる

クイック・リード  
『高速詠唱』

熟練の魔法使いや軍人ならば、誰でも持っている保有能力  
文字通り、高速で呪文を詠みあげることができる保有能力

アインス・ルミル・スヴァン

スヴァン子爵家当主

レツサー王立魔法学院の教師を勤めて10年ほど経っている

元軍人でかなりの使い手

剣術に長けており、学院内ではトップクラスの腕前

ある事件から腹に大きな傷が付いている

37歳

183センチ

83キロ

かなり大柄でなかなか、いかつい顔つきをしているためか、生徒からは怖いと思われるが、本人はいたって気さくで陽気な性格である

魔法は軍人でもあったので大体はそつなくこなすが、一番得意なのは火属性

フレイム・エレメンタル

オウン・アビリティ  
保有能力

『高速詠唱』

クイック・ムーブ  
『高速歩法』

熟練の魔法使いや軍人ならば、誰でも持っている保有能力

普通に走るよりも、数倍ほどの速さで走ることのできる保有能力

クイック・キユア  
『治癒活性化』

魔法ではなく、自然治癒力を活性化させることによって、回復力を増幅させる保有能力

~~~~用語~~~~

アンスタイン

レッサー王国を含む、諸大国や小国、大陸や海を全てをまとめた一つの世界を、アンスタインと呼ぶ

他には、アンスタインの神々の名のあとに続く神としての象徴としても、使われる

レッサー王国

アンスタイン、グライデア大陸の南東部に位置する大国

かつては小国であったが、戦争で勝利をあげていったことで、今の地位を築き上げた

平和となった今では、アンスタイン連盟の三大盟主の一国となっている

レッサー王立魔法学院

レッサー王国の王都レクシリアンにある、国営の魔法学院

レッサー王国が他国に誇る名門学院と、貴族や国民の間では認識されている

オウン・アビリティ  
保有能力

アンスタイン人なら、誰にでも得られる能力

主人公の風はどうやら違うようだ？

訓練によって得たり、いつの間にか得ていたり謎も多い

保有能力が進化したり、その人だけの為に変化したりした保有能力のことを、オソリ・オウン・アビリティ限定保有能力と呼ぶ

使い魔

魔法使いが生涯の相方として召喚する生物

召喚した生物の格が高いほど、その魔法使いの格も高いとされる

### 魔力暴発現象

アンスタインでは大気中にエレメンタル体が、そこかしこに存在しており魔法使いの魔力に反応して、暴走するエレメンタル体が存在する

その暴発したエレメンタル体は何らかの影響を残していき、あらゆるイレギュラーを巻き起こす

凧が召喚されたのは、この魔力暴発現象が直接の原因である

~~~~魔法について~~~~

魔法は、この世界アンスタインにとっては、無くてはならない存在だ

なぜならば、アンスタインでは魔法科学というものが発展しているこの魔法科学とは、科学技術に対し、魔法を組み合わせることにより高い効果を得るといふ試みだ

アンスタインでは、これを成功させ、一つの文化としている話を元に戻すと、魔法にはさまざまな属性がある

この属性は、エレメンタルと呼ばれており、自身の魔力を行使して大気にあるエレメンタル体を集める

そして、出来るのが『属性魔法』エレメンタル・スベルだ

この『属性魔法』はさまざまなことに使われている

病気を治したり、火を起こしたりと実にさまざまなことに使われている

他にも『セイント・エレメンタル聖属性』を使った『セイント・スベル聖魔法』や、『ダーク・エレメンタル闇属性』を使った『ダーク・スベル闇魔法』があるが、そちらは人間には使えないので、名前だけということにしておく

これまでの説明が、魔法についての簡単な説明だ

「話』まずは一日の終わり』(前書き)

ちと遅くなりましたが、  
ぜひぜひご覧あれ

「話『まずは一日の終わり』

学院長室の窓から、外を眺めている老人が居た。

彼は、御年70歳になる高齢者だが、周囲の人はそう思わないだろう。

なぜなら彼は、日々の鍛練を欠かさずに行っているために、とても若く見えるのだ。

彼の肌は老人とは思えないほどにきめ細かく、若々しい活力を纏っていた。

学院長は、自室に近づいてくる気配に気づいたのか、扉の方を向いている。

扉が開いた先に居たのは、元軍人のアインス教師と第三王女のリディアと、見覚えのない少年だった。

「おや、その男の子は誰なんだい？ アインス先生」

「この子は、そのう。なんて言うんですかね？ ……えと、異世界から来たらしいです」

「はい？ 異世界とな」

アインスの、あまりにも予想外な発言に目を丸くした学院長だが、態度を元に戻すとアインスに問い返す。

「アインス先生や。異世界からというのは、本当なのかね？」

「ええその通りですよ、学院長。私が見た限りでは、突然現れたようにしか見えませんでした。というよりも、突然現れたと断言できません」

「ふうむ、確かに君の言う通りならば、歴史に残ることだがね」

「……本当にそうなんですよ、えと学院長、さん？」

「学院長で構わんよ。……当事者の君が言うのなら、そうなのかね」

凧の言葉に、学院長は真実なのだろうと確信した。わざわざ、不法侵入したら即拘束の魔法学院に、危険を犯してまで侵入してくる輩はいないだろう、という根拠もあった。

凧が必死に考えついた説明はお披露目されることはなかった。

閑話休題。

正直なところ学院長は、この異世界の少年の扱いに困った。考えてもみてほしい。

いきなり現れた少年。

魔力はあるが、ほんの微量しかない。  
魔法とは関係がない世界なのだろう。

言葉遣いは悪くないが、あまり詳しくもないだろう。  
さらに、この世界で魔法を使わずに金を稼ごうと思えば、戦闘に  
関することしかない。

この少年に、戦闘など出来るのだろうか？

出来ないだろう。

体つきを見たら分かる。

一般人並みの筋肉しかないとから、ごく普通の日常を送っていた  
のが分かる。

その世界が平和であったことも。

とにかく、このアンスタインは危険がそこらへんに落ちているくら  
いに、危険な世界でもある。

ならば、まずは鍛えてあげなければいけないだろう。

そうしなければ、彼がこの世界で生きていくことは難しいから。

そう思い、学院長はアインスの方へ向く。

「アインス先生。ワシから君に頼みがあるのだが」

「私が彼を鍛える、ということですか？」

アインスは理解していた。このアンスタインが、危険に満ちている  
世界だということ。

学院長は、アインズに感謝しつつ頼むことにした。

「その通りだ。そういうわけで、君を鍛えることになるのだが、構わんね？」

「お、僕は構いませんが、この世界はそんなに物騒なんですか？」

学院長は内心驚いていた。

凧が言葉遣いを訂正したことに、ではない。

凧が予想以上に聡明であったからだ。

学院長は、彼は良くも悪くも平凡な人間かと思っていたが、彼は自分達の会話の意味に気づいていたのだ。

「確かになかなか物騒でもあるが、ほれ住めば都と言っじやる？ 快適な異世界ライフを堪能するために、強くなっておいて損はない、という所だな」

「深い意味があつたんですね。あ、自己紹介が遅れましたけども、僕は葉月凧といます。あと、窮屈なので敬語やめてかまいませんか？」

「ハドウキ・ナギ？ 妙な名じゃな。あと、敬語はやめても良いぞ」

「えっと、ハドウキ・ナギじゃなくて、葉月凧なんだけども……」

「こつちの世界では名前が先なのか？」

学院長は、違うのかとでも言いたげに首を傾げていたが、頷くと言った。

「こちらでは、名から始まりミドルネーム、そして家名じゃよ。そちらの世界では違うみたいだが」

「こつちの世界っていうか、俺の国ではそうっただけなんだ。てことは、こつちの世界では俺は、ナギ・ハヅキってなるんだな」

「では、ナギと呼ばば良いのかな？」

「そうしてほしいな。あと、さっきから気になってんだけど、この女の子は何でここに居てんの？」

そうして風が目を向けたのは、先ほどから全くしゃべっていない、リディアだった。

学院長とアインス、風の三つの視線を感じてうつむきながらリディアは、ようやく口を開いた。

「えっと、今回のことは私が使い魔召喚の魔法を使ったときに起こったことなので、私が責任とって彼の  
ナギ、くんの面倒を

見よつと思つて居るのですが、駄目ですか？」

学院長にとつては、願つてもないことだつた。

彼の世話をするのはいいが、彼の部屋をどうしようかと悩んでいたのだ。

そこにきて、彼女の提案があつたのはまさに渡りに船であつた。

アインスはアインスで、年頃の男女が同じ部屋などと思つていたが、リディアは王女なので下手したら死刑になるぞと釘でも刺しておくか。

「おい、ナギ？ 同じ部屋に居るのはいいが、そいつは王女様だから手出したら死刑だぜ？」

「なつ、死刑？ しかも、王女様つて。……つか面倒を見てくれるつていうのに、そんなこと出来るか！！」

アインスは悪い悪いと言いつつも、ナギの評価を上げていた。自分に恩がある人への礼儀を忘れない。なかなか良いやつだな、と思つていた。

リディアはリディアで、なんか女として見られてないのかな？とか思つているが尻の心臓は、けっこう速くなつて居る。

なにせ、女の子と同じ部屋なのだ。

年頃の少年としては、かなり精神衛生に悪い。  
いやある意味、幸せなのだが。

「そうか、ならミス・リディア。頼めるかい？」

「はい。任せておいてください。」

かくして、学院長とのファーストコンタクトは終わった。

場所と時間は飛んで、夜の8時。  
リディアの部屋。

先ほど、風は夕食の時にリディアから色々と説明してもらった。

正直、半分以上も理解していなかった。

リディアには申し訳ないと思っっているが、沈んだ顔をしているのも  
リディアに悪いので、とりあえず部屋の中を見回す。

女の子らしく、色々と小物などあると思いきや、ベッドに机、椅子  
やソファアールなど生活用品以外はたいして何もなかった。

リディアは、そんな風の考えが分かったのだろうか、苦笑いしつつ  
も答えることにした。

「学院内にはね、あんまり私物とか持ち込んだんじゃ駄目なの。昔に私物の中に、カメラとか持ってきて色々やっていた人が居てね、それ以来は駄目になったんだって」

「へえー。有名な学院でも色々あるんだな」

「有名だからだよ。名のある場所には、いつだって何か秘密があるんじゃないかって、疑う人もいるんだって」

「はあ、色々あるんだなあ」

「ふふっ、そうだよ。色々あるんだよ？」

凧は笑うリディアは可愛いな、と思いつつあくびを噛み殺していた。

「もう眠たそうだね。私も眠くなってきちゃったし、もう寝ちゃおう？」

「ふあーあ。そうだな。もう寝ようか。」

リディアは、言うが早いかベッドを整えて、凧の方を向いた。

「あん？どうしたんだ。」

リディアは顔を赤くして、もじもじしていたが意を決して言った。

「こ、こここれから着替えるから、あああっち向いててくれる？」

「……わ、悪い。氣い利かなくなつてさ」

「い、いいよ。別に」

そう言つて、着替え始めたリディア。

風は背中の方から聞こえてくる、衣擦れの音に気が気ではなかつた。

やがて、風にとっての地獄のような時間が終わった。

「ナギー。もういいよっ」

やっと終わったか、と思いリディアの方を見ると、そこには天使がいた。

暑くならないように薄く、肌もけっこう出ている。

だが、それでいて、気品を失わないようになっていく清楚なネグリジェを纏ったリディアがそこにいた。

それを直視した凧は、思わずくらくらとした。

あまりにも美しいその姿は見るもの全てを魅了するだろう。

うっかりリディアに、近づこうとして凧はアインスの言葉を思い出した。

「（アインスさん、この天使を前にして我慢しろって拷問かよ）」

「あれ、どうしたの？ ベッドに入らないの？」

「は？ ……はあ!？」

「いや、だから、あの。えと、ベッドは一つしかないから、そのう  
同じのに寝なきゃ駄目なんだよ」

お互いの顔が、真っ赤に染まる。

いや、染まらずにいられようか。無理に決まっているだろう。

やがて、凧が口を開いた。

「じゃ、じゃあお邪魔、します?」

「どっ、どっぞ」

ベッドの端に潜り込む風。同じく、ベッドの端にいるリディア。  
二人の距離は人二人分ほど空いている。

この二人の距離がなくなる日は来るのか？  
それはまだ、分からない。

とにかく、異世界での一日はひとまず、終わった。

二話『鍛練と買い物』（前書き）

長かったです。

内容がじゃなくて、投稿するまでがら、です。

今回はテンプレな感じですかね。

まあご覧あれ。

## 二話『鍛練と買い物』

side 風

よう、お久しぶりだな。

葉月風だ。

今、俺は第二練兵場つてところで、アインスさんに鍛えてもらってるんだ。

なんでもこのアンスティンつつう世界は、けっこうデンジャラスな世界らしいんだよな。

だから不意の事態にも対応できるように、鍛えてやるうってことなんだつてさ。

「ほら、考え事をしているひまがあるのか!？」

「!.....つてえ」

いつてえ、なんだよあのパンチ。

明らかになんか使っただろ、おかしいくらいの威力だったし。

「ふう、今日はこのくらいにしておくか。.....そうそう、今のは俺の拳に魔力を纏わせたからあれほどの威力だったって訳なんだよ。まあこれくらいは誰だつて使っている技法だ。上手いこと避けれる

ようになれよ、もしくはインパクトを外せ。それでなんとかなる」

なんか最後のんが、ちょいと怪しかったが、それが正しいんだろうな。

俺は、この6日間ずっとこんな感じだ。

アインスさんは朝は授業は無く、昼からだから朝に俺の修行の面倒を見てくれるのだ。

そして終われば、自主練をする。アインスさんが作った木の棒（十キロ）を昼の鐘が鳴るまで、色々な軌道で振る。

これは近距離武器の素振りとしては、なかなか良いものらしい。…

…アインスさんからそうしろと言われたからしているのだが。

俺的には剣を使ってみたいと思っている。だって、ファンタジーっついたらさ、やっぱり剣じゃないか？

かっこいいし。

ま、その肝心の剣が無いんだけどもさ。

それからしばらく俺は、ただひたすらに棒を降り続けた。

ただなんとなくだけど、日が経つにつれて、振るときに安定していつてるなっと思っただよな。

アインスさんは、自分のことなんざ分かりづれえもんなんだよ、と言っていたが自覚できてる場合はどうなんだろうか？

あ、そろそろ鳴るな。

ここ時計があるから分かりやすいわ。

さて、これから学院のために奉仕してこようか。

実は俺、この学院でバイトやってるんだ。

正確にはバイトじゃなくて学院に居させてあげる代わりに働け、という訳だ。

働かざる者食うべからず、ということわざがあるが世の中対価を払わねば、やっていけないのだ。

そういう訳で、俺は学院の食堂で皿洗いをしている。

いや、さすがの学院長でも無理なことはさせないでいてくれたようだ。

この数日、あの人と話すことは何度があったが、あの人ほど愉快犯という言葉が似合う人はそういないだろう。

だって、学院長室に入る度にトラップをしかけてんだぞ？  
どこの悪ガキだったんだよ。

しかし、この時間帯はほんとに忙しい。

何せ学院中の生徒が、この広い食堂いっばいに集まるのだ。ある意味、壮観だろう。

「なあ、ナギ。あんた、貴族の方に知り合いがいたのかい？」

「え？ 一応、居るには居ますけど？」

今話しかけてきたのは料理長だ。  
アインスさんや、学院長はフレンドリーだったので、タメ口だが料理長はヤバそうだったので敬語だ。  
……でも、貴族の知り合いって言えば、あいつしか居ないよな。  
見てみると、

「あ、やっと来た。遅いよー」

「えっと、ごめん。それで何か用なのか、リディア？」

そこにいたのは、相変わらずびっくりする程の美少女リディアだった。  
なんか用なのかな？

「うん。あのねアインス先生から、金を出してやるからナギを武器屋まで連れて行ってやれ、って言われたの。昼からは、授業も休みだし行こう？」

正直、アインスさんのところをがんばって真似してるリディアがめっちゃ可愛かったです。

でもついさっき剣ほしいなあって思ってたし、ちょうど良かったな。

「もちろん。じゃあ料理長に聞いてみるよ」

「……その必要はないよ、さっきの話は聞かせてもらったよ。ここの仕事はもういいから、とっとと行ってきな」

「あ、ありがとうございます…！」

お辞儀つて、行きすぎると腰が痛いな。  
でも、料理長には感謝したりないな。  
今度、肩揉みでもしてあげようかな？

「じゃあ私の部屋まで来てね、待ってるから」

「おう、分かった」

しかし気になってるんだが、なんで料理長以外の厨房メンバーがにやにやしてるんだ？  
ワケわからん。

bedside end

リディアの部屋に着き、彼女が着替えて出てくるのを待つ。  
彼女は、基本的には動きやすいラフな格好を好んでいる。  
しかもリディアの魅力を損なわない服がいつぱいだった。  
王女様って話だけど、絶対にそれだけじゃないよな？ 裏で色々  
手回しされてそうだ、などと無駄な思考をしていた風だが後ろから  
肩を叩かれた。

「ナギ、なにぼーつとしてるの？」

「うおお！ ……リディアか、たくびっくりさせんなよ」

「あはは、ごめんごめん。それより早く行こ？」

「おっしゃ。早く行くとするか」

二人、肩を並べて歩いていく。  
その距離は、50センチ程だ。いつかきつと、もっと縮まっている  
だろう。

王都レシティアは、外縁を約4メートル程の高さの金属製の壁でぐるっと、囲んでいる円形に近い形の街だ。そんな構造をしている王都レシティアだが、閉塞感などはない。

なぜならば、本来の設計では王都レシティアの建築物はかなり詰めて建てられるはずだった。

はずだったのだが、当時の担当の棟梁がゆとりが無ければ国にもゆとりが無くなる、と言って余裕のある設計にしたのだ。

そのお陰か、グライデア大陸 レッサー王国がある大陸

で一番住みたい街に選ばれている。

そんな王都レシティアの南の大通り、フラウル通りを風とリディアの二人は歩いていた。

「……んー、おかしいな？　ここら辺にあつたと思うんだけどなー？」

「もしかして、迷子になつたとか言わないよな？」

リディアの先導に従っている風だが、どれだけ歩いても一向に目的地につかないことに冷や汗を流しつつ、リディアに問いかける風だが、

「あ、あははは。ごめんね、場所忘れちゃったみたい。」

現実は無情であった。

仕方なしとばかりに凧は頭を振り、細い路地の方を見てみた。

「なあ、リディア。こつちにはなんか無いのか？ ……掘り出し物とかさ有りそうじゃないか？」

「うーん。無いんじゃないかな？ 武器とかって、きっちりとしたお店の方が信頼性とか有るって近衛の人が言ってたの聞いたこと有るから、ちゃんとしたお店を探さない？」

「……そう言っつて、俺たちは迷子になっただけでもな？ リディアさん？」

「うっ。だ、だからごめんって言っただんじゃない」

まあいいんだけどねー、と流す凧。一方で、どこか申し訳なさそうなりディアだが、渋々といった感じで細い路地の方を向いて、

「……分かったよ。じゃあこの路地に入る？」

妥協（提案）した。  
その提案に凧は目を輝かせて、喜んだ。

「おっ、マジで！？　じゃあ早速行ってみるか、リディアー！」

「えっ！？　あ、あのナギ！！　手が、手っっっ！！」

興奮した凧はリディアの手を握っていることに気づいていない。  
リディアは初めての異性の手にドキドキしっぱなしであった。

フラウル通りから入った路地の日陰の目立たない場所に、それはあった。

そこらにいくらでもありそうな一般的な二階建ての建物で、扉の上にある看板には二本の剣が交差して描かれている。

絵に描いたような、子供が考えたような武器屋がそこにはあった。  
二人はしばし、その武器屋であろう建物の前にたたずんでいたが、凧が先に口を開いた。

「なんか、いかにも異世界って感じの建物だな。そうは思わないか、リディア？」

「……やめて。ちゃんとした所は、ちゃんとしてるんだから」

「ああ悪いな。……とりあえず、こんなところで突っ立ってるのもなんだしき、中に入ってみないか？」

「うん、そうしよう」

そうして風は時間が経ってボロくなったのだろう、少し軋む扉を開けて中に入った。リディアもそれに続いて入っていく。

「おう、らっしゃい。珍しいな、ここまで来た客はよ」

中に入って最初に目に入ったのは、カウンターに組んだ足を乗せて、新聞を読んでいる50手前のガタイのいい男だった。彼の発言から、ここにはめったに人が来ないのだろうことが分かった。

……こんな所に店を構えていても、人など来ないだろうが。

ナギとリディアは店内を見回す。

壁には大きな槍やデカイ剣、金属製のメイスといった様々な武器が

立て掛けられていた。

「スツゲエな。……なあ、マスター。俺に扱えそうな剣を見繕ってくれないか？」

「いきなりフレンドリー!? ちょっと失礼じゃないの!？」

「ハハハ、いんだよお嬢ちゃん。元気な小僧は嫌いじゃないぜ！」

そう言つて、ハハハと笑い合う二人。

それを見てリディアは、あれ私がおかしいのかなと自信を無くしかけていた。そんなリディアを放つておいて、事態は進んでいく。

「ほれ、このロングソードなんかはどうだ？ 切れ味は良いし、何よりも使いやすい。こいつを使って一兵卒から將軍になつたやつも、聞いたことがあるからな！」

「へえ、すげえな。じゃあ他のも見せてくれねえか？」

「良い食いつきっぷりだな、よしじゃあ次はこいつだな。ブレイクレイピアだ。こいつはな、ただのレイピアじゃねえ。持ち主の魔力で、その魔力の属性の『弾丸』<sup>ブレイク</sup>の魔法が使えるんだよ。しかも頑丈だから、多少ムチャな扱いしてもびくともしないんだよ」

「ほおー。なかなか凄いのがたくさんあるんだな。リディア、お前

が連れていつてくれる予定だった場所も、こんな凄いのがいっぱいあったのか？」

「ううん、無いよ。ここはずいぶんと高ランクの武器を扱ってるみたいだね。私、こんな凄い武器なんて見たことが無いよ。あの、貴方は一体……？」

するとこの店の店長、つまり目の前の男性が笑い出した。

「ガツハツハツハ！ 良くぞ聞いてくれた！ この俺こそが、グライデアー有名な武器商人、ガオン・ボーダヒ様なのだ！！」

二人の反応は対照的だった。リディアは、かの高名な武器商人ガオンが目の前の男性だと知り、啞然としている。  
凧は、このおっさんてそんなにスゲーのかと首を傾げている。

「……え、ええええっつ！！ お、おじさんってあのガオンだったんですか！？」

「ガハハ、まあ普段はグラスンとかしてるからわかんねえよな。しかしまあ、そんなに驚くことかね？」

「そうだぞ、リディア。そんな驚くことじゃないだろ？」

「そうだな、この坊主の言う通りだな、全く」

再び訪れたアウェー感に、リディアは肩を落とす。

店長の男性　改めガオン　が、新しい剣を持ってこようとした時に凧はなにか箱のようなものを見つけた。

「なあ、おっちゃん。その箱みてえのってなんなんだ？」

「ん？ ……おおこいつはな、昔商売仲間からもらったんだがどこを触っても、うんともすんとも言わねえんだよ。ハハツ坊主、見てみるか？」

そう言っつて長方形の箱を持ってくるガオン。

その箱の上部に書かれた文字を見た瞬間に、凧は体の奥が熱くなるのを感じた。懐かしいものを見た時と同じような感覚だった。

「坊主よ、その文字が読めんのか？ ……まあそいつは、知り合いの考古学者に頼んでも分からなかったがな。ガハハハハ！」

「　　加護を持ちし者これに触れた時、箱は開かれん。この中

にありし剣はかつて、神が振るいし剣。全てを超えし神は、限界を超え続ける神を討滅せんとするために、この剣を手に取り戦いへと赴く。

剣の名は、ダン。聖神剣ダン」

凧が何の苦もなく読んだことにガオンとリディアは驚いていた。特にリディアは、異世界から来たことを知っていたので、ガオンよりもなお驚いていた。

「ほう、坊主よお。お前さんなかなかやるじゃねえか。気に入った！ そいつを読めるみたいだし、タダで持ってっても構わないぜ！」

「ええ？ それって良いんですか？」

「ハハツ気にするな、お嬢ちゃんよ。店主が良いって言ってんだから、良いに決まってるだろ」

「気前いいな、おっちゃん。俺も、おっちゃんが気に入ったぜ。今度からは、この店を利用させてもらうよ」

やはりリディアには、この場の空気は必ず自分をアウェーにするので、しょんぼりしていた。

「しかし、神の剣ねえ。どんなもんが出てくるんだろうなつと。よし、開いたぜおっちゃん。今時南京錠とは、古すぎんだろ」

「ほらほら、早く開けるつて」

「わあつてるよ」

凧が南京錠を適当にそこらに放り投げ、長方形の箱のふたを開ける。

そこにあつたのは、全体的に焦げ茶色の部分が多く、先ほど見たロングソードの剣幅を少しばかり太くした感じの剣だった。

分かりやすく言えば、ロングソード（錆びた剣ver）である。

正直なところ、期待が外れに外れたのでこのまま帰りたくなつた凧だが、ガオンがそれを引き止める。

「ガハハ、伝説やらなんやらつてのは大体こんなもんなんだよ。…それになんかの拍子に昔の性能を取り戻した、なんつうこともあるかも知れんぜ？ だからそいつはお前さんが持つておけ」

「……はあ、分かつたよ、もらつとくよ。なんで好き好んでこんなボロいのを持つとかなきゃいけねえんだ？」

「でもさ、これでお金は浮いたんだからどこかに行かない？ 多分だけど、アインス先生は気分転換もかねて、外に行かせたんだと思うな」

「へえ、そうなんだ。あの人、やっぱりいい人だよな」

凧は表面上は冷静を装っていたが、心の中ではものすごいことになっていた。

やっべ、これってもしかして、いやもしかしなくてもデ、デデデトではなかるうか、いやデートじゃないのこれええとあらぶっていた。

まあ相手が相手なので、こうなるのも仕方ないと言うものだろう。

「おう、坊主！そいつをそのまんまで持つてると、衛兵に捕まっちゃうぞ？ この鞆に入れとけ、中に残ってたやつだ！」

「おっと……サンキューな、おっちゃん。また来るよ！」

「えっと、さようなら？」

二人はそういつて出ていく。ガオンは凧の言ったサンキューとは、どんな意味だと考えた。

が、意味が分かりそうに無かったので、二人のことを考えることにした。

「青春してんじゃねえか、ハハツ若いねえ」

ガオンが浮かべた笑みは、奇しくも厨房メンバーの浮かべた笑みと同じだった。

二人は帰ってきてても目的地は同じなので、結局は最後まで二人で歩いている。

リディアは剣が手に入ってご機嫌な風の話しかける。

「フフツ、ナギ嬉しそうだね」

「そりゃあな、ただで手に入ったんだしな。それにアインスさんに見せたら見た目はあれだが中々の、つかかなりの代物だって言ってたからな。実は良い買い物したかなって思ってたところだよ」

「じゃあ明日からは、アインス先生の特訓が厳しくなるね」

「うわ、やっぱりまだ良かったかな？ でもな、有るのと無いのとだったら違つからな。やっぱり買つていて良かったんだよな？」

そう言ってうんうんと唸っている風を見て、楽しげに微笑んでいる  
リディア。

二人の距離は、唇よりわずかに、だが確かに縮まっていた。

二話『鍛練と買い物』（後書き）

デートなんて書けませんよ

次回は、どうしましょうかね

三話『もっと疾くなれ!』(前書き)

今回は凧とアインスでの、初戦闘です。

ちょっと変かとおもっていますが、ご覧あれ。

### 三話 『もつと疾くなれ!』

ニダの森は天然資源の宝庫だ。

美味珍味といわれている動植物、観光名所にもなりそうな美しい自然があれば、武器や日用品に使える鉱物も採取することができる。だが、それゆえに知性のある幻獣や凶暴な魔獣も集まってくる。

今、凧とアインスがいてる場所は、比較的弱い下級の魔獣が集まる場所だ。

凧にはこれから先に困難が待ち受けていそうだと、今までの経験と勘が訴えていたので、ちゃっちゃと鍛えておいた方がいいとアインスは考えていた。

一方の凧は、ダンを手に入れてから一週間近く経っているが、未だにご機嫌なようすである。

そんなに剣がほしかったのだろうか。

アインスはこのニダの森での予定を凧に話す。

「ナギ。今日は日没までには、魔法学院に帰りたいからあんまり変なことはすんじゃねえぞ」

「分かってるよ。俺だって、ちゃんとそっいうのは弁えてるよ」

口は弁えられてないがな、とは思ったが口には出さないことにしたアインス。

こっついう馬鹿はまず、自分の力量を把握させておかせる必要がある、

というのがアインスの考えだ。

「なあ、アインスさん。ここらへんは弱い魔獣の集まりだって聞いたけどさ、アインスさんはどこまで行けるんだ？」

「……あー、どこまでかな。今の俺は……そこそこ奥くらいは行けんじゃねえの？ 昔なら話は別だけどよ」

それを聞き、凧は笑った。

「やっぱりけっこう行けるんだな。じゃないと、あんなに強い説明がつかねえもんな」

別にそんな強くねえよ、と返すがどこか満更でもない様子のアインス。

誉められて悪い気はしないのだろう。

ごほんとして少しばかり敵しい咳払いをして、アインスは顔を凧に向ける。

「あー、あれだあれ。とにかくだ。ここは平和な街の中じゃないか

らな、気は抜くなよ？ いいな？」

「うつつす」

ガサツと草むらが揺れた。凧が軽い返事を返したその瞬間に、その集団はやって来た。

「パワー」「パポオー」「ポオー」

凧は拍子抜けした顔で、その小型の魔獣『ハオ』を見た。隣で警戒していたアインスも、和んだ顔をしている。

「なあアインスさんよ。こいつら見てると、すごい和むね」

「ああ全くだ」

ハオは、その愛らしい見た目や可愛い鳴き声、無害な性格とのんびりした行動などで、アンスタインーの人気を誇る魔獣だ。そのため、様々な場所でハオをペットにしているのが見られている。当然ながら女性の飼い主が多い。

余談だが、一部ではハオをコーデイナーとして一番のハオを決める

『ハオコンテスト』なるものがあるらしい。  
色々なことを考えていたアインスだが、そこではたとハオの忘れてはならないことを思い出した。

ハオの肉は人間には合わないが、魔獣にとっては至高の逸品だそう  
だ。

魔獣にとっては至高の逸品だそうだ。

大事なので、二回ほど反芻したようだ。

今出てきたハオは、どこか急いだようにして出てきたのだ。しかも、  
ハオから見て草むらから隠れるようにしているではないか。  
つまり。つまり。  
つまりそれは……、

「ブガアアツツ!!」

たった今、ハオの天敵である豚を大きくさせたような魔獣『オーク』  
に追われていたことに他ならない。  
オークは集団で獲物に襲いかかる、見た目とは裏腹に狡猾な性格を  
している。

実際に今オークは、左に3匹と右の離れたところから1匹来ている。

「ナギイ!!! 俺はこっちの奴らをやるから、お前はそいつを引き  
止めておけ!!!」

「！……分かった！」

正直なところ、凧はアインズに3匹も相手させてもいいのかと思っただが、いつもボコボコにされているのを思いだし、じゃあ問題はないかと右から来るオークを見た。

そのオークは、アインズが相手しているオークと同じなのに、凧にはなぜだかより凶暴に見えた。

「死なねえぞ、絶対に死んでやらねえぞ！！」

凧は自分がなんと叫んだのか、それが分からないくらいに緊張していた。

いくら日頃からアインズにしごかれていたとはいえ、いざその時が来たら何よりも恐怖が先行してしまうのだ。

平和過ぎた日本では、絶対に体験できないことをしているのだ。

その平和すぎる日本で育った凧は、やはりこんな生と死のやり取りなど体験したことなどないのだ。

だからこそ、凧は必死で生きようとする。

必死に生きるための道を見つげるために、思考を加速させる。

「（……くっそ。なんだよこいつ、でかさは俺よりちょっとデケエくらいなのに、なんでこんな迫力あるんだよ。ふざけんよ、死にたくねえつてのに、死なせたくなんてねえのによ。どっちかを選択しろなんて自分を取るしかねえだろうがよッ！俺が勝つしかなくなるじゃねえかよッッ！！）」

オークが右腕を大きく振って、風を叩きつけようとする。それを風は横に軽く跳び、冷静にかわす。横に跳んだときにダンを横薙ぎに振るい、オークの腹を切り裂いた。オークは悲鳴を上げて後ろによるける。

「逃が、す、かよおおッ！！」

横に跳んだ姿勢から、強引に前へと跳ぶ。そのせいで体が軋んだが、気にせずさらに前へと突き進む。速く、より速く前へと突き進んでいく。

「だああああッッ！！」

雄叫びを上げて、凧はオークの頭から一気にダンを斬り下ろした。オークはまるで魚の開きのように前半分が切り開かれた。凧は急いでそこから離れたので、オークの血のシャワーを浴びずすんだ。

「（ハア……ハア……俺、やったのか？ あのオークを、一人で、やったのか？）」

今になって、どっと疲労感が湧いてきて息切れする凧だが、その顔にはどこか満足感と不快感が浮かんでいた。生き残れたという実感と、生物を殺してしまったという現実への不愉快さと罪悪感が、凧の心へとたまっているのだ。

吐きそうになった凧だが、なんとか抑え込んで一人で奮戦しているアインスへと視線を向けた。

そこではアインスが最後に残ったオークへと、魔力を纏わせた剣のような杖を突き刺したところだった。

「……1対3で勝っちゃったよ、あの人」

呆れと、尊敬と羨望が混じった声色だった。

座りこんだ風を見て、アインスはなっさけねえと呟くが、まあ今までこんな経験なんかしたことねえから吐いてねえだけマシか、と息を吐き風に近づいてくる。

「よう、ちゃんと生きてかバカ弟子」

「開口一番、それなのかよ？ バカ師匠」

軽口を叩き合う二人だが、その顔には笑みが浮かんでいる。なんだかんだ言っても、心配し心配されていたことが嬉しい二人なのだった。

「さて、今日はもう十分な体験しただろ？ もう帰んぞ」

「あーいよ、疲れちゃったよ。……おーい師匠。おんぶしてくれよ」

「ざけんなバカ弟子。戦場で、んなたわ言を言うのか？」

「ここは戦場じゃないのでおんぶー」

「……置いていくぞ」

「ああもう、分かったよ。自分で行きゃいいんだろ」

やはり師匠には実力でも口でも、勝てそうにない凧であった。  
しばらく2人は森の中を歩いてしたが、アインスが急に立ち止ま  
た。  
それを不審げな表情で眺める凧。

「アインスさん？ 急に立ち止まってどうしたんだよ。トイレにで  
も行ってえのかよ？」

「そんなしょうもないことなら良かったんだがなあ。……んなこと  
じゃねえみたいだぜ？」

アインスがそう言った瞬間に、前の木の影から中型の魔獣最強クラ  
スの『トロール』が現れた。

その2メートル強の巨体の頂点にある、暗く鈍く光る双眸が凧とア  
インスを捉えた。

そのオークをはるかに超える巨体の迫力に、思わず凧は後ずさる。

「おいおい、ヤベーよ。やつこさん、完璧にこつちを捉えちまった  
よ。……どうするよ、ナギ」

「そこで俺に振るの！？ 普通はアンタが、俺にいい案があるんだ  
任せろつつつて、作戦とか立てるもんだろっが！」

「ハッハッハ！ んなありきたりなことを、この俺がするかよ！」

「俺はありきたりであってほしかったがな!!」

2人が口論している間に、トルルは木で作った大きな槌つちを振りかぶって、アインス目掛けて振り下ろした。が、アインスは軽やかな動作でなんなくかわす。凧も転がるようにして、回避している。

「グオオオオッツ！」

トルルは今の一撃で2人を仕留められなかったのが気に入らないのか、怒ったように叫んだ。

アインスは、おお怖い怖いなどと軽い調子で言っているが、その顔には真剣な表情で埋まっていた。

歴戦の戦士であるアインスにとっても、トルルとはそれ程の相手なのだ。

トルルが、意外にも機敏な動作でアインスに襲いかかるが、手の中の槌が直撃するよりもアインスの魔法の方が早かった。

「……………」  
『ウインド・ストライク  
風の打撃』  
「」

アインスが魔法を完成させたと同時に、見えざる風の打撃がトロルに直撃する。直後に、アインスが叫ぶ。

「ナギイイー!!」

「……………分かってらあッ!!」

アインスの魔法によって後ろに下がらされたトロルの、さらに後ろから風がダンを構えて突っ込む。

体勢が崩れていたトロルにはかわす術など無く、ズドツという音と共にダンの剣身が深々とトロルの腹へと突き刺さる。

トロルは口から大量の血を吐き出し地面を揺らしながら、ゆっくりと地面に倒れ伏した。

「ふー、なんとかなったな。つうか、アインスさんが目で合図してきたけど、あんなんわかんねえよ!」

「んだよ、機転の利かねえやつだな」

その後も歯をむき出しにしてアインスに噛みつく風だが、そんな微笑ましい時間はなくなった。

トルルが血を流しながらも起き上がってきたのだ。

普通ならば考えられないことだが、あの時　　ダンを突き刺した時　　に、なにか柔らかい感触がしたがそれはトルルの豊かに蓄えられた脂肪の感触だったのだろう。

そのせいで、先ほどの一撃は致命傷たりえなかったのだろう。

トルルが起き上がってきたのに気づいたのは、凧の方が早かった。しかし魔法を使えない凧では、僅かに間合いの外にいるトルルを攻撃する手段は無く　　。

結果として、凧は槌の一撃をくらって吹き飛ぶアインスを見ているしか出来なかった。

「ッアインス!!!」

「…………ごほっ、バカヤロー。師匠を、呼び捨てにして、やがるんじや…ねえよ」

アインスは軽口を言っているが、その容態は明らかに今すぐに治療をしなければいけない程の、それ程の重傷だった。

しかし、アインスを治療するためにここを離れても、アインスは間もなくトルルに殺されるかもしれない……なにより、このキレたトルルが、自分を見逃してくれるはずがない。

だから、まずはこの怪物を仕留めなければいけないのだ。

アインスを助けるために、アインスの仇を討つためにも、もっと力が欲しい。

だが、今の自分ではあいつの間合いに入った途端に、ミンチにされてしまうだろう。

だから、もっと早さが。

ヤツの攻撃を避けるための速さが、ヤツが目視しきれない疾さが欲しい。

凧がそう願った刹那に、凧の中のなにかがカチリと、音を立てて噛み合った。

直後に、凧の見る世界が変わった。

目の前は化物が、なにか叫ぼうとしているが口を開いたままで、叫ぼうとしない。

いや、それは間違いでトルルは叫ぶために口を開いている途中だったのだ。

そして凧が一步駆け出したときには、すでにトルルの懐に飛び込んでいた。

いや、これもまた語弊がある。

凧が一步と思い込んでいるのは、視認すら困難なほどの速さで走っていただけにすぎない。

しかしこの状況に自覚があるにせよ、ないにせよ。

凧がダンを振るうのが先、ということに変わりはない。

「ハアアアアア!」

風が気合いの入った叫びと共に繰り出した一閃は、しかしトロールを即死させるには至っていないかった。

トロールは数歩ほど後ずさったが、それでも倒れずに踏ん張り、風を目掛けて全力で薙ぎ払った。

「ツツ!?」

ゴオウツと空気が悲鳴を上げ、槌が風に襲いかかる。

風はそれを見て、まだ終わりじゃねえよ、てめえをぶっ倒してアインスを助けんだよ、こんなところで終わってたまるかと叫ぶが声にならない。

まだだ、まだ終わりじゃねえと風は叫ぶが。

だが、槌は止まらない。

「(まだだ! まだやれる! もっとだ、もっと疾くなれよ!!)」

そして槌は振りきられた。

……ただし空振りで。

トロールは獲物<sup>ナギ</sup>が唐突に消えたのを不思議に思い、辺りを見回すが見

当たらない。

そこで、木の間から洩れていた光に影が差した。  
上を見たトロールの視界に入ってきたのは。

ダンの切っ先を、トロールの顔面の中心に向けて落下してくる風の姿であった。

「だああああッッ！」

全力で槌を振ったのでトロールの体制は固定されているうえに、そもそも身構えてすらいなかったトロールに、この一撃をかわせる訳がない。

果たして、風の一撃は正確にトロールの顔面の中心に突き刺さった。  
そして今度こそ、トロールは地面に倒れ伏した。

先ほど風がトロールの一撃を避けたのには、理由があったのだ。  
風がもっと疾くなれと願った瞬間に、風のスピードはさらに数倍ほど上がっていたのだ。

そして、体の反応速度や、純粋な移動速度、思考速度が数倍になったことによりジャンプして回避することに成功したのだ。

「ふう、なんか変わったようだな。ッそうだ、アインスは!？」

急いでアインスの元へと行ってみると、かなりの重傷だったはずなのに軽い怪我くらいまで治っていた。

不思議に思った凧だが、アインスの近くの草むらからハオが数匹出てきた。

「もしかして、俺たちの後を着いてきたのか？」

凧がそう聞くと、皆一様に胸なのであろう場所を張った。

どうやら凧が問いかけた通りだったらしい。

「じゃあさ、このオッサンも治してくれたのか？」

今度の問いにも、ハオたちは胸を張った。

そうなのだ。

ハオは可愛いという意見ばかりだが、実は自身の魔力を用いて治癒を施すことが出来るのだ。

そうとは知らない凧だが、師匠を助けてくれた優しい魔獣たちに礼

を言う。

「ありがとうな。俺だけじゃきつと、いや絶対にアインスは治せなかつた。だから、ありがとうな」

ハオたちは皆気にするなとも言うように、ピョンと跳ねた後に自分たちの住み処へと帰っていった。

その様子を見送ったあと、凧はアインスを背負って走り出した。

運がいいことに、先ほどの謎の身体強化は継続中なので全力で走って王都レシティアまで帰った。

この能力チカラって何なんだろうな、と凧は思いつつ生きているということをしつかりと嘔み締めることにした。

王都までは、20分くらいで着くだろう。

とりあえず、帰ってゆっくりしようと思った凧。

日はまだ、高く昇っていたのだった。

三話 『もっと疾くなれ!』 (後書き)

本文に出てきた謎の能力は風の保有能力です。オウソク・アビリティ

次回で能力の説明をアインズ先生がしてくれますので乞うご期待!

四話 『保有能力（オウン・アビリティ）』（前書き）

今回は説明回くさくなりましたが、どうぞ。

#### 四話 『保有能力（オウン・アビリティ）』

医務室のベッドの上で、アインスは外の景色を眺めていた。

ちなみに隣のベッドは、カーテンで区切られており、さらに上から固定用のクリップで留められていた。

だが、そもそもアインスはまだベッドから出られないのだが。

アインスは昨日の出来事を思い出していた。

アインスが吹き飛ばされて風が単身、トルルに挑まなければならなくなつたその時に。

風の姿がブレたのだ。

それは正確ではなくて、アインスですらも視認することが難しいほどの、そんな超人的な速度だった。

油断してたとか反応が鈍くなつたとか、んなレベルじゃなくて単純に弱くなつちまってやがるな。

アインスの実力はこの魔法学院内でも高ランクなのだが、いかんせん実践から離れすぎてしまっていた。

その事実が、アインスの長年かけて築き上げてきたプライドをズタにしていった。

こんなザマで、よくもまあ風の師匠だなんてやってるもんだ。

アインスは自虐の笑みを浮かべるが、そこへ。

食堂から昼食を持って、医務室へと一直線に走ってきた風（弟子）が勢いよく飛び込んできた。

「アインス！ 昼食を持ってきたぞ、しかも料理長が栄養バランスまで考えてくれたらしいぞ！ きつちりと食べよ？ ……そんなでもって、もっと俺を鍛えてくれよ。俺の大切な人を、もう二度と傷つけられたくないから、だからもっと俺を鍛えてくれよ！」

最初の方はアインスを笑わそうとしたのか、馬鹿みたいなテンションだったのだが。

やはり、抑えきれなかったのだろう。

途中からは尻自身の、本当の偽りない剥き出しの感情をアインスへとぶつけた。

ただ、ただ無心に護るために力を望む。

その姿を、アインスはとても眩しく感じた。

はあん。こりゃあ、俺らみたいな古い年のやつらは、若いやつらに世代交代って訳なのかよ？

そう感じたアインスだったのだがその顔には先ほどとは違う、純粋に嬉しそうな笑顔があった。

「おい、馬鹿<sup>ナキ</sup>弟子。早くよこせよ。腹あ減ってんだよ、こっちはよ。

……それと、一応礼も言っておくぜ」

「それでこそだぞ、師匠<sup>アインス</sup>」

それから昼食の『胃と体に優しい怪我人用定食』を、ペロリと完食してしまったアインスだったが、唐突に凧の方を向いた。

「なあ、ナギ。お前はよ、どうやってあのトロールを倒したんだ？」

「……いや、俺もあんましわかんねえんだけどさ、急に速くなったんだよ」

「速くなった？」

アインスには理解が出来なかった。

どう速くなったんだ？

つか、単純に動きが速くなっただけじゃ、素人に毛が生えたくらいのナギがあの中型魔獣最強クラスのトロールを倒すなんて不可能なはずだ。

仮に、そう仮にだ。

ナギがあのでカブツを殺ったとして、なぜナギはほとんど無傷なのか？

そんな収まりのつかない思考が無限にループする。

そんなときに、凧がうんうんと首を捻りながらアインスの問いに答えた。

「おう、そうなんだよ。なんつーか、反応が早くなったし、視界の中の動きがノロくなったりした。後は、全体的に速くはなったんだけどさ……それとトルルがああハンマーみたいなのを俺にぶち当てようとして、俺がもつと疾くなれって思ったら、今度はものすごく速くなっていたんだ。簡単に考えてみても、あーっと、数倍くらいは疾くなったと思うけどな」

アインスは驚愕した。

もしそれが本当なら、こいつの中にはとんでもない才能が潜んでやがるなと考えた。

てえことはだ、日に日にメキメキと成長してやがるのは、この何かに関係しているのか？ということにも、考えを巡らせた。

そこまで考えて、ふとアインスは気づいた。

こいつあ、もしかや『保有能力』オウン・アビリティなんじゃねえか、と。

しかし、アインスにはどうも納得がいかなかった。

考えてみてほしい。

異世界から来た風が、そんな強力な『保有能力』をその身に宿していたのだ。

説明がつかないというものだろう。

だが、それでもなお。

アインスは自分の愛弟子（風）を信じることにした。

自分の命を助けてくれた異世界から来た、この男は決して大切なことを見失うことはないはずだから。

それにさっき、風自身の本当の気持ちを聞かせてもらった。

だからアインスは、風を疑うことなどする必要すらなかった。

だからアインスは、風に包み隠さずに全てを話すことにした。

「……ナギ。こいつは俺の仮説なんだがよ、そいつは『オウン・アビリティ保有能力』  
だな」

「『保有能力』？ たしか、この前そんな能力がチカラあるって言ってた  
っけ？」

「そうだ。人にはそれぞれ、向き不向きがあるが努力すりゃあ手に  
入れることがある能力がチカラある。それこそが」

「『保有能力』」

アインスは、きちんと覚えいたことに感心しつつ、その通りと笑っ  
た。

「本来、『保有能力』つつうのはこれが欲しいから、そのためメ  
ニューの訓練をこなして、そしてやっと手に入るつつうモンなんだ  
が……」

「普通に俺が手に入れちゃった、と」

「いやそれ自体は、まあわりかし有るんだよ。……問題なのは、つ  
てそんな大層なモンじゃねえんだが、お前のその能力が全く聞いた

「こともないような能力なんだよ」

そのアインスの言葉に、凧の思考が停止する。

「は？ 聞いたこともないような能力？」

「俺のんが？ 俺の能力が？」

「ただ速くなるだけじゃなかよ、どこがおかしんだ？」

凧の頭の中は、？マークで一杯だった。

そんなようすの凧を見て、アインスは微笑しながら話しかける。

「オイオイ、あんまし簡単に考えなよ。速くなるってえのは、そんな簡単なモンじゃねえんだが、分かってんのか？」

「え、速くなるんだろ？ 動きとかが、じゃないのか？」

本当に分かってなさそうな凧を見て、アインスは思わずため息をついた。

「あのなあ。速くなるってえのは、簡単なことじゃないんだよ。しかも、お前の言う通りだったらな、何かのスイッチを変えたら速さも変わるはずだ。……だから、そいつを使いこなせるようにしろ。」

じゃねえと、自分の大切な人を護るなんざ、夢のまた夢だぞ？ 分かったな、ナギ？」

「分かった！」

返事だきゃあ元気だからな、こいつはほんとによ、とアインスは呟いた。

もちろん、凧には聞こえていないが。

そっぴや、とアインスは凧の方に向き直る。

「お前よ、その『保有能力』の名前ってなんにするんだ？」

「えっ？ 名前とか決めるもんなのか？」

「当たり前だろ。作戦とか立てるときに説明に困るだろうが。……それに」

凧はなるほどな、と頷きつつアインスの言葉の続きを待った。だがしかし、なぜか嫌な予感しかしない。そして、アインスが、言った。

「カッコいいじゃねえかよ、お前もそう思うだろう？」

とりあえず、アインスの頭を一発殴っておいたのは間違いではない  
と思っただけであつた。

凧が肩を上下に揺らしているのを見て、アインスが頭をさすりつつ  
凧にニヤアと気持ち悪い笑みを浮かべていた。

「な、なんだよ？」

「いやあ、なんか妙に緊張したかんじな弟子のことを解してやるの  
も、師匠の仕事だしな」

「……はあ、まあいいか。それよりも、名前決めたぜ。……この『  
保有能力』の名前は、『アクセラレーション加速』。全てを、加速させるチカラだ！」

「ふーん。まあ、悪くはないんじゃないか？ ……そうそう、もひ  
とつ仮説が出来たんだが」

「仮説？」

「そうだ。そして、これにはお前の『加速』も関係している。その  
仮説とはな、お前の圧倒的とも言える習得速度に『加速』が関係し  
ている、ということだ」

「俺の習得速度に、『加速』が、関係している？」

「ああ……お前の『加速』とは、基本的には速くすることを基本と

しているな……だが、その大きな『加速』の枠からこぼれ落ちたものが、お前の日常的な部分にも干渉していたのだろう……これなら、ただの一般人だったお前がわずかに二週間足らずで、トルルを倒したことの説明もつくというものだ」

「……」

凧はそれを聞いて俯いてしまったが、アインスはそれを気に留めなかった。

だが、いきなり凧がガバアと顔を上げた。

「うおっ！ いきなりどうした？」

「決めたよ、俺！」

何を決めたというのだろうか？

それよりも、凧の瞳がキラッキラに輝いているのを見て、アインスは引いた。

しかし、引きつつもアインスは凧に問い返す。

これも師匠としての愛がなければ、切り抜けられなかっただろう。

師匠万歳！とアインスが現実逃避している間に、凧がすごい速さで昼食の盆を持って、走り出そうとしている。

それにアインスは、

「おい、廊下は走るなよ!!」

と教師根性全開で叫んでいた。

そついや何を決めたのか、聞いてなかったなと思いつくアインスだが。

まあどうせ、ナギのことだし大したことなんか言っていないだろう、と当たりをつけた。

その後の医務室には、規則的な寝息と、学院長の寝息があったのだ。  
つた。

四話 『保有能力（オウン・アビリティ）』（後書き）

となりで寝ていた（サボっていた）のは、学院長でしたってオチです。

次回からは長編になる予定です。

五話『レッサー王領ツアー』（前書き）

今回から大長編に突入します。

といっても、長編が纏まって大長編に、という感じですね。

グダグダはやめて、シンプルに、ご覧あれ。

お気に入り登録が10を超えました！

この調子で頑張ります！

## 五話『レッサー王領ツアー』

リディアの部屋にあるベッドはでかい。

一般の生徒の約二、三倍はある。

そのベッドの隅っこにリディアと凧が寝ている。

そのベッドの窓際の膨らみが、もぞもぞと動いた。

……ただ窓際で寝ているリディアが起きただけなのだが。

リディアが凧の方へ視線を向けると、すでにそこには凧はいない。

凧はリディアが起きるだいたい一時間前から朝の修行へと向かっているのだ。

「たまには、朝起きたらすぐにおはようって言いたいな……でもそれってなんか、夫婦みたい」

そう言った瞬間、きゃーと顔を赤くして小さく悲鳴を上げた。

「（何考えてるんだろ、私……ナギとは何にも無いのに、なんでこんなこと考えちゃったの？）」

しかし、今まで恋のこの字すらも知らなかったリディアに、分かる

わけがなく時間は過ぎるだけだった。

その頃、凧はアインスの“全力”での、剣だけでの模擬戦を行っていた。

凧は新たに得た『アクセラレーション加速』を使って。

アインスは持てるチカラを使って、全力で。

正直なところ、アインスは凧の才能にある種の恐怖すら覚えていた。凧は『加速』を発動させれば、本当の意味で肉体の限界が訪れるまで無限に加速し続けるのだ。

そして凧は危険な領域の境を見極めている。

つまり、凧は『加速』を使いこなしている、ということなのだ。

医務室で凧に『加速』という能力がお前にある、とアインスが説明したのは約一週間と少し前だ。

普通、『オウン・アビリティ保有能力』を扱いこなすのには、基本的には半月〜二年はかかる。

だが、凧は自らの『加速』からこぼれ落ちた習得速度の加速で、通常なら考えられない速度で使いこなしてしまっているのだ。

だからこそ、凧と対等な速さで相対するために、アインスは全力でいかなばならないのだ。

全力で来いと言ったのに、中途半端に相手するのは凧に失礼だし、そもそもそう言ったならアインスは全力を出さない訳がない！

それでも凧の速さとは、初見ならば絶対的なアドバンテージとなる。

ただでさえ何度も修行の相手をしているアインスでさえも、何度か  
凧の姿を見失っているのだ。

こりゃ俺もマジで鍛え直す必要があんな

アインスは凧と剣を打ち合わせながら、今後の方針を決める。  
その間も、凧は疾風の如きスピードでアインスへと肉薄する。

なんだよ、この速さは！

人間って、マジでこんな速さ出せるんだな

そんな余裕がありそうなことを考えつつ、だがアインスは防戦一方  
だ。

しかしそれも仕方がないだろう。

音速を軽く超えてそうなるスピードで切りかかられたら普通は、普通  
ならば剣を合わせることにすら不可能なはずだ。

それでもアインスはやってのける。

元軍人としてのの。

先達としてのの。

何よりも師匠としてのプライドがそれをやってのけさせるのだ。

だがやはり、音速超えの剣戟など避けきれるはずもなく。

アインスは凧の一撃で肩から切り裂かれ  
ることはなく、

ギリギリ防いで吹き飛ばされるだけに終わった。

「ぬおつ。てめ、ナギイ！ 俺を殺す気で来やがっただろう！

…確かに俺は全力で来いと言ったが、殺す気で来いと言った覚

えはねえぞ！」

「でもよ、全力で来いってことは本気出させてことなんだろう？ だったら構わないじゃねえか……それに、ギリギリだけど防いでたし」「ギリギリは余計だ、ギリギリはよ。つか普通は、あんな音速超える剣を受け止められるか！ 誉められるべきことなんだよ、これは！」

アインスは殺す気が、と凧に掴みかかる。  
だが凧は納得いかない様子で、

「えー、でもなー。師匠って普通は、弟子を軽くいなすもんなんじゃねえの？」

と言った。言いのけた。

それにアインスは心底疲れはてた様子で返す。

「普通はな。お前は普通じゃないから言ってるの、分かる？」

「俺は普通だと思っただけどなー？」

どこの世界に音速で動く人間を普通と言うやつがいるだろうか。とりあえずアンスタインには、そんな馬鹿が目の前に一人いた。

「じゃあ弟子なんつーのは、師匠を越えていくものなんだよ。これで理解したな？」

「うーん、でも俺はまだアインスは越えていないと思ってるんだよな」

「は？　なんでだよ」

全く理解できんと言いたげなアインス。  
それ気にしたそぶりも見せずに尻は続けた。

「いやだって今日のは剣だけだろ？　攻撃魔法も『保有能力』も使っていないのに、越えたとかおこがましいぜ」

「まあ確かに一理あるが、だが剣だけでもお前はすでに俺を越えた。魔法には探知系の魔法もあるし、それで高速で動く敵を察知しつつ攻撃する、なんつうスタイルもある……だがお前の速さをもってしつれば、そんなもん無意味だ」

どうやらアインスは自分の実力を取り戻すためにも、凧の特訓を一時休止にしたいらしい。

弟子をおろそかにする師匠など、許されるのか？

唯一の救いは、凧が馬鹿だからそんなことを考えているとは露も知らないということだろう。

誰にも分からないと思うのだが。

当の凧はやはり、へえそうなんだ、と新しい魔法についての知識を得たことを喜んでいた。

「じゃあ俺の『加速』ってすげえんだな」

「そういうことだ。だから誇っていいぞ……あと『保有能力』はシンプルなほど、応用力があるからな。色々と考えておくんだぞ」

んじゃ俺は部屋に帰るわ、と後ろ手に凧に手を振り帰っていった。

その後、食堂の手伝いも終わりどうすっかなーと、ぶらぶらしていた。

そこに後ろから、なにか声をかけられた。

その声は毎日、必ず聞く声だ。

後ろを振り向くと、案の定そこにいたのはリディアであった。

「こんなところに居たんだね、ナギ」

「どうかしたのか？　なんか慌てるように見えるけど」

「そ、そんなことないよっ?!」

「いやそんな思いきり否定しないでいいけど」

そんな会話をしつつ、今更ながら風はリディアの顔が赤いことに気づいた。

一応風は、親切心でリディアに言うておくことにしておいた。

「なあ、リディア。なんか顔が赤いぞ？　……もしかして、俺を探すのに走ってたりでもしたのか？」

「うえ!?　そ、そそんなこと、なかないよ!？」

「いや、なんでそんな焦ってるんだ？」

風が言ったことに、さらに顔を赤くさせて焦るリディア。

これ以上なにかを言われちゃったらもたない、とばかりに風に用件を話すことにした。

なにがもたないのかは、リディア自身理解してなかったが。

「ナギ、あのね。この前、雑誌のアンケートに応募したんだけど。それが特等賞のツアーに当選したみたいでさ、十人くらいのお友だちを誘っても構いませんよってあったから」

「で、俺も一緒にどうかってことでいいのか？」

リディアが言いたかったであろう言葉の続きを風が引き継いだ。それにリディアは顔を綻ばせながら、頷いた。

「うん、良いかな？」

「おう、もちろんだ。それでいつから、どこに行く予定なんだ？」

「それはね、レッサー王領トワイライトって場所に夏休みの間に行く予定にしておいたから。だからナギも、わざわざ料理長に許可取らなくても大丈夫でしょ？」

「おお、そこまで気遣ってくれるのか。ホントにリディアは優しいな……リディアが好きになってくれたやつは、さぞかし幸せなんだろうな！」

その台詞にリディアは思わず赤面した。  
それを気取られないように風から顔をそらして、とりあえず笑って  
おいた。

「そう、かなー？ アハハ、ハハ」

「あれなんか、笑い方ひきつってないか？ ……もしかして、俺な  
んか悪いこと言っちゃまったかな？」

「え？ そ、そんなこと無いよ？ むしろ嬉しかったよ」

「そっか。リディアは笑ってる方が可愛いからな」

自信満々な笑顔と共にそんなことを言われたので、リディアはさら  
に顔を赤くさせた。  
もう無理、恥ずかしいよーと半分泣きそうになりながらリディアは  
去ることにした。

「ナギ！ 悪いけど、私もう自分の部屋に戻るね！」

「ん、おうわかった。俺はしばらくいつもの場所で修行しておくよ」

「うん分かった、また後でね！」

そういつて、かなりのスピードで走り去っていったリディア。それを見て凧は、先生に見つからないといいな、と一人呟くのだった。

余談だが、リディアはこの後先生に見つかり叱られてました。

それから時は流れ、夏休みに突入したレッサー王立魔法学院。

凧が呼んでいるいつもの場所では、ツアーを前日に控えながらも、いつも通りに修行に明け暮れている凧とアインス。今回はそこに、リディアも居た。

別に修行に参加している訳ではなく、見学に来ているだけだ。

アインス曰く、美女美少女は居るだけで目の保養になる。癒し系ならなおのこと良し、だそうだ。

そんなわけで、被害の来ない場所でのんびりと座っているのだ。

「ふわぁ、ナギってすごいなあ。全然見えないや。もしかして、あ

れって『保有能力』なのかな？」

初見で看破したりリディア……というよりも、音速を軽く超えるような人外速度なんか、『保有能力』以外で出せるわけないが。

こんな日常が、いつまでも続けば良いのにな、とリディアは半ば信じ込んでいたし、願ってもいた。

だが、次の日のレッサー王領トワイライトへのツアーをきっかけに、全世界規模の戦いへと巻き込まれていく。

血を血で洗う。

そんな人の醜い側面ばかりが、戦いではない。

あらゆる種族も参加させられる。

そんな地獄のような戦いへと、凧とリディアを中心に巻き込まれていくのだ。

彼らはまだ知らない。

その地獄を。

彼らはまだ知らない。

その地獄から、二柱からなりし神の頂点が、現代へと蘇ることを。

彼らはまだ、知らない。

その神が、“彼”であることを。

その神が、“彼の中に閉ざされている存在”であることを。

彼らの激動の人生は、このツアーを境に始まっていくのだ。

五話『レッサー王領ツアー』（後書き）

最後のは、伏線といますか、ネタバレといますか。設定は見えてないって人は、分からないですね。

そもそも、拙作を見てらっしゃる方が居るかどうかですが。

ともあれ、次回をご期待ください。

## 六話『ダンの目覚め』（前書き）

もみじ様より、ご指摘がありました。

お恥ずかしい限りです。

今後はこんなことが無いようにしたいです。

お気に入り登録が20を超えました。

もっと頑張ります！

## 六話『ダンの目覚め』

レッサー王国王都レシティア南門。

そこに凧とリディアとアインス、他リディアの『お友だち』が数人、なぜアインスが居るのかというと、単に凧の修行相手と引率をリディアから頼まれていたからだ。

よってこの場にアインスも参加しているのだ。

南門には、小規模団体用の一般的な馬車が三台ほど用意されてある。

一台目には、凧とリディアとアインスが。

残りの二台には、それぞれの『お友だち』が別れて乗ることになっている。

彼らは不満げな顔をしていたが、リディアと一緒に乗るのが年の離れたアインスと、一般市民である。そもそも一般市民ですらない。凧だったのですぐに余裕綽々な態度へともどった。

そして今はそれから一時間ほどたった。

道中、リディアは妙に凧を意識してしまいあまり顔を見られなかった。

対する凧はリディアの様子が妙なので、積極的にリディアに話しかけた。

結果として、

顔を赤くさせている。

凧が話しかける。

さらに顔が赤くなる。

凧が（以下略、となっていたのだ。

アインスはその様子をニタニタしながら見ていた。

凧の、なありディアがなんか変なんだけど、という言葉を完全に無視して。

そんな、なかなかカオスな空間で過ごすことはなかったお友だちたちは、ある意味良かったかもしれないと言えるだろう。

レッサー王領トワイライトは、グライデア大陸一の観光地だ。

美しい自然と豊かな動植物の種類。

何より一番の見所は、アンスタインで三本の指に入るほどと名高い

『トワイライト湖』だ。

……そういうわけで今、駐車場には大量の馬車が停まっていた。

ちなみにアンスタインでは魔法科学が発達しているのだが、それは一部の話なのだ。

アンスタインの八割は未だに地球で言うところの中世の文化とほぼ変わらないレベルなのだ。

それはこのレッサー王国も同じだ。

馬車から下りてきたお友だちたちは、そこかしこに停まっている馬車を見て、眉根を寄せた。

「おいおい、何なんだこれは？ 僕たちよりも低級な存在である市

民が！ そう、市民がなぜ高貴なる存在の僕たち貴族と同じ場所を  
観光しようとしているのか、分からないな！」

リディアのお友だちの中でも一際偉そうな少年が、いきなりそんな  
ことを言い出した。

「（いや観光地なんだからそれくらいは、普通だろ。あいつ馬鹿か）  
」

「（ナギ、貴族つつうのは全員、いやほぼ全員はあんな馬鹿ばつか  
しなんだよ……守るべき市民たちを下に見ている。まるで自分たち  
が居ねえと世界が回るはずがないと、そう思い込んでいるんだよ）」

「（だからってさ、こんな横暴とか自分勝手とかいうレベル超え  
てるじゃねえかよ……そんな高貴なる者とか言ってるやつをする  
ことじゃねえよ）」

そういい、凧は今にも少年に飛びかかりそうになっている。

アインスは凧を宥めているが、『加速』を使われるとたまったもん  
じゃない、と羽交い締めに移行した。

リディアはその光景を見て若干引いていた。

引率　もはやアインスは放棄している　が、遊んでいるの  
を見てお友だちたちはリディアへと近寄っていった　。

が、リディアは見なかったことにして、戯れている風とアイ  
ンスのところへ歩いていく。

お友だちたちはその後には憑いていく（誤字ではない、決して）。

「アインス先生、それにナギも。そろそろ行きましょう」

「ん、それもそうだな。おし行くぞお、着いてこいよ」

アインスは返事を聞かずにちゃっちゃと進んでいく。風はいつの間  
にか横を歩いていく。

リディアは待つてよナギ、と言いながら小さく駆けていく。

貴族の少年たちは、市民ごときが前を行くなとばかりに早足で歩い  
ていく。

「よおし、お前らはここらへんで待つてる。俺が人数分のパンフレ  
ットをもらってきてやる」

アインスがそう言うと、貴族の少年たちは一気にベンチにどっかと  
座った。

しかしベンチの感触が気に入らないのか、口々に文句を言い始めた。

「なんだ、このベンチは？ 無駄に堅すぎるんじゃないのか？」

「確かにこれは堅すぎるな、困ったものだ」

「あたしこんなんじゃないよ、まともな休憩も出来やしないわよ」

「全くこの責任者はなんて無能なんだ？」

口々に文句を言っている彼らだが、十メートルほど前に観光者案内用のカウンターがある。つまりアインスの耳にはもちろん、受付係の女性の耳にも届いている。

アインスは振り向いて頭を掻いて、はあ……やれやれ全くとため息を吐いていた。

受付の女性は奥の方へと入っていった。

恐らくは責任者を呼びにでも行ったのだろう。

ちなみに風はリディアに抑えられていた。

抑えているというよりは、リディアがお願いしているようだ。

風とて男なので、リディアみたいな美少女にお願いされたら断ることなど出来ないのだろう。

そこに責任者であろうガタイの良い中年の男性が現れた。

その男性の背後には何か、オーラと呼べるようなものが出ている。

そのオーラを出したまま男性は口を開いた。

「お客様、申し訳ありませんが少々お静かにお願い致します。ここには他に多くのお客様がいらっしやいます。なので、あまり大きな声をお出しにならないようにして頂けますか」

「……きつ、ききき、貴様、貴様貴様ッ！」

先ほどから一番（もちろん悪い意味で）目立っていた少年は、顔を真っ赤にさせて叫んだ。

凧はそれを見て、あの歳になっても社会常識を突っ込まれたのが恥ずかしいのかな、と合っているようで合っていないことを考えていた。

凧に変なことを考えられているとは露知らず。

貴族の少年はさらに続けている。

「大体だ、貴様アツ！ 高貴なる者である貴族の僕に、その口の聞き方はなんだと言っただい！」

「申し訳ありませんお客様、これは産まれたときからなので今さら直しようがありません」

「貴様、未だに立場が分かっていないようだな？ ……貴族の僕が、こうしろと言ったら、はいと答えるだけなんだよ！ ……それすらも出来ないのなら、この僕が直々に引導を渡してやる」

「そこらへんでやめとけよ坊っちゃん」

二つの方向から声が聞こえた。

少年が視線を巡らせると、引率であり教師のアインスがいた。慌ててもう一方に視線を向けた。

やはり、凧だった。

少年は自分に命令したのがただの市民であり何の力も持たない凧だったので、一気に頭に血が上がった。

「キいサあマああああ！ ただの市民の分際で、貴族の僕に命令するかッ！」

「ハン、貴族だからどうだっつうんだよ？ 魔法くらいしか取り柄がないくせに、偉そうにしてんなよ馬鹿が」

「貴様、今なんと言ったのだ？」

いつまでも高圧的な少年に凧は、リディアに怒られるかなあ、でもいっかなと一息を吐いた。

そして、言った。

「うだうだうるせえな。馬鹿かてめえはつつたんだよ、馬鹿が！」

「な、何だと!?!」

「んだあ？ 言葉も理解できねえのかあ？ ただの馬鹿じゃなくて、ド馬鹿だったようだな！」

「貴様、それは貴族たる僕への」

「貴族貴族ともうるせえな！ そんなにそれが大事なのかよ！ 自分は弱えからって、そんなもんに頼ってんじゃねえよ！ ……男なんだったらよ、たまには、いやいつでも自分の力<sup>てめえ</sup>だけで戦ってみやがれ！」

その言葉を聞いて、今まで糾弾の対象になっていた男性は嬉しそうに笑った。

受付から動かないアインスは、凧の言葉が響いたのかニヤツと笑っていた。

リディアは顔を真っ赤にして、ふわぁと言葉にならない言葉を口にしていた。

一方で、貴族の子女たちは不快感を隠そうともせず顔に浮かべていた。

口々に、野蛮だ、流石は無知な市民、たかが市民なら殺しても良いわよねなどと言っている。

「君たち、まあ待ちたまえよ……その野蛮な男は、自分の力で戦えと言ったのだ。ならば貴族の持つ力を見せてやるうではないか」

少年がそう言うと、子女たちからの歓声が一気に湧いた。それを見て、少年はニヤリと冷酷な笑みを浮かべた。

「おい、市民。今ならばまだ、申し訳ございませんでしたと謝れば許してやらんこともないのだが？」

「必要ねえよ。どうせ、やはり許してやらんよ、とでも言うつもりだっただろ」

「ぬっ、市民ふぜいが貴族の考えを見透かそうとするなど、無礼千万！　ここで打ち首にしてやる。さあ！　頭を差し出せ！」

凧は本気で言ってるのか、この馬鹿はと、目の前の少年が少し哀れに見えた。

それが目の前の少年には、自分を哀れんでいると理解したのかは分からないが、馬鹿にされているとは感じたのだろう。少年は怒髪天を突くと言わんばかりに激昂した。

「貴様、何だその顔は！　僕を馬鹿にしているのか、ふざけるなッ！」

「馬鹿にしてるんじゃないで、哀れんでいるんだよタコ助が。それにてめえの金切り声は耳に響くんだよ。やるんなら、場所を変えるぞ、ここだと迷惑がかかるからな」

「はっ、場所がどうだというのだ……ああ、そうかそうかそういう訳か」

少年は急にさも納得したといった調子で頷きだした。

「つまり貴様は、少しでも敗北するところを誰かに見られないようにしようと言うわけだな？ ……やはり下賤なる市民の考えは理解できんな」

少年の、そのあまりにも突飛な言葉に子女たち以外の誰もが、はあ何言ってるんだこいつと言いたげな表情になっていた。  
リディアは王女らしく控えめに、残念そうな表情をしていた。

「……なあ、おじさん。人が居なくて広い場所って無いかな？ 俺ってけっこう動くんだよな」

「かしこまりました。では、私に着いてきてくださいます……先ほどはありがとうございます」

そして先に行く男衆三人。責任者であろう男性とアインズと風。その後を、未だしつこくねちねち文句を言っ歩いて歩く子女たちが。

リディアは風たちを追いながら、様々なことを考えていた。特に、今しがた追い抜いた子女たちのことを残念に思っていた。

こんな人たちが次の当主なの？

レツサー王国は大丈夫なの？

それにこの気持ちも分かんないよ……ナギ。

そんな思いが、リディアの胸の中で渦巻いていた。

今の季節には使われていないアスレチックの草原で、風と少年は十メートルほど距離を開けて向かい合っていた。

「僕はサイヤン伯爵家次男ライル・アルダ・サイヤンだ。二つ名は『風撃』。貴様に僕の風を止められるかな？」

風の目の前のライルというらしい少年は、どうやら風が得意らしい。

凧は背負っていたダンを抜いた。  
その神が使っていたとされる剣は、所々に錆が浮いているが神々しさは微塵の揺らぎも感じられない。  
ダンを見てライルは、はっやはり所詮は下賤な市民かと依然として凧を見下している。

「戦いでわざわざ受ける必要なんかないだろ。まさか貴族ってのは、そんな簡単なこともわかんねえのかよ」

「貴様、覚悟は良いな？」

ライルの顔から表情が消えた。  
貴族としてのプライドを、著しく傷つけられたのだろう。  
ライルは指揮棒のような杖を、凧に向けた。

「貴様、名乗れ。市民にもそのくらいのごことは許してやるわ」

凧は、そのどこまでも高圧的な態度につい苦笑しながら名乗った。

「ナギ・ハツキ。別に覚えてくれなくてもけっこうだぜ……さて、さっさと始めて観光しようぜ」

「貴様、どこまでも僕を舐めてるな？ 後悔するなよ！ ……  
風<sup>エア</sup>、  
剣<sup>セイバー</sup>！」

凧はライルの出方を見て呆れた。

いつまでも考えていることが平行線だということではない。

そのあまりの魔法の完成度の低さではなく、詠唱の遅さにもな  
く。

ただ、そこに突っ立っているだけのライルの戦いへの知識不足に呆  
れ果てた。

なんで接近戦を仕掛けてこないんだ？

誘っているわけじゃ……ないだろうし。

もしかして、アインスみたいに戦えるやつが珍しいってことなのか？

自己完結した凧は、眼前に迫り来る風の剣を真っ向から斬り弾いた。  
その様子を見ていたアインス以外の全員が、驚いているのが凧には  
手にとるように分かった。

俺も最初出来たときはマジでビックリしたからな。

「なっ、何だそれは？！ 異端だぞ、魔法をただの剣で斬り裂くな  
ど！」

「ハハッ生憎だが、こいつあただの剣じゃあないんだよな！」

「だったら何なんだ！」

その悲鳴のような問いに、凧は笑って言った。

「せいじん聖神の剣だ」

ライルが問い返すよりも、尚早く。

凧の蹴りがライルの左脇腹を直撃した。

地面に転がり、左の脇腹を押さえて呻きながらすくま蹲っているライルの首筋にダンの切っ先を突きつけて凧は問いかける。

「続けねえよな？」

「……うぐ、もう……僕の負けで、良い」

息も絶え絶えに答えたライルに、凧はそうかとだけ返した。

結局はただアインスが凧の成長を見て、リディアが貴族たちの先行きを不安に思い、責任者の男性が貴族への不満を募らせ、子女たちが不快感を露にするだけの何もない決闘だった。

あの決闘の後、ライル以外の貴族の子女たちは不愉快だと言って帰っていつてしまった。

ライルはアインスから、真の貴族とは何ぞやというのを聞かされて改心した。

案外、素直でいいガキじゃねえか。

アインスが見てる前で、ライルは凧に謝っていた。

貴族至上の風潮が強いレッサーでは、なかなか見ることが出来ない光景だ。

凧も笑って構わないと返した。

いつかこんな光景が、レッサーのそこかしこで見られるようになってたら良いんだがなとアインスが独りごちているときに。

奴はやって来た。

頭から尻尾の先までおおよそ十一、二メートル。

頭の高さは五メートルほどもある。

獅子のような胴体と、醜く歪んだ怪物の顔。

全体的に濃い紫の剛毛を生やし、各部に重厚な甲殻が見える。

そして、何よりも目を引くのは雄々しく天を突く一メートルほどの鈍く光っている角だ。

この規格外の怪物は、密林の覇者。

大地を駆ける大型魔獣の一体『ガドツソス』。

その異様に、全員が瞬時に動くことなど出来ないでいた。

アインスがいち早く動きだし、全員に指示を出す。

「ッ！ お前らなにブーツと突っ立ってるんだ！ あの角で串刺しにされてえのか！」

その言葉を聞いて、三人の動きは様々だった。

リディアは恐怖によって未だ動けず、ライルはそそくさと陰に隠れ、凧はダンを抜いて真っ向からガドッソスと対峙していた。

アインスは凧の行動にギョツとして、叫んだ。

「ナギ、何やってやがるんだ！ ……まさかお前よ、勝てると思っ  
てねえだろうな？ 中型最強クラスのトルルを倒したからって、  
いい気になってんなよ？ あのトルルは、まだ子供だったやつだ。  
大人のトルルはな、そいつとさして変わらねえサイズなんだぞ！  
それでもトルルは、大型魔獣には手も足も出ねえ強さなんだよ……  
そんなやつにお前は勝てるのか、ナギ！」

「……………それでも俺はやるんだ」

アインスの、もはや叩きつけるような忠告に、凧は小さく返す。

「俺さ、異世界から来て帰る手段も分かってねえんだよな……だけど、アンスタインもいい場所だからさ、そんないい場所を作ってくれてるアインスとリディアを守るために、俺はダンを手に入れたんだ」

そんな凧の本音が零れ落ちたような台詞に、アインスはもう何も言えなくなってしまうた。

だからアインスは凧と共に並び立つ。

「世話のかかる弟子は大変だぜ、全くよ」

「そう言いつつ笑ってるんだから、頼りにしてるぜ師匠！」

「任せろよ、馬鹿弟子イ！」

そう言うや否や、アインスは得意な属性の火によって攻め立てる。時に炎球、時に鞭。凧も負けてはいない。アインスの効率的な魔法によって僅かながら隙が出来る一瞬を狙って、『加速』を使いつつダンで斬りつけていく。

だが相手は単独で、一個大隊を壊滅させることが出来る大型魔獣だ。たかだか二人だけでは、勝つことなど不可能に近いのだ。

ガドツソスが風の方に振り向こうとしたときに、ガドツソスの右目に不可視の剣が突き刺さった。いや、不可視と言うと語弊が生じる。正確には、半透明の剣が右目に突き刺さった。

ガドツソスはそれに怒った、ということではなく。

極めてゆっくりとした動作で、魔法（風剣）を放ったライルへと振り向いた。

それを見てアインスは不審げな顔になった。

そんなアインスを知らんふりして、ガドツソスは時速八十キロを超えるほどの速度で駆け出す。

だがそれほどの速さなら、風の『加速』で簡単に追いつける。

風が尻尾を斬り飛ばそうとした時、ガドツソスが消え失せていた。その代わりに、先ほどまでガドツソスがいた場所には大きな影があった。

風は理解するよりも早く、その場から全力で離れた。直後、その場にガドツソスが尻尾を叩きつけながら着地した。

自分のところまで戻ってきた風に、アインスは自らの考えを聞かせる。

「ナギ、あいつはどこかおかしい。普通のガドツソスなら、あんなトリッキーな動きはしねえ。それに、何よりもあらゆる魔獣の中で一番プライドが高いガドツソスがだ、自分の目を傷つけられて黙ってるわけがない。確実にキレルはずだっていうのに、だ」

「つまり、あれはガドツソスって奴じゃないってことなのか？」

「いやそれも違う。行動は妙だが、抗魔法アンチ・スベルの高さは本物のそれだ…  
…だからこそ、あの行動は謎なんだよ」

「ま、分からなくても分かっても、俺たちのやることは変わらねえんだろ？」

「まあそうなんだが…あれ？ そいやあ、リディアの嬢ちゃんは何？」

二人が視線を巡らせると、ガドツソスが目を向けた先にリディアがいた。

恐怖に体を震わせながら、必死に逃げようとしているが尻餅をついてしまう。

その光景を見たとき、凧の中で何かが弾けた。

「テメエ、リディアに手え出してんじゃねえええええっつっ!!」

凧の咆哮が聞こえたのか、ガドツソスは遠く離れた場所にいる凧を見た。

その顔はどこか、来てみると言っているようですらあった。

「おおああああッ！」

「ガアアアアッ！」

『加速』によつて、一瞬にも満たない時間でガドツソスに肉薄する  
凧。

しかしガドツソスは、まるで凧の軌道を読んでいたかのようにその  
太く強靱な前足を振るつた。

凧はダンの側面でガードするが、衝撃は軽くガードを越えて凧を襲  
う。

いってえが、ダンが折れなかつただけでも儲けもんつて訳か？

吹き飛ばされたときに頭をぶつけたのか、右のこめかみから血が流  
れている。

そのおかげで凧は血が上つた頭が冷静になつていくのが分かつた。

こればつかは感謝つてとこだな。

リディアを襲おうとしたのは許さねえが。

ふともう一度ダンの剣身を見たとき、鏢の大部分が剥がれていた。  
鏢が消えたダンは、何ものにも染まることのない純白の剣だった。

凧がその美しさに見惚れていると、ダンから声が聞こえた。

「うんむう〜。なんや、眩しいな……もしかして外か？ っつうこ

とはだ、オレの封印が解かれたってことかいな？ ……お？ 俺を握っとるお前が、今代の聖神せいじんかいな？」

あまりにもいきなりのことだったので、凧は少しフリーズしてしまっただ。

だが気を持ち直して、聞きなれない言葉を聞くことにした。

「えっとー、ダンでいいのか？ ……とりあえず、今代の聖神ってなに？」

凧がダンと会話したまま、ガドツソスへと突っ込んでいく。

「オレはダンでも構わねえぜ……聖神がどうのこうのについてはー、あー、何だっけ？ 正直いつちまうとだな、長いことこんなだったから忘れちまったよ。ま、自分で探してくれよ相棒」

「うわ、役に立たねえなッ！ ……あつぶねえ」

凧がダンとの会話に夢中になっていると、突然ガドツソスの攻撃が激しさを増した。

ダンの言った聖神、という単語に反応したようにも見えた。

「ああもう、埒が空かねえな！ ダン！ 何か良い手は無えのか！？」

「ハツハ、相棒よ。そんな便利なモンがあると思ってんのか？」

「クツソ、マジで役に立たねえな！」

ダンに毒づきながら、凧は攻撃を止めない。

止めたら奴はきつと、リディアへと矛先を向けるはずだから。

「……お？ なんか一つあったぜい相棒。魔力をオレに集めて、んでもって斬撃にして飛ばすってのが」

「うわ、なんかバトル漫画に出てきそうだな」

「漫画ってなんだ？ あと、ありそうってのは余計なお世話だ」

軽口を叩き合いつつも、凧はガドッソスに気取られないようにじりじりと距離を取っていく。

ダンは凧から、持っていていけるだけの量の魔力を持っていく。

やがて、ダンの剣身から強烈な真っ白の閃光が迸りはじめた。  
なぜか凧には、この技の名が自然と脳裏を過った。

凧は体勢を低くし、ガドツソスの巨軀の下を通り抜けるように駆け出す。

凧がガドツソスの下を駆け抜ける、その瞬間に凧は放つ！

「セイバ聖神の極光アアツ！！」

放たれたその極光は、トワイライトの地に純白のオーロラを展開した。

「おのれおのれツッ！ あれは一体なんだと言っただ！ あんなふざけた輩なぞ、報告には無かったぞ！」

寂れた小屋の中で、紺色のローブに身を包んだ女がテーブルを叩きながら怒鳴るように愚痴る。

一方で、対面に座っている赤色のマントを羽織り、その下にさらに紅いローブを纏った男が宥める。

「まあまあ、そんなカッカすんなって。そのふざけた輩も、この俺  
つちが殺りゃあいいんだろっ？」

「そうだが、相手は一撃でガドツソスを“消滅”させたんだぞ！  
しかも馬鹿みたいな速さで動くし！」

「どうどう、落ち着け。いくら『魔獣使い』のお前が、あの怪物を  
操って負けたとは言え、だ。対人で強いとは、まあ言えねえだろっ  
？」

「それは、まあ確かにそうなのだが」

「まあこの『殺人騎』のグローツ様に任せなよ」

そう言っつてグローツという男は、闇に紛れるように消えてしまった。  
残されたもう片方のローブの女は、

「ホントに馬鹿みたいな速度だったんだけどな」

ポツリと呟いた。

物語はさらに加速していく

## 七話『トワイライトの夜』（前書き）

改稿が遅れました。

すいません、自業自得ですね。

今回と次回で、トワイライト編は終了です。

もみじ様のご指摘によりまたしても修正しました。

## 七話『トワイライトの夜』

「……にしても、あの時の戦闘はこの僕をもってしても死ぬかと思  
ったね、ああ死ぬかと思っただよ」

「お前も一応は役に立ってたもんなあ……雀の涙くらいには、だけ  
どな」

「ナギ！ それは失礼じゃないか!？」

「だってな、実際そのくらいだったしな」

言い合っている二人を尻目に、アインスはリディアへと目をやる。  
俯いているが、それでも顔色を真っ青にさせているのが分かる。

「おおい、嬢ちゃん。大丈夫か？ 気分が悪いんだったら、ここで  
休憩を取るか？」

「……大丈夫です」

そう言って、再び俯いたまま黙りこんでしまったリディア。

おいおい全く、どうしてこう俺の周りには強情なやつばかりいる

かね。

アインスは内心、やってられんとはかりになるがそれでも離れないのは、つまりはそれこそが答えだ。  
自分達のやりとりに気づいたのか、凧とライルが振り返る。

「リディアー、大丈夫か？　なんだったら俺たちも一緒に休憩するか？」

「そうだよ、ミス・リディアー？　無理する必要なんか、どこにも無いんだから」

「そうそう、だからとりあえず休憩してお」

「もうやめてッ！」

始め、その場の誰もが今叫んだのが誰か分からなかった。  
しかしリディアーの肩が震えているのを見て、やっと彼女が叫んだということを理解した。

凧が恐る恐るといった様子で、リディアーへと声をかけた。

「えっと、リディ」

「何で！　何でなの！？」

何で俺の台詞ばかりを遮るんでしょうかお嬢さん、と思いながら続きを聞くことにした。

「さつきは私、怖くて怖くて動けなかった。私が狙われたときも、ここで死んじゃうじゃないのかって思ってた！ …… だけど、私は生きてる。生きてるけど、まだこんなに体が震えてるの！ それなのに、何でみんなはそんなに平然としてるの!？」

リディアの慟哭に、誰もが言葉を出せなかった。

出せなかったというより、自分が出しても良いのかという気持ちの方が強くあった。

その内、凧が頭を搔きながらリディアへと言った。

「別に俺たちだつて、本気で平然としている訳じゃねえんだ。ただ、こうでもしとかねえと今にも恐怖が襲いかかってきそうなんだ…… だから、リディアの気持ちに気づいてやれなかったのは悪いとは思ってるけど、好きでヘラヘラしてたんじゃないってのは分かって欲しいんだ……こんなこと言うと、わがままと思われるかもしれないけど」

そう言つて恥ずかしそうに、照れくさそうに苦笑した風を見て、リディアは理解した。

ナギも、やっぱり怖かつたんだ。

異世界から来ただけの、ちよつと強いだけの人なんだね。

色々とスゴい超人とかじゃ無かつたんだ。

私と、おんなじこと、感じてたんだ。

リディアの胸の内に、何か温かいものができた。

とても温かくて、だから離したくないもの。

それを手に入れたから、リディアが尻に抱きついたのは当然だったはずだ。

「！！　ツリ、リリリディアさん!?!」

「ちよつとだけ、こつしてて?」

ちよつとだけと仰られても、物凄く柔らかくて大きなモノが私の胸に当たってるんですがー!と脳が沸騰しそうになる。

後ろでアインスがニヤニヤしているのが分かる。

ライルはライルで、よろしいならば決闘だと言っている。

「あ、ああの、あのあのリディアさん?　いつまでわたくしめは、

このままで居ればよろしいのでしょうか!」

「私が落ち着くまで」

にべもなく言い切られたので、凧は泣きそうになってしまった。

男としては嬉しいのだが、確かに嬉しいのだが、何か自分がするのはちよつと違う気がする。

一方のリディアはリディアで、うへへーナギの体って遅しー、しかも温かあつたいと些か以上にキャラ崩壊していた。

その光景を見ている一対の視線に気づくことは、この場の誰一人出かけていなかった。

「ただいまー」

「おや、もう帰ってきたんだ? ……で、王女様を殺って来たのかい?」

「いんや、見てきたただけだけど?」

その返答に、ローブの女がずっこけた。  
即座に立ち上がり、竜もかくやといわんばかりの剣幕でグローツに  
詰め寄る。

「アンタ、一体何やってんだよ！ 可愛い王女様を見て、デレデレ  
してたのかコラ！」

「いや俺っちのタイプはもっと強気な女だ。例えば、俺の前でガー  
ガー怒ってるラーシャ……お前みたいなのがな」

その言葉に、途端に静まり返るローブの女      ラーシャ。  
頬を微かに染めて、小さく俯く。

「……さ、さつさと行ってきたらどうだ？ 次で行動に移すんだろ  
？ え、援護として私も向かってやる」

「サーンキュー。んじゃあ、夜に行くか。連中は『トワイライト湖』  
の湖畔のホテルに泊まるとの情報もある。『トワイライト湖』で襲  
撃するのが、一番だな」

「だけど、そこらへんだとガドツソスが居ないよ」

「いるか分からない大型魔獣を探すよりは、確実に居る中型魔獣を

操った方が確実だぜ。俺たちの魔法のためにも、大気中の魔力を散らすデカブツは嫌いだしな！」

戦いの場を想像しているのか、幾分か上機嫌なグローツ。

楽しそうなグローツを見て愉快そうに微笑んでいるラーシャ。

決戦の時は近い。

『トワイライト湖』の近くには、四軒のホテルが建てられてある。

最近建てられた高級ホテルと、高級ホテルの対岸にある中堅ホテル。立地は最高だが、設備がひどく最もボロいホテル。

そして、凧たちが泊まる一般ホテルだ。

凧たちはそのホテル 『トワイライト・セカンディア』のロビーで、ぐったりしていた。

「あゝゝゝ。つつかれたなあ」

「本当だね」

「何でっ、ミス・リディアは、そんなに余裕がある、んだい？」

「王族はね、体力つけないと色んな貴族のおべっか攻撃に耐えられないの」

それは出世を第一にしているレッサー王国の貴族たちへの、痛烈な皮肉だ。

実際にライルは、顔を引き攣らせている。

「ふふっ、ライル君は違うよ？ ……さっきだって、ゼーゼー言いながらも一度も弱音を吐かなかったじゃない」

「そっ、そうかい！？ ……そうかそうか、僕を立派だと認めてくれるのかい！？」

「うん。“そこ”だけだけどもね」

リディアの残酷な宣告にライルは、うわああ僕なんてえー！と走り去ってしまった。

丁度そこに、部屋の鍵を受け取ってきたアインスが戻ってきた。

「あいつ、一体どうしたんだ？」

「分かりません」

「アインス……女の子って、怖いんだぜ」

二人の答えに、アインスは真実を導き出した。  
そのあと、女ってやつは全く、とか。

どうしてこうも、とかブツブツ言っていたが、突如として爆発音が轟いた。

リディアは小さく悲鳴をあげて、凧とアインスは爆発音の方向に素早く目を向けた。

「アインスッ！」

「分かってらア！ ナギ、お前は嬢ちゃんを守ってるよ。奴やつさんの狙いが、嬢ちゃんじゃないとも限らねえからな。いつの時代でも、王族を暗殺しようとする動きなんざな、掃いて捨てるほどもあるんだからな！」

そう残して、外へと走っていったアインス。

ふと凧は服の袖を引っ張られた。

振り向くと、リディアが震えながら袖を掴まんで引っ張っていた。

「ねえナギ、大丈夫なんだよね？ アインス先生がああ言ってたっ  
てことは、私を暗殺しようってことなの？」

「んなわけ無えだろ。仮にそうだったとしても、ああ、えっと、俺が守ってやるよー!」

顔を赤くして頬を掻きながらもそう言い切った凧に、思わずリディアの顔も赤くなる。  
そして、凧がリディアの手を握る。

「え？ ……ッ！ ええええええつ!!」

「とりあえず、屋上まで行くぞ。辺りに障害物があると、俺は戦いづらいからな」

「うん」

顔も耳も真っ赤にしたリディアを引っ張って、凧は屋上を目指した。

アインスが出てきた時、ライルが起き上がろうとしていた。  
彼らの目の前には、三十体はいるであろう中型魔獣の『ガデス』がいた。

ガデスの腹の中には爆発力の強い火薬の原料となる物質が詰まって

おり、魔力に反応する。  
半径五メートル以内の魔力なら、例えどれだけ小さくても確実に反応する。

先ほどの爆発はライルが先制攻撃で魔法を発動したために、誘爆したということだろう。

爆発の衝撃でライルが吹き飛ばされたところに、アインスがタイミング良く駆けつけたのだ。

「アハハハハ！ 引率のせんせーがいらっしやいました、とか言う訳かああ！？ たかだか一人増えたくらいで、この数をどうにかするって言うつもり！？ 残念だけど、屋上から私の仲間が侵入しようとしてんのよね。そういう訳で、ここで大人しくしててよってね！」

突然現れたローブの女      ラーシャが、長々と叫んだ。  
アインスもライルも、とりあえず無視してみたが問題は無かったようだ。

アインスは、あいつ何で攻撃されないんだと不審に思ったので、ベラベラと喋っていたラーシャへと声をかけた。

「おい、お前！ そんなところにおいて、何で攻撃されない！？」

「ハッ、そんなの簡単じゃない……つまり、この私がこのゴリラもどき共を操っているからに他ならないからよ！」

やっぱりコイツ、真性のバカだ！と内心ガッツポーズしながら、足に魔力を込めてガデスに近づかれないように離れる。

「アッハッハ！ 離れてどうするの？ 接近戦じゃないと、ガデスには勝てないんだけど？ でもガデスは近接戦が大得意だから、中型魔獣最強クラスなんだけどさ！」

「そんなもん、知ってるつつつの！」

「だったら、私を楽しませるために踊れ！ 満足したら、もしかしたら見逃してあげるけど？」

「見逃す気なんか、ねえんだろ？」

「正解」

その問答の間も、ライルを担ぎ上げてガデスから距離を取っていくアインス。

ふと、アインスはラーシャに尋ねた。

「なあ、お前よ。『烈火』つつう二つ名を持ってた奴のこと、知ってたりしねえか？」

「『烈火』あ？ ……昔、聞いたことがあるかもしれないね」

「そかそか」

流石のラーシャも、これには不審がる。

「アンタ、何が言いたいんだい？」

「悪い悪い……その『烈火』の得意な魔法はな、点の魔法であり、面の魔法でもあつたんだ」

「へえ。アンタは、その『烈火』をリスペクトしてるって訳？」

「いやいや、そんな大層なことじゃない」

そう言って立ち止まり、ライルを下ろす。

「先生、大丈夫なんですか？」

「安心しろ、そして俺を信じるよ、ライル……ま、話の意味ってのはな、ただ」

ガデス達との距離は、実に三十メートル以上も開いている。アインスは、腰に差していた先が丸いレイピア状の杖を抜き、ガデス達へと先端を向けた。

「俺が、その『烈火』だっていうだけだ」

「……は？」

口を大きく開けて、ポカンとしているラーシャに声をかけた。

「離れとかねえと、あぶねえぞ？ フレア・ダーイウッド 『烈火大樹』！」

ガデス達の直下の地面から燃え盛る大樹が生えた。

ガデス達の爆発は、アインスの魔法によって掻き消された。

「アインス先生って、すごい人だったんですね」

どこか呆けた様子のライルに、アインスは意地悪く笑って返した。

「なあに、ただの元軍人だっただけさ」

ロープを纏った女は、いつの間にか消えていた。

屋上にある庭園のベンチに二人は座っていた。

「ねえナギ、私たちこんなところで寛いでいて良いのかな？」

「これは別に寛いでいる訳じゃなくてだな、休憩してるんだよ。いざという時に、疲れてるんじゃないか何にも出来ねえじゃねえか」

そりゃそうだけど、というリディアの咳きは発せられることは無かった。

その場に闖入者が現れたからだ。

「まだ若いのに、なかなかきつちりとした考えを持っているな、少年？」

「ッ！ テメエどこから」

「壁を登って来たのさ」

壁？と訝しむ風にも、赤いマントとローブを纏った男　　グロ  
ッは答えを見せる。

「来い、我が愛馬よ。『クリエイション創造』」

「魔法！」

「離れてろリディア！」

そして現れたのは、金属製の大猿であった。  
手にはトゲが生えており、その重量を支えるためのものだとすぐに理解した。

「そんな身構える必要はないって。こいつは登り専用だ。見た目ほども攻撃力はないし、そもそも動きが遅すぎるからな。って訳で、『創造』」

「ッ！ させるかよ！」

「こつちの台詞だな」

魔法の発動を阻止するために、『加速』を使って斬りかかる風。しかし横合いから出てきた大猿に防がれる。

「邪魔すんじゃない！」

しかし交差した腕の下を通して、胴体にダンを突き刺す。そのまま左に振り払い、勢いはそのままに一回転して大猿を腰から真っ二つに斬り裂く。

『創造』で作られた大猿はそのまま消えていった。風はそのまま突っ込み、グローツに斬りかかる。

「ふっ、戦い慣れはしていないようだな」

「!?!?」

ドゴオ!という人体に金属製のなにか巨大なものが直撃した音が響いた。

激しい音と共に、風は吹き飛ばされた。

風が吹き込みながら起き上がると、地面から金属製のハンマーが生えていた。

「こいつか」

「その通りさ。名付けるならトラップハンマーってところかな？」

「ハッ、大したネーミングセンスだな」

「誉め言葉として、受け取っておこうか。『創造』」

グローブが魔法を発動させると、彼の前に一体の騎士が現れた。騎士は剣を持っている。

地面に生えていたハンマーは、いつの間にか消え去っていた。

「その像で、俺と戦うのかよ？」

「戦いに手段などない……当然だろ？」

「全く、その通りだな！」

凧がダンを振る。

騎士像は剣を合わせる。

それが数回ほど続いた時、凧は気づいた。

「テメエ、俺を疲れさせるのが狙いか？」

「おや、思いの外気づくのが早かったな」

「俺がそんな簡単に疲れれると思うなよ」

「. . .」

凧は下から掬い上げるようにしてダンを振る。  
騎士像はそれに合わせようととして、弾かれる。  
無防備になった胴体を真つ二つにする。

「. . .」

「舐めてやがんじゃない、ねえええッ!!」

「『創造』」

またハンマーか、と地面に注意を向ける凧。

だが『創造』によって現れたのは一メートルほどの棒

メイ

スだ。

そのメイスはグローツの手中にある。

つまり。

凧は突っ込む勢いをそのままにして、真っ向からメイスの一撃を受けた。

「じっ、おあっ!!」

ズドンと凄まじい衝撃と音を撒き散らしながら、凧は数メートルほども後ろへと吹き飛ばされた。

「ナギイツ!!」

リディアが悲痛な叫びをあげるが、凧には半分近くも聞こえてはいなかった。

痛ってええ、なんだよありゃあ。

いくら勢いがあったからって、あんな威力は出ねえだろ。

つうか腹がメキメキいってやがったしな。

ありゃ何本かはイッタはずだ。

激痛を我慢し、ようようといった風体で起き上がった凧に、さも驚いたと言わんばかりにグローツが声をかけた。

「驚いたね。まさか、俺っちの魔力を込めた一撃を食らって起き上がってくるなんてよ」

魔力込めてやがったのかよ、道理でバカみてえな威力だしやがるとぼやく凧。

ああー確か、魔力を込めることなんかは熟練の魔法使いや戦士、軍人なら誰だって使うってアインスがいつか言ってたか？

……するってえと、俺にも出来んじゃない？

「おい、ダン」

「ああーん？ どしたあ相棒よ」

「お前、アイツとおんなじこと出来るのか？」

「へっ、モチよモチ」

剣に向けて喋り出した尻に驚き、さらに喋った剣にも驚いたグロ  
ッ。

だが、その会話の意図するところを理解した。

「させねえぞ！ 『創造』！！」

グローツは金属製の馬を作り出した。  
その馬に乗って、一気に尻へと接近する。

「ふうん！」

「ちっ、馬とかセコいんだよ！」

「言ってる！ そしてこの隙に、お姫様を斬殺刺殺轢殺殺殺だ！」

「ッリディアー！！！」

凧には防がれたが、リディアには防御の手段もなく、回避しても馬の速さには敵わない。

私、ここで死んじやうのかな？

グローツが持つのは、先ほどまで持っていたメイスではなく、武骨な槍に変わっていた。

リディアの視界には、もう何も無かった。

死を招く槍を恐れ、目を閉じたのだ。

ごめんなさい、みんな。

しかし、どれだけ待っても痛みは訪れない。

しかも温かささえ感じている。

恐る恐る目を開いてみると、そこには昼間見た胸元があった。

リディアは凧に抱き抱えられていた。

「ナギ？」

「よし、大丈夫だな？ リディア！」

「何で助けてくれたの？」

凧はその言葉に、はあ？何言っただと返して、さらに言葉を続け

る。

「何でって、俺がお前を助けちゃいけねえって誰が決めたんだよ？  
それに、言ったじゃねえかよ」

「何を？」

「俺がお前を守るって、約束しただろ！」

その言葉を聞いて、リディアの目から涙が零れた。  
それに凧は慌てる。

「な、何で泣くんだよ」

「だって嬉しかったんだもん。今までは護衛の人も、仕事だからって。そんな感じにしか受け止められなかったの。今まではみんな、私の役に立って、そして出世しようっていう考えが私に伝わってきたの。でも、でも！凧は私にいつでも優しくしてくれた！ ただの『リディア』に優しくしてくれた！そんな小さなちっぽけなものな約束を、大切にしてくれた！ だから、だからそれが凄く嬉しかったの！」

「リディア……」

「んー、素晴らしい素晴らしい素晴らしい！ これが美しき人間

愛！ 待った甲斐があつた！ 実に素晴らしすぎる！ 今まで戦うときは常に紳士たれ、としてきた甲斐がああーったというもの！  
……だから、少年。君を一对一で殺したい」

「へっ良いぜ」

「ナギ！？」

凧はリディアをそつと下ろし、ダンを拾い上げる。

ダンにはさつき頼んで、魔力を溜め込んでいてもらった。

そのお陰で、凧は魔力強化したグローツと正面切って戦うことが出来る。

「俺っちの名前は、グローツだ。こいつぁ、うちの組織でのコードネームだが、そこは勘弁してくれや」

「組織い？」

「オウ、イエア。俺っちの組織、名は『救世の使徒』つつうんだが、そこで働いてんだよ」

「大層な名前だな。まさか、世界を救うとか言わねえよな？」

凧としては冗談だったのだが、当のグローツは真剣な顔で頷いた。

「マジかよ」

「マジだよ」

「世界を救う前に、目の前の誰かを蔑ろにするってのか？」

「何を言っつてい」

「たった一人の女の子を、例え王族だったとしても、力を持たない人間を無下にしていいのかって言っつてんだよ！」

「大事の前の小事だ。犠牲となった者たちは、きっと幸せだ」

「そうかよ」

「そうだよ。『創造』」

二人は、それぞれの得物を構える。

凧はダンを正眼に。

グローツも剣を正眼に。

リディアは凧の後ろ姿を熱っぱい視線で見つめるが、あることに気づいた。

凧の背中に複数の赤い線が刻まれているのだ。リディアが見ていた

限りでは、凧が背中を斬られたことはおろか、背後を取られていたことなど、全く無かったのだ。  
つまりリディアを助けるために割って入った時に、背中を槍が掠めていたのだろう。

私、またナギの枷になっちゃったの？

そう思っているリディアなのだが、凧にふらついている様子はなく、むしろしっかりと両足で地面を踏みしめている。

頑張つて、ナギ！

二人は動かない。

どちらも隙がないのだ。

動くに動けず、凧の出血量が増えていく。  
そこへ。

烈火の樹が現れた。

それが合図となったのか、二人は同時に動いた。

グローツは大きく踏み込んで、袈裟斬りをするべく構え。

凧も“ただの”踏み込みで右脇腹から斬り上げようとする。

二人の距離が、三步分ほどになった。

グローツは一気に踏み込み剣を降り下ろす。

凧は『加速』を発動させ、そのまま斬り抜ける。

純白と鈍い金属の輝きが閃く。

「ふっ。最高だな。強い、ということは」

一人分の、地面に倒れた音がした。  
剣も明後日の方向に飛んでいった。

立っていたのが純白の輝きなら、誰が倒れたか説明はいらないだろう。

「死んじゃいねえよ。とりあえず、色々と話してもらわねえとな」

決着は、着いた。

## 七話 『トワイライトの夜』 (後書き)

~~~~~おまけ~~~~~

空から純色「ひびき」の剣が降ってくる。

アインズとライルは気づかない。

そして、アインズの足元に深く刺さった。

「うおおおおおおああつ!!!?!?」

「てっ、敵ですか!?!?」

「はー、はー、いや違うな。ただ剣が降ってきたただけだな、こりゃあよ」

「何だ、驚かせないでくださいよ」

ホントにビビるんだぞ、これとアインズは戦々恐々としながら『トワイライト・セカンディア』へ入っていった。ライルも朗らかに笑いながら入っていった。

~~~~~

これだけ見たら、ライルが大成しそうです。

成長させるのは確定なんですけどね。

八話『ツアーの終わり』（前書き）

今回はミスは無いはずですが。確認しましたからね。  
今回でトワイライト編は終了です。

ではご覧あれ。

## 八話『ツアーの終わり』

アインズとライル、凧がソファにぐったりと座っていた。

「だあー、今日も疲れたなあ」

「アインズはだらしねえなあ」

「き、君ら、いつも、こんなこと、して、してるのかい？」

なぜこんなにも三人が疲れはてているのかというと、時間を遡る必要がある。

凧が目を覚ますと、なぜかリディアがベッドに潜り込んでいた。

凧は

時間を遡りすぎました。

時間を進めます。

凧がぐったりしたような表情をして、ロビーに降りてきた。先に居たアインスはニタニタしながら、凧へと声をかけた。

「よお〜ナギ。その顔はもしや、昨夜はお楽しみでしたねってことかあ？」

「んな訳ねえだろうがッ!!!」

「顔を真っ赤にして言っても、説得力ねえぞ」

こいつ模擬戦あとで、ぶつとばすと凧は決意した。そこに、ライルも降りてきた。ライルは凧がいることを、不思議に思った。

「どうして、こんな早くにナギが居るんだい？」

「いや修行のためなんだけどさ。そういうライルは何で居るんだよ？」

「何でって、アインス先生に鍛えてもらうためなんだけど。まさか、君もそうだったのか？」

「いやそうじゃなくて、俺はアインスとの模擬戦をやってるんだが」

二人が会話している間に、アインスは柔軟体操を終える。

「ほれ、お前らもやいやいや言っつてねえで柔軟体操をやれよ。じゃないと、体のあちこちを痛めるぞ」

二人は大人しく柔軟体操を行うことにした。

この後は、みなさま読者の予想通りになるのだが、あえて言わせてもらおうとするなら一つだけ。

何事もやり過ぎないようにしましょう。

三人がぐだつているところに、リディアが来た。

「あれ？ みんな起きるの早いんだね。私も早く起きたつもりだったんだけどな」

「まあ俺たちは鍛えてないとダメだからな」

「そこにライルは要らなかつたけどな」

「何てこと言うんだね、君は!？」

二人は口論しているように見えるが、その顔は笑っている。

私もあんな風にナギと笑いたいなあ、とかリディアは考えていると、アインスが話しかけてきた。

ニヤニヤしながら。

「よお、嬢ちゃん。その顔はもしかして、完全にホの字だな？」

「えっ!？ ……あれ？ ホの字って何なの？」

「マジかよ。嬢ちゃんは世間知らずのお姫さまだな」

「そんなこと知らないだけで世間知らず!？ アインス先生ひどいよ」

ハハと笑いながら、アインスは違和感を感じた。  
会話を振り返ってみると、すぐに気づいた。

「あり？ 敬語じゃなくなってるじゃん」

「うん、アインス先生だったら別に良いかなって思ったから」

俺の扱い酷くなってね？とアインスがぼやく前に、凧が割り込んできた。

「なあ二人とも、早く行かねえか？ 『トワイライト湖』って、ア  
ンスタインでも有名な観光地なんだろう」

「ふっ、さっさと行こうじゃないか。実を言うと、この僕も初めて  
なんだからね」

「いやそれは分かったことだから別にどうでも良いんだけど」

どうやらこの二人は打てば響く性質らしく、さっきから良く話して  
いる。

最初は決闘から始まったのに、今ではこんなにも仲が良い。  
そのことをリディアは少なからず羨ましく思った。

「よし、なら朝飯食ってから行くぞ」

「そだな。俺はもう腹ペコで背中と腹がくっつきそうだし」

「朝、こんなにも食欲が湧いたのは久しぶりだよ」

「久しぶりい？ 初めての間違いだろ、お坊っちゃん」

「ぼ、僕だってお腹が空く日だってあるんだよ！」

リディアは、食事の話なら自然と隣に行っても問題ないはずと全く何の違和感も感じさせることなく、凧の隣をキープした。

「あれ？ リディア、いつの間に隣に座ってたんだ」

「ふふっ、さっきの間にいっ」

「？ まいっか……てかさリディア。なんか近くねえか？」

「そんなこと無いけどな？」

完全に嘘だ。

リディアは凧の左隣だが、凧が左肘を横に動かせば確実にリディアに当たるくらいには近い。

それくらい近い距離にいるため、リディアは上機嫌なのであった。

愉快犯のアインスと嫉妬するライルは、リディアの目には写ってないとは言うまでもないだろう。

「お、これ美味しいな」

「これはアルマスープっていうの。さっぱりした味わいでしょ？」

「おう、ホントに美味えなこれ……じゃあこれは？」

「トライトスープだよ。これはパンを浸して食べるんだよ」

「へー、どらどら……ッ、美味しい！」

「えへへ、でしょ？」

「……アインス師匠。すごく、羨ましいです」

「お前も彼女作れ」

「はっ、盲点！ 全くの盲点でしたよ、それは！」

あれ、師匠って呼ばれたらその内タメになりそう、いやいや弟子を信じると焦るアインス。

しかし誰も聞いていない。よしんば聞いていても、誰も反応しなかっただろう。

「ふう、ご馳走様でしたっ」と

「ふふっ、お粗末さまでした」

「うぐぐぐ」

「……おし！ もう観光しに行くぞ！」

「そうだな」

「そうだね」

やっぱり師匠と先生としての威厳、無くなったな。

そうぼやかずにはいられないアインスであった。

リディアと風がベンチに座って、休憩していた。  
やはり距離が近い。

というよりも、リディアが風に近づいているのだ。

両者ともに顔が赤い。

痛いほどの沈黙が続く。

「あー、あー暑いなりディア！」

「そうかな？ 『トワイライト湖』の湖畔は、年中23度前後で保たれてるから、涼しいはずだよ？」

勇気を出して沈黙を破った風にも、救いの手は差しのべられなかった。だが、会話のきっかけにはなったようだ。

「そうだ、昨日の怪我は大丈夫なの？ 背中に傷入ってたし。しかもあのあと、倒れちゃったじゃない！ 私が治療に優れた水属性<sup>アクア・エレメンタル</sup>じゃなかったら、どうしてたの！？」

「えつとー、俺の『加速』<sup>アクセラレーション</sup>でなんとかなったんじゃ」

「『保有能力』は、そこまで便利じゃないよ！？」

「ですよねー、アハハ」

「もう笑い事じゃないんだから。私、心配したんだよ」

「悪かったよ……でもさ、リディアだって自分一人だけの身じゃないんだぞ？」

「えっ、それってどういうこと？ (俺にはお前が必要とか、そう

いうこと？ ……やだ、ナギったら」

リディアの妄想が加速していく。

とりあえずリディアは、王女としての自覚を持ちなさい。

そんなことになってるとは知らない凧が、平然とリディアの妄想を壊す。

「いや、リディアって王女様じゃん？ だから色んな人のためにも、生きてなきゃだろ」

「あ、そういうことなんだね。（何て手強いのか、ナギって……こうなったら強行手段も辞さないんだからね、私は！）」

決意するやいなや、いきなり凧の手を握った。

予想だにしていなかったことに、凧の両肩が跳ね上がった。

「なっ、なな、いきなり何だリディア」

「ちょっと、散歩でもしようよ」

リディアの目には、断らないでねという無言の脅迫が込められていた。  
別に風は断る気なんて微塵もなかったのだが、色々と吹っ切ったり  
ディアは考えてすらいなかった。

「アインス師匠。僕らは何をやってるんでしょうか？」

「あの二人を見てるに決まってるだろ。あいつらほど、見てて楽しいのはねえぜ」

この人を敬うのはやめた方が良くないかな、とライルは決めた。

「お、動いたか」

「どうやら散歩に行くみたいだね、アインス」

「あれ、またタメになってるんじゃない」

「ほら、早く行くよ」

「やっぱりノリノリじゃねえか。ってか、おま、タメ口に」

「置いていつても知らないよ」

「ちいづくしよおおおおッッ!」

「……『消音』<sup>サイレンス</sup>の魔法、かけといてよかった」

このあと二人は、凧に気づかれてしまうのだが、それは余談だろう。

こうして、トワイライトでの事件は終わりを告げる。  
物語はさらに加速し、新たな争乱を招く。

救世の使徒が、その力の一片を見せる。

~~~~~その頃のグローツ~~~~~

「ああ、暇だな。拘束されたら退屈になるな。まあ、俺っちがあ  
少年に負けたのが悪いんだがねえ……そいやあ、ラーシャが見当  
らないのは、上手く逃げ果せ<sup>お</sup>たってことかね」

とりあえず手錠した上から、さらにぐるぐる巻きは勘弁してほしい  
など、どこか余裕のあるグローツだった。

八話『ツアーの終わり』（後書き）

次回からは王命編です。

時間は多少飛びますがね。

## 設定2（前書き）

現段階での設定です

## 設定 2

~~~~~人物~~~~~

葉月 凧はづき なぎ

本作の主人公

両親とは物心つく前に生き別れてしまい、引き取ってくれる親戚も居なかつたため、他者との繋がりを大事にするようになる

隣の家に住んでいた笹岡老夫婦は、自分を孫のように扱ってくれたのでとても感謝している

日本の某県の某校に通っていた高校二年生

現在リディアの部屋に住ませてもらっており、アインスとは師弟関係で、ライルとは友人

かつての聖神が使っていた剣である、ダンの使い手

(茶混じりの) 黒髪黒目

17歳

176センチ

61キロ

保有能力

『アクセルレインション』  
『加速』

自分に関係しているあらゆる速度を自由自在に加速させられる能力

自分へのダメージを度外視すれば、無限に加速する事が出来る

『デフォルト』  
無意識で成長速度の上昇がかかっている

他にもチートな特殊能力がてんこもり

プロフィールに書いてあった特技が、伏線になっている

イメージとしては、茶色が混じった黒髪黒目の優男が一番近いイメージになる

性格は、何かに順応しやすく、芯が一本通っている

リディア・エル・レッサー

本作のヒロイン

レッサー王国第三王女

上に第一王子、王女、第二王女がいる

優秀な兄へと家族の関心が向いており、幼いときから一人であったために、かなり強く他者を求める傾向がある

かなり肉感的な体をしており、さらに超がつくほどの美少女なので学院内では人気が高い

レッサー王立魔法学院に通っている

凧に恋をしている・・・？

魔法学院三年生

蒼髪蒼眼

16歳

162センチ

50キロ

スリーサイズ

86 / 54 / 84

イメージとしては、ストレートロングの蒼髪で蒼瞳の優しい顔をした超美少女

性格は、誰にでも優しく、物腰柔らかかで、ていねいな接し方をするしかしこれは、嫌われて自分から離れていってしまうのを恐れているから

得意な魔法は水属性

アクア・エレメンタル

オウン・アビリティ  
保有能力

『王家の加護』

王族ならば誰でも持つている、保有能力。『神の加護』よりは劣るが、運が良くなり自分への流れを手繰りよせることができるようになる

『クイック・リード』  
『高速詠唱』

熟練の魔法使いや軍人ならば、誰でも持つている保有能力  
文字通り、高速で呪文を詠みあげることが可能とする保有能力

アインス・ルミル・スヴァン

スヴァン子爵家当主

レッサー王立魔法学院の教師を勤めて10年ほど経っている

元軍人でかなりの使い手

剣術に長けており、学院内ではトップクラスの腕前

ある事件から腹に大きな傷が付いている

凧とライルの師匠となったが、敬われなくなった

二つ名は『烈火』

赤髪緑眼

37歳

183センチ

83キロ

大柄でなかなかにかつい顔つき（+後ろに流した赤い髪の毛）をしているためか、生徒からは怖いと思われるが、本人はいたって気さくで陽気な性格である

魔法は軍人でもあったので大体はそつなくこなすが、一番得意なのは火属性

フレイルム・エレメンタル

中でも『烈火大樹』はアインスの十八番の魔法

フレア・ダイウッド

オウン・アビリティ  
保有能力

『高速詠唱』

クイック・ムーブ  
『高速歩法』

熟練の魔法使いや軍人ならば、誰でも持っている保有能力

普通に走るよりも、数倍ほどの速さで走ることのできる保有能力

クイック・キユア  
『治癒活性化』

魔法ではなく、自然治癒力を活性化させることによって、回復力を増幅させる保有能力

ライル・アルダ・サイヤン

サイヤン伯爵家次男

貴族至上主義なレッサー王国貴族の典型的な存在だったが、凧の強さとアインスの貴族とは何ぞやという考えに感化され、真の貴族を目指すようになる

凧とは友人になりアインスとは師弟関係を結ぶが、アインスのダメさ加減を知り敬うのをやめる

風来坊の兄とブラコンな弟がいるので、自分がしっかりしなければと考えている

二つ名は『風撃』

金髪碧眼

17歳

181センチ

72キロ

リディアが誘ったツアーに行く前はただ傲慢で高慢な性格だったが、アインスの考えを聞いた後は相手のことを考えられるようになり、さらにコミカルな性格に変わった

この時点では弱つちい彼だが・・・？

得意魔法は『エア・セイバー風剣』

ダン

人物ではないが意思を持っているため記載

かつては聖なる神によって創られた剣

彼が最後に使われてから、実に数千年経っていた

使い手の魔力を使って強力な一撃を放つ能力を持つ

長さは1メートルと数十センチ

剣身は90センチほど

学院長

70歳を超えているが未だに40歳前後にしか見えない肉体を持つ昔は凄腕の魔法使いで、様々な伝説を残したとか・・・

白髪赤眼

73歳

172センチ  
55キロ

老人らしくのんびり過ごすことが好きで、よく休憩所で紅茶を飲んでいる姿が見られている  
後頭部は長くないし、三百年生きてるとか噂もされない

ガオン・ボーデヒ

各地に秘密の拠点が存在する名の知れた武器商人

本物の伝説を引き当てた凧のことを詳しく知りたがっている

銀髪銀眼

46歳  
185センチ  
86キロ

アイザック・バードナー

トワイライト観光案内所責任者

本編では名前が出なかったが、設定で公開

ガタイが良いのと、どこか威圧感が有るのは生まれつき  
常にエプロン装備

金髪碧眼

42歳  
188センチ  
90キロ

（救世の使徒）

グローツ

『レツサー王国第三王女暗殺』の命を受け、ツアー中のリディアを襲撃した

紅いローブの上に赤いマントを羽織るといふ格好をしている

戦いの際には常に紳士たれとしている

自分が本当に認めた相手を殺したい、という奇妙な殺人衝動を持っている

二つ名は『殺人騎』

金髪緑眼

24歳

183センチ

68キロ

得意魔法は『創造』  
クリエーション

一人称は俺つちと独特で強気な女性が好みなのでキレたラーシャすら構わず口説いた

戦い方は騎士像を『創造』で作り出して突撃させたり、武器や動物像を使った戦い方をする

凧との一騎打ちに敗北し、拘束される

グローツが組織（救世の使徒）について簡単に口を滑らせたのは、凧の秘められたチカラが関係している・・・？

ラーシャ

『レツサー王国第三王女暗殺』の命を受け、ツアー中のリディアを襲撃した

魔獣を操るという完全後衛型の戦い方をする

紺色のローブで全身をすっぽりと覆っている

緑髪緑眼

25歳

166センチ

48キロ

トワイライト観光案内所管理第二アスレチックにて、大型魔獣『ガドツソス』を操ってリディアたちを襲撃するが、凧によって撃破される

今度は『トワイライト・セカンディア』でガデスを30体近く操って陽動として動くが、今度はアインスの『烈火大樹』で全滅させられた

この時爆発に乗じて逃走している

ラーシャがぺらぺら喋っていたのは、凧の秘められたチカラが関係している・・・？

~~~~用語~~~~

アンスタイン

レツサー王国を含む、諸大国や小国、大陸や海を全てをまとめた一つの世界を、アンスタインと呼ぶ

他には、アンスタインの神々の名のあとに続く神としての象徴としても、使われる

グライデア大陸

アンスタインの二つある大陸の南側の大陸

アルヴァ大陸

アンスタインの二つある大陸の北側の大陸

レッサー王国

グライデア大陸の南東部に位置する大国

かつては小国であったが、戦争で勝利をあげていったことで、今の地位を築き上げた

平和となった今では、アンスタイン連盟の三大盟主の一国となっている

王都レシティアの近郊には魔獣が大量に棲息しているニダの森がある  
シュライト大公国とは親交がある

レッサー王立魔法学院

レッサー王国の王都レシティアにある、国営の魔法学院

レッサー王国が他国に誇る名門学院と、貴族や国民の間では認識されている

レッサー王領トワイライト

グライデア大陸一の観光地

特に『トワイライト湖』はアンスタインの中でも、三本の指に入るほどの名勝でもある

そして、レッサー王国が再び名を轟かす始まりの場所にもなる

グランソ帝国

グライデア大陸の西部に位置する大国

帝都はバラ・グランソ（意味はグランソの中心）で、アンスタイン

連盟の三大盟主の一国

昔、戦争に勝ち続けていたレッサー王国が唯一中立を保ったほどの  
軍事国家

別名は『魔法科学国家グランソ帝国』

数少ない科学が発展した国でもある

シユライト大公国

グライデア大陸の南東部に位置する大国で、レッサー王国の隣にある  
大戦争時代に大きな戦果を挙げ、今に至った

首都はガラで、アンスタイン連盟の三大盟主の一国

レッサー王国とは親交がある

オウン・アビリテイ  
保有能力

アンスタイン人なら、誰にでも得られる能力

主人公の風はどうやら違うようだが？

訓練によって得たり、いつの間にか得ていたり謎も多い

保有能力が進化したり、その人だけの為に変化したりした保有能力  
のことを、オシリ・オウン・アビリテイ 限定保有能力と呼ぶ

使い魔

魔法使いが生涯の相方として召喚する生物

召喚した生物の格が高いほど、その魔法使いの格も高いとされる

魔力暴発現象

アンスタインでは大気中にエレメンタル体が、そこかしこに存在し  
ており魔法使いの魔力に反応して、暴走するエレメンタル体が存在  
する

その暴発したエレメンタル体は何らかの影響を残していき、あらゆる  
イレギュラーを巻き起こす

風が召喚されたのは、この魔力暴発現象が直接の原因である

~~~~魔法について~~~~

魔法は、この世界にとつては、無くてはならない存在だ  
なぜならば、アンスタインアンスタインでは魔法科学というものが発展している  
この魔法科学とは、科学技術に対し、魔法を組み合わせることによ  
り高い効果を得るといふ試みだ

アンスタインでは、これを成功させ、一つの文化としている  
話を元に戻すと、魔法にはさまざまな属性がある

この属性は、エレメンタルと呼ばれており、自身の魔力を行使して  
大気にあるエレメンタル体を集める  
そして、出来るのが『属性魔法』エレメンタル・スベルだ

この『属性魔法』はさまざまなことに使われている  
病気を治したり、火を起こしたりと実にさまざまなことに使われて  
いる

他にも『セイント・エレメンタル聖属性』を使った『セイント・スベル聖魔法』や、『ダーク・エレメンタル闇属性』を使った『ダーク・スベル闇魔法』があるが、そちらは人間には使えないので、名前だけという  
ことにしておく

これまでの説明が、魔法についての簡単な説明だ

## 設定2（後書き）

各所にネタバレがありました  
だからどうした、と言われればそれまでですが

九話『ペテルギア宮殿』（前書き）

リディアの暴走が止まりません。

どうしたら良いんでございませよ。

まあ彼女なら大丈夫ですよ（何が？）

前置きは置いておいて、ご覧あれ

## 九話『ペテルギア宮殿』

レッサー王立魔法学院、中庭

トワイライトへのツアーから三日後。  
ベンチに座って涼んでいた凧のもとに、ライルが暇そうな表情でやって来た。

「なあ、ライル」

「なんだいナギ？」

「ツアーの時の連中さ、実家の方に帰る時にな。わっざわざ俺のとこまで来て、口々に文句言ってきたんだが」

「うわ、そんな連中はレッサーの貴族には相応しくないね」

「お前もあんなんだっただよ」

「昔のことは勘弁してほしいね。……ナギ、最近は何か面白いことかあったりしないのかい？」

「俺が知るかよ。……そいえば、リディアがお父さんに呼ばれたから王宮に行ったんだけど。  
これってあの時のことだよな？」

「あの時……ああ、彼女を狙った襲撃の時のことかい？さあね。……護衛が増えるのか、休学して王宮に閉じ込めておくのか、どうなっちゃうんだろっかね？」

「閉じ込める！？」

「声がデカイよ」

周りに人の気配が無いのを確認してから、凧へと目を向ける。

「普通に考えたら分かるだろう？第三王女を目の届かない場所に居させるよりかは、安全な場所に居させておいた方が護衛としては楽なんだろうさ」

「そりゃあ、そうなんだけどさ」

「もしか、愛しのミス・リディアが居ないのが辛いのかい？」

「なっ！リディアはそんなんじゃないやねえよ！」

「知ってるよ。君は鈍感そんなんだからね」

「？……何のこと言ってるんだよ？」

やっぱりねと呆れ返るライル。  
対照的に風は全く理解していないようだ。

「まあ分かんねえことは置いとくとして、だ。……ライル。  
お前、救世の使徒のことをどう思う?」

「……………ただのテロ組織、というレベルではなかったね。明  
らかに統制が取れた雰囲気だったし。  
何より、確固たる目的があるようにも見えた。……実際に  
目的があるんだろうがね」

「俺と戦ったグローツは、俺たちの組織の最終的な目的は世界を救  
うとか言ってたが、本気で言ってたのか?」

「本気だったんじゃないのかい? 自分達の組織に自信がないやつが、  
そんな大言するわけじゃないか」

「そう、だな。……………そうだよな!」

「心配なのかい?」

「なにがだよ」

「救世の使徒が、僕たちに報復を仕掛けてこないか。……………  
心配かい?」

「いや、俺たちは鍛えてるからな。自惚れじゃなく、強くなったと  
も思ってる」

「……………君は大概だけどね」

「うつせえよ」

ぷっと堪えきれず吹き出して笑い合う二人。  
どちらも、こんな日常が続けばいいと願っていた。

すでに手遅れとなっているとも知らずに。

王都レシティア、ペテルギア宮殿

ペテルギア宮殿は、王宮本殿だ。

玉座が鎮座する謁見のための大広間から、侍従やメイド、宮廷勤めの貴族が食事するための大食堂など、  
様々な施設が存在しているのだ。

現在リディアがいるのは、王の執務室だ。

「……………リディアよ。何故私がお前を呼んだか、分かるな？」

「はい、お父様。…………先日の私を狙った襲撃の件ですね？」

王           パトリック・ウル・レッサー           は、満足げに頷いた。

「その通りだ。そこで問題があるのだ」

「また私を狙ってこないとも限らない、ということですか？」

「ああ。嘆かわしいことにペテルギア宮殿内では、お前を幽閉するなどという野蛮な考えまである。

私は断固反対だが。反対なのだが、それは悪くない案でもあるのだ。危険から遠ざけるために、あえて彼奴らの目に届かないようにすることも必要になってくる。…………リディアよ、だからこそ何か妙案などはあつたりしないか？」

王の苦悩を知り、なんとかかしてやれないかと考え込むリディア。そこで一つの妙案を考えついた。ほとんどリディアにとっての妙案だが。

「お父様、私が襲撃された時に守ってくださった方々がいらっしやると申しましたね？」

「む、確かに言っておったな。それで、彼らがどうだと言うのだ？」

「彼らは私と本当の意味での、友となってくださいました」

「そうか」

「彼らは、いつだってこの私を守ってやると言ってくれました。彼らなら信用も信頼も出来ます。ですので、お父様」

守ってやると言ったのは屈だけなのだが、リディアは三人の総意だと思っただろう。

間違いではないが、間違いではないのだが。

どうやら乙女思考の前には関係なかったようだ。

「分かった。では彼らの人間性を見せてもらいたいから、このペテルギア宮殿に招待してやるとよい」

「はい、分かりました」

出ていく前に見えたりディアの顔は、恋する乙女のそれであった。  
.....ように見えた。

パトリックは、そう誤魔化すように頭を振った。

おのれ誰だ。

我が愛娘を引き込もうとする不埒者は。  
見つけたら打ち首だな。

真実は全く違うのだが、やることは変わらないのだろう。

違っていた場合のことを全く考えていない。

まさしく、この親あってあの子あり、だろう。

遺伝とは恐ろしいものだ、感じさせられる。

ぶるつと風の体が悪寒に震えた。

「どうしたんだい？・・・夏風邪でもひいたのかい？」

「いや、なんか。急に寒気を感じたというか、身の危険を感じた  
というか」

「ハハ、なにやら面白そうな気配だね。もし、その時が来たら爆笑  
してあげるよ」

「おい、失礼だぞ」

「まあ別に構わないじゃないか。今は夏期休暇中だぞ？学院に残っ  
ているのは、僕みたいに変わった人くらいなものさ」

「リディアとお前を一緒にするな。あいつは事情があるんだからな」

「僕にも事情の一つや二つくらいあ」

「ナギー！」

ライルが風<sup>カゼ</sup>に反論しようとしたところに、さっきまで話題の中心だったリディアが現れた。

「よお、リディア」

「よお、リディアじゃないよ！探してたんだからね」

風<sup>カゼ</sup>が喋ろうとしたところにライルの顔がちらつと見えた。

んだよライルのやつ。

ニヤニヤしてんなよ、暑さで頭でも狂ったか？

変な顔をしているライルにうつとうしそうな表情をする風<sup>カゼ</sup>。しかしリディアは違う意味で受け取ったのか、

「あ、ごめんねナギ。いきなり探してたからって言われても、迷惑

だったよね？」

涙目で謝り出した。

女の子の涙は強いもので、凧は慌てるしかない。

「うえ！？ああ、いや違うってば。今のはライルがウザかっただけだからさ」

「ウザかったとは失礼じゃないか!？」

「事実だろ」

「なんだとう!」

「やんのか?」

「やってやるさ!」

まあこの二人、仲良いのか悪いのか分かんないよ。

でも、楽しそう。

いいなあライル君。

そんなことを考えているのだが、視線はバツチリ凧を捕らえて離さない。

それでもリディアの視線に気づかないのは、ひとえに鈍感ナギクオリティーだろう。

「今日こそはその顔面に、拳を一発叩き込んであげようか！」

「良いのか貴族？そんな下品な物言いで」

「構わないさ。ここにいるのは、ただの男のライルだ」

「よっしゃ、じゃあ遠慮は要らねえな。さあ行くぜ、ダン」

「おつさ、相棒」

「ま、待ちたまえ！拳と拳の対一じゃないのかい！？」

「誰がそんなこと言ったんだよ」

「僕だよ！さつき普通に言ってたじゃないか！」

「知るか」

横暴だー！と叫びつつコメディのように吹っ飛んでいくライル。

ちよつと酷いんじゃない、ナギ？

そんなことを考えて（以下略。

それでもリディアの（以下略）

風がピクピク震えて動かないライルを、引きずって戻ってきた。これには流石のリディアも顔が引き攣りそうになったが、なんとか笑顔で固定させることに成功した。

「悪いなりディア。長いこと待たせちまったみたいだけど？」

「え、いいよ。それにしてもナギって、本当に強いんだね」

「いや俺なんてまだまだだ。アインスは俺と『本気』ではやってくれないし、ライルだつてメツチャ強くなってきてるし」

アインスが言うには、ライルは俺と同じくらいの才能の塊だつて言つてたから、かなりスゲエんじゃない？  
ライルも魔法の修行なんてしたことも無かった、なんて言つてたからな。

「ふうん、そうなんだ。ああそうだ、いつもの三人に用があつたんだ。ナギ、アインス先生を呼んできて欲しいんだけど、良いかな？」

「分かった。ちょっと待つてくれ」

「はい。………いってらっしゃい」

凧はリディアの言葉に少し面喰らうが、ニカッと笑うと、「おう、いってきます」と返した。

やだ、今の新婚さんの会話みたい。  
もう、ナギったら。

今の会話に大したことなどは無かったし、そもそも始めたのはリディアのはずなのだが、やはりレッサーの血はそんなことは気にしないようだ。  
とりあえず凧は、パトリックに目をつけられるのは間違いないだろう。

ライルが目を覚ますと、さっきの場所はカオス化していた。

ナギがない………これは構わない。

問題なのは、ミス・リディアだ。

頬を赤く染めている姿は、実に可憐だ。

しかし口元はだらしなくにへらとしてるし、意識は確実に、そう確実に妄想の中にダイブしている。

ライルが若干ながら引いているところに、アインスを連れた凧が戻ってきた。

「リディアー、アインズ連れてきたぞ」

「……………えっ！あ、ありがとうねナギ」

凧はわりと遠くから声をかけたため、リディアの顔は見ていなかった。

それはきつと、運が良かったと言えるだろう。

「嬢ちゃんよ、この時間帯はオジサンの趣味タイムだぜ？そこを狙って呼びつけるなんて、よっぽどの用なんだろうな？」

「えっ、ええ？」

「おいおい、変ないちゃもんつけんなよ。リディアが困ってるじゃねえか」

「あ、悪い悪い。嬢ちゃんは悪くねえな。んんっ、そいで用件はなんなんだ？」

「えと、みんなにはこれから王宮まで来てもらいたいんだけど」

「」「王宮!?!」「」

「へー、王宮かー」

一名ほど重大さを理解していないが、王宮へと招待をすることにしたリディアであった。

ナギ、大丈夫かな？

戻ってきたら常識くらいは教えてあげようかな？

ツ、ダメだよナギ、先生わたしの体のことは教えてあげないよ！

「……でもそんなにナギが知りたいのな」リディア、王宮に連れてつてくんねえのか？」ツ！

妄想を始めたリディアを緊急停止させた風。

横の二人は、サムズアップしていた。

「あっうん、ごめんね。校門の方に馬車を用意してあるから」

「リディア。なんか持っていくものとか、あつたりしねえのか？」

「ううんそれならね、ダンは持っていった方が良いと思うよ。お父様にも、手紙ですごい男の子がいるって書いておいたしね」

「すごい男の子か、なんか照れるな」

「全くその通りだと思うよ、ナギ」

「あ、ごめん。ライルのことはあんまり書いてなかったや」

「そんなあああああつー!!」

アインスは話に加わっていないが、横の方で腹を抱えて大笑いしている。

ライルと凧の扱いの差の露骨さが、ツボにはまったのだろうか。

そんなこんなでやいやい騒ぎつつ、一行は王宮へと向かった。

リディアを除く三人は、口をだらしく開けて唾然としていた。

でっけー。

城って、こんなデケエんだな。

初めて見るけど、こんな荘厳な雰囲気醸し出しているなんて、流石は王宮ということだね。

なんか十年前よりも、無駄な部分が増えてね？

そんな様子の三人の前にリディアが出てきて、

「よつこそ私の家へ！」

なんて言ってきた。

「よくぞ来たな。歓迎するぞ。そして我が娘を守ってくれたことを、深く感謝している」

リディアによってパトリックの執務室に案内された一同は、開口一番の謝礼にフリーズした。

やはり一名は、事の重大さを理解していないのだが。

「陛下！我々のような者に頭を下げるなど！」

「いや『救世の使徒』などという連中にむざむざ出し抜かれ、守るべき国民を戦いの場に出してしまったのは上の責任だ。……………だから謝罪させてもらいたい」

「（へえ、流石は建国以来の賢王と呼ばれるだけあるな。自分優先の宮廷貴族に聞かせてやりてえぜ）」

アインスは噂通りの人物であったことに満足した。

凧は礼をされるのに慣れていないのか、頭を掻きながら返す。

「ええと、そんなんじゃないですよ。ただ俺の大切な友達が危険な目に合うのが嫌だっただけで、やりたいようにやっただけです。その結果がああなった、それだけですよ」

「そうか、君は優しいのだな。…………君の名を覚えてくれな  
いか？」

「ナギ・ハツキです」

「ナギ君か、良い名だな。ところでナギ君は私の『オンリー・オウン・アビリティ限定保有能力』  
を知ってるかね？」

凧は首を傾げた。

『限定保有能力』って何だ？

『保有能力』の進化系のことか？

ちなみに凧はアインスから説明を受けたのは、『保有能力』だけだ。  
パトリックは朗らかに笑いながら、凧に説明する。

「ナギ君、『限定保有能力』とは、有り体に言えば唯の進化系だ」

「進化系かー。俺の『加速』も進化するのかな？」

「（……………加速？）それは分からんが、私のチカラは『精霊の知覚化』だ。文字通り、精霊が見えて会話できるようになる……………ただそれだけなんだがね」

自嘲的な笑みを浮かべるパトリックを、不思議そうに見る凧。

何でこんな顔してるんだ？

精霊と話ができるなんて楽しそうじゃん。

考えが顔に出ていたのか、パトリックは苦笑して凧に言う。

「精霊が見えるようになるということは、他の誰にも見えないということだ。だから周りから見たら私は独り言を言ってるようにしか見えないのだよ……………だからこのチカラを私はあまり好きにはなれなかった。しかしだ、今日私は初めてこのチカラに感謝しているよ。君のように精霊に祝福され、愛されている子に出会えたのだから」

「え？精霊に愛されている？それってどういうこと、ですか？」

驚いて地が出そうになった凧だが、慌てて言葉遣いを直す。その様子にパトリックはにっこりと笑う。

「ふっふっふ、言葉遣いは、君の好きにしたらいいさ」

「陛下!？」

「精霊が言ってるのさ。彼はありのままが一番だと。……話を戻そうか。私は精霊が見える、と言ったな。だからこそ判るのだよ。元々この部屋にいた精霊も、外から入ってくる精霊も、皆一様に君の周りで楽しそうにしている。それは即ち強さを持っている、ということだ。何者にも侵されない真の強さをな」

「（精霊も楽しむとかあるんだ。……じゃあ私の気持ちも精霊は分かっているのかな？）」

そう説明するパトリックの穏やかな顔は、精霊たちの感情を感じ取っているのだろう。

凧はパトリックの言う『真の強さ』について考えた。

真の強さって何なんだ？

真、しん、心……心？

もしかして、『しん』でかけてましたとかいうオチか？

寒い。寒すぎるぞ精霊。

そんなことを考えていると、ふっとパトリックの顔が綻んだ。何でだ？と凧が不思議に思うと、あっさりと答えた。

「不思議そう顔をしているな。私は精霊を知覚できるんだぞ？彼らが君に突っ込みを入れてもらったことに喜んでいたら、私にも伝わる」

「そうなんだ……ですね！」

「構わんさ、それが君の地なんだろう？」

「お、はい。……き、気をつけます」

「よいよい。地で構わんと言ってるだろう。……これは精霊の頼みでもあるのだ」

そんなことを言われたら従うしかない風だが、言葉遣いを気にしないで良いのなら気分が軽くなった気がした。

そういえば、俺たちって何で王宮（ウキ）に呼ばれたんだ？  
ちと聞いてみるか。

言葉遣いを気にしなくなった風の雰囲気は、先ほどよりも柔らかくなった。

そのことにパトリック（と精霊たち）は満足する。

「なあ王様」

「パトリックと呼んでも構わんぞ」

「え？」

「陛下?!」

「お父様！血族以外に名を呼ばせるのは、騎士に命ずるということと同義ですよ!？」

「……また弟子が常識外れになっちまいやった」

一人ほど何やら別のことにショックを受けていたが、気にしない。パトリックは、驚きの極みにある二人を手で制する。

「良いのだ。精霊は、こう言っている。ナギ君からは自分たちより強い力を感じるが、同時に温かいものに包まれた感覚がする、と」  
「はあ」

凧は精霊が何を言いたいのか、いまいち分からなかったが流しておくことにした。  
パトリックは変わらず穏やかな顔で続ける。

「君は、このレッサーに大きな影響を与えるだろう。そうなった時に、ただの一般人でいさせると君の身に危険が及ぶ。それは精霊が望まないし、私も嫌だからな。……それに」

一度言葉を切り、リディアに視線を向ける。

リディアは顔を赤くするが、風は何が何やらという表情をしている。

「それにリディアの護衛もして欲しいのだ」

「お、お父様!？」

「それだったら喜んでするよ、王様」

「そうか、やってくれるか。……では略式ながら、君をリディアの騎士に任ずる。リディアを守ってやってくれ、ナギ君」

「任せてくれ王様」

パトリックは満足そうに頷く。

ライルは面白くなさそうな顔だが、すぐに表情を戻した。

「では私の話は終わりだ、今日はわざわざ来てくれてありがとう。お礼に、小さいながらも祝宴を開こう。今日は王宮に泊まってくると良いぞ。……………それとナギ君は残ってくれ」

「？分かり、分かったよ王様」

「気軽にパトリックと呼んでくれ」

「それは流石に駄目じゃないかな？」

「君なら歓迎さ」

とりあえず三人は何も話すことなどないので、執務室から退室することにした。執務室の中には王としての仮面を外したパトリックと凧だけになった。

「さてナギ君、なぜ君が精霊に好かれたか分かるかね？」

「え？……………いや何が何だかさっぱり」

「それもそうだろう。これは一般人には分からなくても当然だ」

「一般人には？」

「そう、これは一部の学のある貴族か、専門の学者でなければ分らん。……君から、いや心よりそのさらに奥の、君の魂からとても強い聖属性セイント・エレメンタルと思しき魔力を感じる」

「魔力！？ 異世界から来た俺に魔力なんてッ、あっ！！」

「安心なさい。君がこのアンスタインの生まれでないことくらい、とっくに知っていたさ」

パトリックは変わらぬ穏やかな表情で、凧を安心させる。  
凧も凧で、この人なら大丈夫だろうと安心する。

「話を戻そうか。……この世には四つの代表的な属性があるのは知っているね？」

「前にアインスに聞いたことがあるよ」

「そうか、では二つの原初属性のことは？」

「原初属性？ 何じゃそら」

ようやく自分のペースを取り戻した凧に満足しながら、パトリックは説明する。

「原初属性とは、始まりの二神の属性のことだ。光り輝きし聖の神と、暗闇を纏う魔の神。二神は原初の魔法を行使していた。その魔法こそが、」

「原初・・・魔法・・・」

ただの属性の話から、急に神様の話になり思考停止しかけていたが、なんとか答えを導きだした風。  
我が意を得たり、とばかりに頷くパトリック。

「そうだ、文献によるとだ。原初属性の使い手は精霊に祝福されるか、あるいはされないかのどちらかだったらしい。聖は愛され、闇は拒絶される。そして君はあらゆる精霊に愛されている。だから私は君が、今は稀少な聖属性の使い手と踏んだのだ。・・・しかし君を残したのは、こんな話をするためではない。これはついでで、前座だ。ナギ君、君に任務を与える。厳しい任務だが、受けてくれるか？」

「それはリディアを守るために、必要なことなんだよな？」

「当然だ。・・・しかし、面倒なことをしなくて済んだ」

「面倒なこと？」

凧の質問にパトリックは、ああそれはだなともったいぶる。早くと急かしたい凧なのだが、どうにも助かった気がする。何でだ？と考える暇なく答えが示される。

「ナギ君。君はこれくらいはある規則と作法、用語が書かれた本を暗記できるかね？」

凧はそれを青い顔で否定する。

ちなみにパトリックが言ったこれくらいとは、だいたい広辞苑くらいの厚さと言えば想像が出来るだろう。

もちろん凧にそんな量を暗記できるはずもなく、全力で首を横に振る。

「いやいや結構だよ！……それで、任務の内容っていつのは？」

「うむそれはだな、王都より東のアルダイタンス領に現れた大型の魔獣『ジャイアントバズー』の討伐を頼みたい」

「え？大型の魔獣？」

「そうだ、リディアからもほとんど君一人で同じ大型魔獣の『ガド

『ッソス』を倒したとも聞いているのだがな？」

「俺が一人で勝てるわけないじゃん！」

リディアめ、なんか誇張してねえか？

どう考えても俺一人だったら死ぬっつうの！

実際リディアはありのままを書いたのだが、目の前にいてるパトリック親馬鹿が、娘の送ってくれた手紙を気合を入れて読んだのだ。結果、今の状態になっているのである。

「だが流石に将来有望な若者を危険に晒す訳にもいかん。そういう訳で、何人か兵士を連れていっても構わんか？」

「いやそれは別にいいや」

「ほう、何故だね？」

心底不思議そうな顔で問うパトリック。それに、さも当然だという表情で返す尻。

「いきなり見ず知らずの奴に、大型魔獣を倒しに行くから着いて来

い、なんて言えるほど面の皮は厚くないからさ。……………それに気心知れた間柄の方が、連携も取りやすいと思うからな」

「なるほど、確かにそれはそうだな。相分かった。では男衆三人で行くんだな？」

「あー、それでも良いんだけど……………」

「む？何かあるのか？」

珍しく言いよどむ凧を疑問に思うパトリック。

黙っていても意味が無いので、凧は素直に言うことにした。

「そのー、多分リディアは着いてくると思っただけだな？」

「成るほど、確かにあの子には目を離したくないものが出来たようだしな」

「やつと偽者じゃない友達が出来たんだからな。目を離したくないのも分かるような気がする。いや、俺も分かる」

「ぬ、私が言いたいのはそのうではなくてだな」

「え？……………他になんかあんの？」

パトリックは気づいた。

こやつ、まさか鈍感そつなのか？

……リディアも大変な子に目をつけたな。

なぜか急に黄昏れ始めたパトリックに、あれ俺へんなこと言っただけ？と首を傾げる凧。

んんつと咳払いをして話を本題に戻すパトリック。

「まあとにかくだ。リディアを連れて行くのは、護衛をするにあたってのデモンストレーションとでも思えば構わんが」

言葉を切つて、強く凧を見つめるパトリック。

凧も真摯な目で見つめ返す。

「我が娘リディアを傷つけるなよ。そして泣かせるな。護衛とは対象の命だけを守れば良いというのでなく、心も守らねばならんだ。ゆめゆめそのことを忘れるなよ、ナギ」

パトリックの強い意思が込められた言葉に、凧もしっかと頷く。

「任せてくれよ。俺だってそれくらいは理解してる。何より、この世界に来て初めて出来た友達なんだ。言われなくたって、守ってみせる」

「そうか、なら娘を頼んだぞ」

「ああ！」

「……………では皆のもとに戻るといい」

「分かった。騎士とかあんまり知らねえけどさ、俺のやれることは全力でやるよ」

「私は君を応援しているよ、頑張ってくれナギ」

「おう、首を長くして待っていてくれよ王様」

言うが早いか、ささっと執務室を出ていく風。

そのあとも何もせず、ただ佇んでいたパトリックだったが心の中の言葉を溢すように、

「頑張ってくれナギ」

ぽつりと呟いた。

アンスタイン某国某所

必要最低限の灯りが灯されている全体的に石で造られた広間。広間の中央には巨大な円卓が配置され、数人が座っている。豪華なローブを羽織り、上座に座っている男が厳かな調子で言った。

「……先日、『レッサー王国第三王女暗殺』の任を失敗したラーシャからの報告だが、また新たなことが判明した」

円卓の上座に近い席に座っている、緑色のローブの男が反応する。

「ほう、それはいかなことでしょうか？」

「……敵方には、聖を受け継ぎし者がいるというところらしい」

「「「!?!?」」」

発言した男以外の全員が驚愕した。  
広間が、俄にわかにざわめく。

「静まれ」

「もつ、申し訳ありません、閣下」

「よい」

閣下と呼ばれた男

ダレイクス

が、静かに諫めると

広間が静まり返った。

それに何の感慨も見せず、ゆっくりと静かに続きを話し始める。

「だが報告では文献に記されてあった一割にも及ばないらしい。．．．  
．．．．とは言え大型魔獣でもあるガドツソスを、一撃で消滅させるのは驚異としか言えん。ユリウス、メィア。今回の作戦は以前と同じだが、ターゲットにその男も追加する。だがもう一人の魔法使いの方も油断ならんぞ」

メイアと呼ばれた女は、黙して頷くだけだった。  
ユリウスと呼ばれた男は、恭しくお辞儀をして返答する。

「もちろんです閣下。我々は、以前のラーシャ達の失敗を糧とし、成功へと導きます。我々の成功の報を、ただ座して待っていていただけたい」

「うむ」

ユリウスはマントを翻し颯爽と出ていき、メイアはそのあとを着いていく。

ダレイクスは重々しく頷き、彼らの出陣を見送った。

「彼らの戦いに、栄光あれ！」

「「「彼らの戦いに、栄光あれ！」」」

ダレイクスとその場の全員の祝福は、二人の心を鼓舞した。

戦いはより激しくなる。

凧は否応なしに戦いの場へと誘<sup>いざな</sup>われる。

幹部十数人、下部組織数十と構成員数千の、戦いを求める組織に狙われた凧に戦う以外の道などなかったのだ。

因縁はトワイライトから始まり、決定的な確執はアルダイタンスで生まれることになるのだ。

再び起ころうとしている戦争の足音は、すぐそこまで聞こえてきた。

九話『ペテルギア宮殿』（後書き）

救世の使徒が本格的に出てきました。  
次の次くらいには、彼らとの戦闘が入りまーす。

十話『激闘、ジャイアントバズー』（前書き）

時間がかかりました。

それほど量の量では無いはずなんですが……。

見ていただいたら分かるはずですので、ご覧あれ。

十話 『激闘、ジャイアントバズー』

レッサー王国ペテルギア宮殿

執務室から出てきた尻をアインスは待っていた。

「あり？何でアインスがこんなところに居てんだ？」

「あ？弟子と話すために師匠が待ってちや駄目なのか？」

「いや、そういう訳じゃねえんだけどさ」

「んじゃ良いだろ。……………でだ、王様から何か言われたか？」

「まあ色々とな。魔法の話とかだよ」

そう言っつて曖昧に笑う尻。

アインスは深く追求はしないようだが、どうしても聞いてみたいことがあった。

「なあナギ。何か王様に聞かれたか？」

「え？」

今度の問いは、何か違った。

さっきの問いは興味本位のそれだったが、今回は真剣そのものだった。

だから凧も真面目に返す。

「聞かれたことはなかったけど、言われたことならある」

「へえ、どんな内容だ？」

「大型魔獣の、なんつったつけ？えっと、ジャイアントなんちゃらの討伐」

「そいつぁジャイアントバズーだな。……それだけか？」

「あとリディアを守れてさ。そういえば、そのジャイアン……  
・長いからバズーで良いか。それは前座つつてたけど、本命は  
何だっただんたろうな？」

「多分だが、それは」

「ナギ君、言い忘れていたことがあった。」

「うわぁー!」

扉を僅かに開け、顔を出したパトリックがいきなり話に割り込んできた。

驚きのあまり、凧は情けない声を上げる。

「さつきは言い忘れていたが、リディア専属の護衛の騎士になるためには相応の手柄が必要になる。君はすでに大型魔獣を一体討伐している上に、リディアを狙った組織の撃退と実行犯の拘束もしているからもう少しの手柄があれば騎士に叙任することが出来るのだ。バズーが現れた地域の民には申し訳ないが、まさにおあつらえ向きの獲物という訳だ。という訳で手柄確保の為に、アルダイタンス領に君の仲間を連れて行ってきてくれ」

パトリックのあまりにもな物言いに、つい凧は不満顔になる。王として、国の存続に関わるような事態を避けたいのは分かるが、どうしても納得できないといった顔をしている。パトリックは苦笑しつつも続ける。

「……さて本題に入るのだが、ここで大事なのは狙われているのが第三王女たるリディアというところにある。なぜ王位継承権一位のシュメルを狙わないのか、何か理由があるのだと私は踏ん

でいる。

だから君にリディアの護衛を頼みたいのだ」

「事情は分かるけど、何で俺なんだ？他にも、いや俺よりも強いやつとか居てるんだろ？」

「うむ、現時点の君より強いものは居てる。それは分かっている。……だが、護衛の真髄はさっき言っただろう」

「護衛対象の、身も心も守る……」

「（こいつ、そんなこと教えられたのか。その内、プレッシャーで頭パンクすんじゃないかね？）」

「うむ、そうだ。そしてこのペテルギア宮殿にはその条件に一致する者が居らぬ」

「ええ？本職なのには？」

「遺憾ながら、そうなのだ。この宮殿にいる者たちは皆、保身と出世で頭がいつぱいなのだ。……今にして思えば、リディアが王宮に帰ってきたがらないのは、幼い頃より彼らの本性を見抜き今も嫌悪しているからだろう」

パトリックは沈痛な面持ちで心情を吐露する。

皺が刻まれている四十代のその顔には、深い苦悩しか浮かんでいなかった。

「え、でもそんなの全然見せた様子も無かったのに……」

「あの子は昔からずっと、今も自分の気持ちを隠すのが上手なのだ。精霊が見えるお陰で何となく分かったつもりであの子を見てきたが、今も分かりはせんよ。……何せ考えてる事と言ってる事が真逆、なんて事もざらだったからな」

「じゃあ、俺が変えてみせるよ。俺、こう見えて話とか聞くの上手なんだぜ」

その自信に溢れた頼もしい言葉にパトリックは、全てを任せても構わないかもしれんなと笑った。

私たちのせいで王宮内では表情を変えることすら無かったあの子が、あんな風に表情を変えていたのだ。彼らになら、あの子を任せても問題ないだろう。

そこで凧一人ではないのが親馬鹿たる所以だろう。パトリックは、凧との問答で満足した。

「ナギ君、これだけは忘れないでくれ。あの子は君を、恐らくは一番信頼し、信用しているだろう。」

君といると落ち着くのは、何も精霊だけじゃない。精霊に愛されている者なら、皆が落ち着く。あの子もそうなのだろう。……

君はリディアの護衛たる条件を満たしている。私も君を信頼している。だから、頑張ってくれ。私にはこれしか言えない。……私は書類を捌かねばならんから、もう戻ろう。宮殿内は好きに動いてくれても構わんよ」

そう言つてさつさと部屋の中に戻っていったパトリック。壁にもたれかかり、一部始終を眺めていただけのアインスが何やら考え込んでいる風<sup>フエ</sup>に声をかける。

「だとよ、宮殿内探検でもしようぜ」

「そう、するか。……二人はどうしたんだ？」

「中庭の壁画を見に行つたぞ」

「壁画？そんなもんが宮殿の中にあんの？」

「おう。何でもレッサー王国が掘り出した数千年前のもんらしいぞ」

そいつあ漣えなと驚いてる風を見て、アインスは笑う。

シケた面してんじゃねえよ、馬鹿<sup>ナキ</sup>弟子。

テメエはアホみてえな面して笑つてりゃ良いんだよ。

早く中庭に行こうぜと急かす風を見るアインスの顔は、慈愛に満ちていた。

### ペテルギア宮殿中庭

屋根は無く遮るものが無い広大な緑地。

色鮮やかな花が咲きほこり、綺麗に整えられた芝生の中庭は庭園と呼ぶに相応しいだろう。

その庭園の中央に人が三人ほど手を回して、やっと半分を囲めるだろうほどの太い幹の大木が雄大に聳え立っており、その下には昨年掘り出されたばかりの数千年前の壁画が鎮座していた。

その壁画を見ている少年と、興味無さげに木陰に座っている少女がいた。

説明は不要かと思うが、少年がライルで少女がリディアだ。ライルが退屈そうにしているリディアに話しかける。

「ミス・リディア。暇そうだけど、私室に行ったりしないのかい？」

「行く意味が無いから良いよ」

「?.....なら良いんだけどもね？」

はて、行く意味が無いとはどういう意味だろうかと考えるライルだが、生憎考えても分からなかったので放っておく事にした。人間誰しも突っ込んで欲しくないことくらい、いくらでもあるのだから。

そこに目を輝かせ　　ていない凧が来た。

壁画を見て、期待外れだとしても言うように肩を落としている。どうも予想と違ったらしい。

「何だよ、数千年前のーとか言うからもっと凄えもんだと思ったのによ」

「お前はただの壁画に何を期待してんだよ」

「だってよ、数千年前だぜ？ロマン溢れる何かがあっても、バチは当たんねえだろ」

がっくりという擬音が聞こえそうな様子で項垂れる凧だが、くすくすと鈴を鳴らしたような笑い声が聞こえてきた。

声の方を見ると、リディアが肩を僅かに上下させて笑っていた。ちなみにライルは朗らかに笑っているリディアを見て顔を赤くさせている。

「ふふっ、ナギって相変わらず面白いことを言うね」

「あれ、今のって面白かったかな？」

「ナギだからだよ？」

「てことは馬鹿にされたのか？」

もう違う！と頬を膨らませるリディア。

凧は、あれーじゃあ何なんだ？と首を傾げるばかりだ。

「なあリディア、これって触っていいのか？」

「壊さなかったらね」

こんなデケエのに壊せるかよと口を尖らせる凧を見て、またくすくす笑い出すリディア。

………こんなに笑ってるリディアが、子供の頃は無表情を貫いていた、か。

王様には悪いけど、どうしても信じられねえよな。

そう思いつつも、触っていいなら触ろうかなと壁画に触れた瞬間。  
凧の意識に何かが入ってきた。

何だ！何かの魔法か！？

違b h、我j k v k d y t kの。

jつてh聖d d k mれ、闇をvけ、f v安寧w m t r k h者だ。

聞こえねえよ、何て喋ってんだよ！

そl t、b nお前f t j t v x zのか。

はあ？俺が何だよ！？

おf q我p h kし者。全てl v r p s gなるl p。

いd r j無t y m w討mすらk q l g k s g g。

おい、ちゃんと言葉にしろ！！

大h r w、おk r k p l t rにはk t k r r q化していq。

・・・我がz c x m q g jるhも、あとq w v。

おq h k、我のk d h z m cう。

あ？おい、どこ行くんた？ちゃんと説明しろよ！

さらbだ、我が後qたるyよ。

おい！ちゃんと説明してから消えやがれ！！

凧の意識が戻ってきたのは、壁画に触れてから僅か数秒後だった。

横から不思議そうな表情のリディアが近づいてきた。

「どうしたの、ナギ？何か顔が怖いよ？」

「えっ？わ、悪いどんな顔だった？」

「何かに怒ってるような、そんな顔だった」

「そうだったのか。ハハ、ハハハ悪いな何かさ」

乾いた笑い声を上げる凧を心配そうにじっと見つめるリディア。  
何かやりづらいなと凧は怯むが、そこにアインスが割り込む。

「おーい、お嬢ちゃんよ。宮殿の中を案内してくれよ！」

「はいはい、分かりました」

アインスの乱入に、リディアは面白くなさそうに口を尖らせる。  
凧は助かったと小さく息を吐いた。  
そこへすかさずライルが近づいてきた。

「ナギ、さっきはどうしたんだい？何やら浮かない顔をしていたけども……」

「悪い、気にしないでくれ。ちょっと考え込んでただけだからよ」

「……なら深くは追求しないが、いつでも相談に乗るよ。何せ僕たちは友達なんだからな」

「おう。ありがとな」

自分にはもったいないくらいのもので出来た友達だと思いながら、二人はリディア達の後に続くことにした。

時間は流れ日は落ち、既に夜となった。

あの後、リディアの案内で様々な場所に行った三人。

ペテルギア宮殿のシンボルとも言える大時計塔といった象徴や、軍の空戦部隊や陸戦部隊の騎獣舎といった軍用施設など様々な場所を訪れた。

流星に軍用施設では警戒されたが、リディアの姿を見ると元の仕事（騎獣の掃除）に戻った。

そして今はパトリックが言っていた通り、祝宴が開かれている。祝宴は小さいものだったが、異世界出身の皿からすれば初めてのこ

となので十分に楽しめている。  
そんな凧の元へ一人の男性がやってきた。

「やあ、君がナギ君かい？」

「？そうですけど、どちらさまで？」

ああ自己紹介が遅れたねと微笑する男性。

凧は、あれーどっかで見たとあるような？とついまじまじと見てしまふ。

男性はそれに構わず、優雅に一礼し名乗る。

「初めまして、僕はシュメル・アル・レッサー。王位継承権第一位の第一王子さ」

「は？」

予想外の人物の登場に、ぽかんと口を開ける凧。

目の前の男性　　シュメルは、尚も微笑んでいる。

凧はハツとして、改めてシュメルを見る。

少し癖のあるウェーブがかかった髪は、リディアと同じで蒼く瞳の色は淡い青だ。

顔立ちもどことなく似ている。そして超美青年だ。  
王族って美形揃いなのか？と考えた風は悪くないはずだ。

「そんな反応になるのも仕方が無いと言っものかな？何せ振り向いたら第一王子が居たんだ。無理も無いさ」

そう言っアハハと朗らかに笑うシユメル。

何かそこらの貴族は嫌味な奴が多いけど、王族は懐が広い人ばっかだな。

やっば親があんなだからかな。

聞きようによっては不敬罪にも取られかねないことを考える風。  
幸いなことに顔には出ていなかったようである。

「……ところでナギ君。君は異世界出身と聞いたが本当かい？」

「！……どこで聞いたんですか？」

「父上からね。安心してくれ、これは国家最重要機密にされているからね」

「え？国家……最重要？」

え、何それ？俺すげえじゃんと混乱が一周して逆に冷静になる風。いやフラットになったと言っべきだろうか。

シユメルは、誤解が無いように言っておくけど前置きして話を続ける。

「今まで宮殿内の誰にも心を開いたことがなかったあの子の心を、いとも簡単に開いた君を宮殿内の貴族たちはどう思うだろうね？」

「……自分たちのもとに取り込もうとするか」

「邪魔だと思って殺すか。……そのどちらかだろうね。そうならないようにするために、王族にのみ知らせ、他の誰にも知られないようにするんだ」

「なら、王子様も王様も命の恩人って訳なんだ、ゲフン……なんですね」

「ついつい敬語が崩れそうになる風。」

それを見て、またもシユメルは笑う。

「父上の言った通りだ。喋りづらいなら、君の地の話し方で構わないよ。君とは仲良くなりたいからね」

「はあ、分かり、じゃない分かった」

シユメルはその様子を見て嬉しそうに笑う。

凧は、何故シユメルが笑うのか分からなかった。

何で王様も王子様も、俺がタメ口になったら笑うんだ？

考えても全く分からないので、凧は直接聞くことにした。

「なあ王子様。王様もそうだったんだけど、何でこの喋り方で笑うんだ？」

「うん？簡単だよ。父上の血を継いでると少しだけ精霊の感情が伝わってくるのさ。きつと精霊は君がいつも通りであることを望んでいるんだろっさ。その精霊の喜びが僕にも伝播して、つい笑っちゃうのさ」

「ふうん」

「さて僕は、そろそろ戻るよ。馬に蹴られて地獄には落ちたくないからね」

「？」

何のことだと聞く前に、シユメルはさっさと戻ってしまった。

何だったんだろなと頭を掻いてるとリディアがよって来た。

「ねえナギ」

「お？どしたリディア？」

「……………やっぱり良いや。私、もう疲れたから寝るね」

「……………分かった、お休み」

「うん、お休み」

言うだけ言うとリディアは、（おそらく）私室に戻っていった。

何か、元気なかつたなアイツ。

王様も言ってたけど、宮殿が嫌いなのかな？

考えても、リディアと仲良くなって日が浅い凧が考えても何も分からないので、思考を放棄することにした。

その後、凧は飯うまいとか、王様に任務のことを詳しく聞いたりとなんやかんやで祝宴を楽しんでいた。

## 翌日、アルダイタンス領

アルダイタンス領は農業が盛んだ。ここで収穫されるアルマ麦は良質なスープの原料となり、他国にも輸出されている。そして、レッサー王国の中で数少ない『真の貴族』でもあり、領内に多数の別荘を持つアルダイタンス伯爵の治める地でもある。

一台の大型馬車がそのアルダイタンス伯爵家別荘の一つに到着した。両側にある扉が開き、凧とリディア、もう一方からアインスとライルが順番に出てくる。

出迎えの侍従などはいない。

リディアが望んだということもあるが、この時期は収穫の時期であり人手が足りないのだ。

あまりの人手の足りなさに伯爵自らが収穫の手伝いをしたこともあるらしい。

さらにそこへ大型魔獣のジヤイアントバズーだ。

討伐隊を編成し、伯爵が自ら率いていったのだが。

結果は焦った兵士が陣形を乱し一気に作戦が瓦解し、そこを突かれ大ダメージを受けたので討伐隊は何とか撤退した。その時、討伐隊は半分以上の人数が命を奪われていた。

そんな事情もあるので、現在別荘には人がいないのである。

凧は両肩に荷物を担いで、別荘の中に入る。

別荘とはいえ、有力貴族のそれなので大きさが凄い。

どれくらいかと言えば、確実にスパーマーケットほどの大きさはある。ちなみに三階建てだ。

エントランスはおよそ六十坪ほど。・・・畳ではなく、坪だ。

ここでのパーティーも兼ねていると考えれば、納得もいくかもしれない。

「デケエな」

「そうだろう？何せ有力貴族の別荘だ。金が掛かってるわ掛かってるわ」

「アインスも貴族なんだろう？家、こんぐらいデケエのか？」

その問いに、苦虫を噛み潰したような顔をするアインス。  
あり、地雷か？と風は思ったが、どうやらその通りらしい。

「俺はしがない子爵なんでな。別荘なんぞ無えし、家はここの三分の二くれえだよ」

「んー、それくらいあつたら十分じゃないか？」

「まっ、そうなんだがな」

「アインスの性格なら、でかすぎたら気分悪いだろ？それくらいがアインスにとっての最適だと、俺は思うけどな」

「はん、分かったような口を利きやがる」

「分かってるからな」

お互いに我慢しきれず、呵呵と笑う。

屈託の無い笑顔を見て、リディアはやきもきしていた。

男の子とばかり仲良いのに、私を見てくれないんだから。

やっぱり押しが足りないのかな？

少しばかり暴走しているが、恋しちゃってる乙女には関係なかった。振り向いてももらうためには色々おかしくなってもいいもん！と、無駄なところで無駄に気合を入れるリディアだった。

余談だが尻は料理が出来る家庭的な女の子がタイプで、リディアは料理上手（魔法学院は自炊可）だから条件はクリアしているのだが、しばらくそれが判明することはないだろう。

荷物を持ち込み休憩した後用意を整え、ジャイアントバズーを討伐しに行くかとなったのだが問題があった。

リディアをどうしようとなったのだ。

普通に考えれば、実戦経験皆無な王女を大型魔獣との戦いに連れて行く訳にはいかないのだが、別荘に一人残していたら救世の使徒に殺してくださいと言ってるも同然だ。

そんな訳で、リディアを連れて行かざるを得ないという事態になったのだ。

パトリックの言っていたデモンストレーションが、現実となってしまったのだ。

もちろんそんな事態は誰も望んでいなかった。  
け喜んでいた。

否、一人だ

当事者の一人であるリディアだ。  
不謹慎とは分かっているが、それでも凧と一緒に居られるのは嬉しいらしい。

それから伯爵が教えてくれたバズーの住処のすぐ近くまで行き、今は草むらに身を潜めてバズーが戻ってくるのを待っているところである。

バズーの住処は洞窟の中で、ちょうど洞窟を囲むように草むらがある。

草むらに身を潜めておよそ三十分経っている。

「ナギ、いつまでこうしてれば良いの？」

「バズーが来るまでだ。みんな条件は同じなんだから我慢するしかないねえって」

「・・・・・・・・分かった」

ずっと同じ体勢でいることに疲れたリディアが、ぼそつと文句を言う。

しかし凧も同じ体勢なためあまり強く言えず、結局は正論で論破された。

その時、バサアツと空から力強い羽ばたきが聞こえた。

バズーが両手に獲物を携えて、狩りから帰ってきたのだ。

凧がバズーに抱いた印象は悪魔だ。

黒く艶のある皮に銀色の爪、まさしく悪魔の体現のような翼と尻尾。後ろに流れるように生えている二本の螺旋状の紅い角。

高さ二十メートルはあるうかという大きさ。

まさに大型魔獣の名に違わぬ、禍々しき存在感に凧は圧倒された。

バズーが巨体を持て余すことなく、ゆっくりと降りてくる。

そして着地した、その瞬間。

地面が爆ぜた。

アインスの魔法

『グラウンド・ボンバー直下爆発』だ。

同時にアインスとライルの二人が凧から離れるように走っていく。

バズー討伐にあたっての作戦は至ってシンプルだ。

アインスとライルの二人でバズーの気を引きつつ、魔法でダメージを少しでも与える。

凧が出来た隙を狙って、弱点である尻尾を切断し弱体化させる。

弱体化したところを凧の『セイント・セイバー聖神の極光』で撃破しようというのだ。

証拠として尻尾も残り、無理の少ない作戦だ。

バズーが大してダメージを負っていない様子で爆炎の中から現れた。

これは良い。まだ予想の範疇だ。

だが何にでも例外はあるものだ。

バズーの後ろからもう一体が出てくるなど、誰が予想出来ただろうか？

「おい、マジかよ」

「そんな……」

凧の視界の中でアインスとライルが呻いているのが見えた。アインスは、凧を信じて作戦を変更する。その作戦が凧に負担を強いるものだとしても。

「ナギ、作戦変更だ！俺たちで一体をやるから、お前はもう一体をやれ！」

「分かった！」

凧は、不利だと分かりつつも眼前で聳え立つ悪魔バスーと相対する。バスーは開戦だと言わんばかりに、耳に響く金切り声で咆哮する。

「ギイイヤアアアアア！」

「上等じゃねえか！ぶつ潰す！！！」

二体揃って吼えたからか、凧とアインスも揃って返す。激闘の火蓋が、切って落とされた。

アインスは久しぶりの大型魔獣との戦いに、血を滾らせていた。

「まさか、番つがいのバズーたあな。おいおいどうしてくれんだよ。そんなイレギュラーのせいでよ、おっさんがいい歳こいて燃えてきちまっただろおが！こんな興奮してんのは十年前のあの時以来だからな、その分の落とし前はつけてもらおうぞ？このデカブツ野郎があ！！」

「アインスさん！？あんたそんなキャラだっけ?!」

「こいつのせいでいつもの澄ましたオッサンはいねえんだよ！今はただの元軍人の『烈火』のアインスだああ！！」

「さらに火がついた!?!」

アインスは叫ぶと、自分の影から一振りの剣を取り出した。それは赤かった。剣身、鍔、柄の全てが赤で構成されている。ライルが驚きながらアインスに問う。

「アインス、それは一体・・・？」

「見りや分かんたら」

「剣つてことくらい分かるよ！それはどんな剣かってこと！」

「良いぜ、教えてやらあ。………ほっ、実はこいつは武器商人ガオンから買ったモンだ！」

「な、何だつてー！」

「嘘だ。本当のところは、火の神の加護を受けた火の聖霊王たる『ヴェリウル』に気に入られたんで貰ったんだよ。ツよつとあ」

バズーの大振りな拳の一撃を、巧みに回避しながら説明するアインス。

アインスの説明にライルはただただ驚くばかりだった。

今まで普通の貴族のオツサン（失礼にもほどがある）と思っていた人物が、そんなスケールのでかいことを成し遂げていたのだ。

これで驚かない人物は何にも驚かないだろう。

「えっ、アインスってそんな凄い人だったのかい？」

「おう、そんな凄い人だったんだよ。だから敬え。偉大な師匠を敬え」

「いやそれとこれとは話が別だよ」

ちくしょおおおお！と叫びながら、赤い剣を振りかぶっている。何をするつもりかなと眺めていると、振り下ろした瞬間バズーの腕が爆発した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「うおらあ！もおう一発っ！！」

ズドオという激しい爆発音がライルの耳を打つ。

今度はバズーの片翼が爆発した。バズーが予想外の事態と痛みに悲鳴を上げる。

そんなことはお構いなしとばかりに、アインスは剣に魔力を込める。込められた魔力は尋常ではない量で、赤い剣は凄まじい輝きを放つ。洩れ出た魔力はアインスを包む赤いオーラのようになっていた。

アインスは洩れ出た魔力をも有効活用するために、魔法の詠唱を始める。

ライルはバズーの気を引くために、震える足を叩き前へと走り出す。

ライルはアインスとの修行のお陰で、オウン・アヒリテイ『保有能力』のクイック・リード『高速詠唱』を会得していた。

そのため以前は時間を掛けなければ使えなかった魔法も、今では破壊的なまでに短い時間で使えるようになった！

新たなチカラを得て強くなったライルは、以前とは別人のようにす

ら感じる。

「……………『ウイント・ドローラ風撃の槌』！！」

「……………ウイシユタリ・全てを燃やし尽くす火の王よ、アイネギッタ獄炎の剣を振りかざし、アイオント・スラ・アランタ仇オなす者を塵にせよ」

ライルの『風撃の槌』が、バズーの腹に直撃し怯ませる。

今の彼は風を相手にしても互角に戦えるまでに成長している。素手限定だが。

何よりライルがここまで頑張れるのは、後ろから聞こえるアインス師匠の力強い詠唱のお陰だ。

『高速詠唱』を持っているアインスが、わざわざ普通の詠唱をしているのだ。

それが尋常ではない魔法なのは誰だって分かるだろう。

彼の魔力が、詠唱の一つの区切りごとに脈動しているのが分かる。

どくと震えるたびに、大きく強くなっていくのが分かる！

「ライル、ディアート・ヴェンタ離れてる！！……………文字通り、塵にしてやる。食らいやがれ、『ディアート・ヴェンタ無窮の業炎』アアアツツ！！！！」

詠唱の完成と同時に赤い剣を振り下ろす。

そろそろ夜になるつかという時間帯、夕暮れの紅い太陽が地上にも  
う一つ現れた。

ライルはその圧倒的なチカラを、ただただ目に焼き付けた。  
バズーがどうなったかなど、もはや語るまでも無いだろう。

凧はバズーに近づけないでいた。

近づこうと思って動けば、バズーの猛攻で近寄れない。  
かといって離れれば攻撃手段がない。

そして地味に攻撃が掠り、じりじりと少しずつダメージが蓄積して  
いく。

正直、凧は手詰まりだった。詰んでいると言っても過言ではない。

しかし光明が見えた。

文字通りの光明が。

アインスの放った『無窮の業炎』は、離れた場所で戦闘を行って  
いた凧たちの元へも届いていた。

あまりの衝撃に凧は軽く十メートルほど吹き飛ばされた。

凧が体勢を立て直し起き上がると、ひたひた 膝き痛みで悶絶しているバズー  
が目に入った。

アインス、ナイスだ！

これ幸いと凧は駆け出す。

狙いは言わずもがな、『アンチ・セイント・エレメンタル 聖神の極光』による一撃必殺だ。

だが、バズーの抗聖属性の高さは特筆すべきものがある（アインス  
談）。

そのため凧は全力で放たねばならないのだが、良くも悪くも予想外

のチャンスだったため込める魔力が不十分なのだ。

「相棒、行けるぜ！このまま突っ込め！」

「ホントに行けんのかよ？」

ダンが風の後押しをする。

風はいまいち信じ切れていないが、それでも信じて突っ込む。

「安心しな。確かに相棒の魔力は不十分だが、ここには大量の火のエレメンタル体がある。多少火っぽくなるが、余りあるほどの魔力がチャージできらあな！」

「そうか………ってどうやんだよ!？」

「それも安心しな。相棒が魔力を込め始めりゃ自然と寄ってくる。だからお前さんは、愚直に集中してりゃ良いんだよ」

そう言われた風は素直に集中を始める。

ダンにチカラが集まるのが分かる。熱い情熱のチカラ。いつもアインスから感じてるチカラだ。

そう思った瞬間。

さらにチカラが、火のエレメンタル体が流れ込んでくる。

その強さを感じながら、凧は加速する。

一瞬にも満たない時間でトップスピードに乗り、その速度を維持しつつ、跳躍する。

膝きおよそ十メートルほどになったバズーの遙か上まで跳び上がり、ただバズーのみを貫くために『突き』の構えを取る。

バズーを倒すために、全てのチカラを一点に収束させ、全力で放つ！

「『セイント・セイバー聖神の極光』アアアアアアア！！！」

アンスタインに再び展開された純白のオーロラは、一本に纏まり微かに赤みを帯びていた。

十話『激闘、ジャイアントバズー』（後書き）

結構な量だったかもしれないです。  
ってか今回、厨二全開ですね。

アインスの詠唱なんてもう・・・、ニタニタしながら書いてました  
がね。

それでは次回まで、御機嫌よう！

十一話『強襲、救世の使徒』（前書き）

今回は、短めです。

あとタイトル通り、彼らとの戦闘です。ご覧あれ。

## 十一話『強襲、救世の使徒』

翌日、アルダイタンス伯爵家別荘

昨日凧達は予想外のバズー二体との激闘を乗り越え、疲れ果てた様子でアルダイタンス伯爵家の別荘へと帰ってきた。だが別荘に帰ってくるまでに問題があった。

それは何かと言うと、夜行性の魔獣が出るわ、バズーとの戦闘で疲れているから倒すのも逃げるのも苦労するわと、かなり大変だったのだ。

そして帰ってきた後も問題があった。

リディアが凧に無茶してポロポロになったことについてでありがたいお説教をしているので、誰も食事をしていないのだ。

この中でまともな料理を作れるのは、リディアただ一人だけだ。

ライルは貴族のお坊っちゃまなので言わずもがな。

アインスは元軍人だったのだが、作れるのは野生の植物を使ったものらしい。

なので、まともな食材を使った料理は不可能という訳だ。

凧も作れるには作れるが、それはあくまで地球での話だ。アンスタインでの料理など知らないし、そもそも調理に、簡単なものとはいえ魔法を使うのだ。

魔法が使えない凧には、どだい無理な話というものなのだ。

……リディアは凧の料理を食べたがるだろうが。

そういう訳で、彼らが食事にありつけたのは引き攣った顔の凧が、腹を空かせて机に突っ伏している二人を指差してから三十分ほど後のことである。

それから時間は流れ、今日。凧達はリビングで朝食を取っていた。アインスが唐突に凧に話しかける。

「なあナギよ」

「あん？どしたんだ、アインス？」

「いや大したことじゃないんだが、何でそんな疲れた顔してるんだ？」

「まあ、少年の事情ってもんがあるんだよ」

「へえ、そうか」

二人が会話している間、水面下での会話が同時進行で行われていた。有り体に言えば、アイコンタクトだ。アインスがリディアに聞かせようという内容じゃないと判断したのだろう。訳すると、

『アインス、昨日リディアが部屋に入ってきた！』

『ほうほうそれで？』

『いや大したことはなかったんだ。色々理由付けて、何とか切り抜けた！』

『んだよヘタレ野郎が。男ならいつそ押し倒せ』

『そんなこと出来る訳無えだろうが！恋人でも無いのにそんなこと  
しまったらキレた王様に殺されるっ  
つうのー！』

『ちっ、この朴念仁が！』

とこんな風に会話が繰り広げられていた。所要時間は二秒。  
素晴らしい師弟関係だと称賛すべきだろう。

ちなみにライルは会話に参加していないが半分眠っているので、そ  
っとしておいてやろうというのが無言の会議結果らしい。  
リディアは何かを考えているのか、食事の手を進めているだけだ。  
なので必然的に二人しか会話しない、ということになっている。

「そうだ、ナギ。今日からはより実戦的な鍛練にしないか？」

「良いけど。……やっぱり昨日のことか？」

「ああ、いつまたあんなイレギュラーが発生するか分からんからな。  
備えておいても、バチは当たらんのだろ」

「つか当たってもらったら困るしな」

そいつあそうだと笑うアインス。つられて笑う風。

お互いに、この平穏な日常を大切にするために強く在ろうとする。

幸せな時間を守ろうとするために、もっと強くなろうとするために、  
彼らは己を鍛えるのだ。

自分達の日常を、壊されないためにも。

救世かれらの使徒は、すぐそこまで迫り来ている。

さらに時間は流れ、昼食後の模擬戦を終えて凧はライルと散歩しながら雑談していた。

修行のことや、実戦での動き方についてなどただの少年がするような会話ではないが、二人が楽しめているのならそれでも構わないだろう。

「ナギ、もう一回模擬戦するかい？」

「そうだな、もう一回するか」

そう言って二人は十数歩分ほど離れた場所に向かい合う。

凧はダンを使って接近戦を挑む白兵戦スタイル。

ライルは『高速詠唱』を使って魔法の弾幕を形成する砲台スタイル  
(アインス命名)。

ライルが『風剣』を放つ。ただしトワイライトで使った時とは違い、

ほぼ透明で数十の切っ先が全て凧を向いている。  
凧は『加速』で射出された風の剣を避けていく。

凧は弾幕を掻い潜りながらライルに接近しダンの側面で薙ぎ払おうとするが、魔力強化した足を巧みに使い、軽々と避けていく。振って避けて振って避けて振って避けての攻防を繰り返すと、ライルが凧の懐に潜り込み顎を狙って右の拳を振るう。

凧は上半身を反らして避け、左の拳をライルの顔面狙って体を擦りながら突き出す。

ライルはその拳を同じく左手で受け止める。

二人ともその体勢のまま睨み合っていたが、同時に蹴りを放とうとする。

しかし蹴りが放たれることは無かった。

別荘の方向から爆発音が聞こえたからだ。

凧とライルは組み合った体制のまま、視線を別荘に向ける。

すぐさま走り出す二人。どうやってここを突き止めたのか不明だが、今はそんなことを考えている暇では無い。

リディアが危ない。凧の胸中を占めていたのはそれだけだった。

時間は遡る。

凧とライルの二人が散歩をしていた時のことだ。

アインスは自分に宛がわれた部屋で寛いでいた。

ふと屋敷の近くでこそそそしている何かの気配を感じ取った。アインスが一気に窓から外に出ると、一人の男が佇んでいた。

紫色のマントを羽織り、銀色の軽鎧を着た肩まで伸びた金髪と切れ長の碧眼の男だ。

そこらへんの傭兵かと考えたアインスだったが、すぐにその考えを否定した。

ただの傭兵がこんなトコに来るわきゃ無えか。

つたく何考えてんだ俺あ、やっぱ平和ボケしたか？

アインスが黙っていると、様子を見ていたのと思うたのだろうか。男が話しかけてきた。

「よう、何黙ってたんだ兄さんよ？ビビったのか？」

「はっ、冗談言うなや。誰が誰にビビってただよ」

「おっとと、違ったのかい」

「はっはは、つたり前だろ。ぶっ飛ばすぜ？」

「おいおい、んなこと言ったら負けた時恥ずかしいぜ？」

「燃やし尽くしてやるつか？」

そう言って、火のエレメンタル体のオーラを纏うアインス。だが目の前の男も同じように火のエレメンタル体を纏う。

「ッッ！」

「おいおい、そんなもんが出来ねえとでも思ったか？救世の使徒も舐められたもんだねえ。ウチは質も量もものすげえんだぜ？」

「へっ、なるへそな。びつくりしちまったぜ。……………んで、猿真似はそれで終しまいか？」

「猿真似だと？貴様、この『灼熱の志士』を、このユリウスを愚弄するかッ！」

「今のが猿真似じゃねえなら何なんだよ？」

「くそ、これが陽動じゃなかったら本気でいけるものを……………」

「何、陽動だと？」

先ほどまで屈辱で歪んでいたユリウスの顔が、今度は愉悦で歪む。ユリウスは笑いながら、手品のネタばらしをするかのような気軽さで語りだす。

「そう、そうだ！俺はただの陽動さ！あの王女様の始末を確実にするための、陽動なのさ！」

「おい、ユリウスとか言ったか？何故あのお嬢ちゃんを狙ってきやがるんだ？何故、第一王子のシユメルを狙わねえんだ！？」

「さあてね、そいつあ知らんね。何せ俺たちは閣下の命令通り動いてるだけだからな。理由とかは知らんが、閣下が殺れと仰るからには何か深い事情でもあるんじゃないかねえか？」

「くそッ！」

アインスが駆け出そうとすると、二人の周りを巨大な炎の壁が包んだ。

ユリウスの魔法だ。アインスはこれほどの規模の魔法を高速で展開したユリウスへの評価を改めた。

猿真似火使いから、強い火使いへと。

その時、別荘の一部が激しい音と共に爆発した。

「なっ！？」

「おーおー、やりよったよ。かなりの魔力を込めたんじゃない？メイアは手加減つてもんを知らんからね」

「くそっ、こんなところでもたもたしてる暇は無えつてのによ。邪魔しやがんじゃないかねえ、クソがああぁー！！」

「お？教師って割には、妙に入れ込むね？……惚れてんの？禁断の愛？」

「な訳ねえだろ。俺の弟子と見事に引つ付いてくれるまでは、あの嬢ちゃんを殺される訳にゃあいかんって訳だ。分かっただらすっこんでろ」

「そももいかんね。こちらら任務だからさ。下手すつと首が飛ぶのよね、物理的にさ」

勝手に飛んでると言ってみるが、大して反応が無い。

こちらの狙いが読まれているらしい。相手を揺さぶって隙を突こうとしたのだが、ユリウスは予想以上に強敵なようだ。

しゃーねーか。手の内はまだ見せるべきじゃねえな。

んまあ、あいつなら間に合うだろ。

アインスは強行突破はせず、凧がリディアを助けるだろうと思いつ、そのまま動くことは無かった。

結局、この後ユリウスが撤退していくまでアインスは動かなかった。

凧が別荘に到着した時、二度目の爆発が起きた。

ちょうど凧の進行方向に穴が空いた。これ幸いと、その穴から中に進入する。

別荘の中は、つい先ほどとは全く別の空間となっていた。

飾られていた調度品は粉々になったものや、吹き飛ばされたものなど様々だ。

床に敷かれた絨毯は大部分が焦げている。

部屋を区切る石の壁は、もはや飾りも同然だ。

凧がリディアはどこかと視線を巡らせると、すぐに見つけた。

正確に言えば、魔法で出来た巨大な赤い剣を掲げた桃色の髪の少女が目を引いたからだ。

その足元で尻餅をつき震えているリディアが、凧を見つけた。

「ナギイイツ！」

「リディアッ！待ってる、今助ける！」

ダンを構えて、一直線に向かってくる凧を見ても桃色の髪の少女

メイアの表情は変わらない。

一瞥して、魔法の剣を凧に振り下ろす。ダンで受け止めるが、それは悪手だったと言えるだろう。

魔法で出来た赤い剣がダンに当たったとき、剣が爆発した。

凧は爆発の衝撃で吹き飛ばされる。

「……素人ね」

「ちつ、余計なお世話だ！」

体勢を整え再び突っ込んでいく凧に、尚も無表情で剣を作り出すメイア。

今度は顔面めがけて横薙ぎに振るわれた剣を、屈みこんで避ける。そのまま腹に蹴りをいれようとするが、二本目の剣が視界に入ったので慌てて下がって回避する。

一秒前までいた場所が爆発する。

「あつぶねえ〜！死ぬかと思った！」

「……………殺す気でやるのは当たり前」

「まさかクールに返されるたあな！だが、さっさとケリつけようぜ！」

「そうね。私たちの任務を終わらせる……………」

そう言つて、剣を構えリディアの方を向くメイア。

その意味を理解した凧が、メイアへと最高速度で走り出す。

凧から見て、メイアは背中を向けていたので気付くことは出来なかった。

メイアの顔に笑みが浮かんでいたなど。

真正面から見ていたリディアが、悲鳴を上げるように叫ぶ。

「ナギツ、駄目ええっ!!」

「もう遅いわ」

振り向きざまに放たれたメイアの一撃は、尻に直撃し 激しい爆発を引き起こした。

煙に包まれて見えないが、確実に致命傷を与えただろうと確信したメイア。

これは油断や慢心ではなく、十六という年の中でおよそ八割を戦いに費やしてきた彼女の経験からくる確信だった。

メイアは涙を流すリディアに向き直り、爆発する赤い剣を作り出し掲げる。

「もう言い残すことは無い?.....無いわね」

「うつく、ナギ.....ナギイ」

「さよなら」

言葉と同時に振り下ろした剣は、刹那の間に飛び込んできた純白と激突し爆発した。

あまりにも至近距離で発生した爆発に、堪らずメイアも後ろに吹き飛ばされる。

「何？……どういうこと？」

「はあはあ、はっ。……俺はまだ生きてるってのに、ゲホッ。む、無視してもらっちゃ困るぜ、げホッ。……リディア、だい、大丈夫か？」

そう言っただけ強がる風は、どこからどう見ても満身創痍だった。

剣が直撃した腹は血で真っ赤に染まり、頭や口から血がどんどん流れていく。

おまけに目の焦点が合っていないのか体はフラフラしており、芯が定まっていない。

それでも風は、決して倒れずメイアの前に立ち塞がる。

「うん、私は大丈夫。……でもナギが」

「俺あ大丈夫だよ。こんくらいのピンチ、切り抜けてきたじゃねえか」

「……茶番はこれくらいで良い？」

心底うんざりしたというような表情のメイアが問う。  
凧はメイアを強烈に睨みつけながら返す。

「来いよ。ただし、来るのなら命を懸けるよ。生半可な気持ちで突  
破しようなんて考えんじゃねえぞ」

「なっ」

メイアは、凧のその威圧感に圧倒された。

誰が見ても瀕死。誰が見ても満身創痍。誰が見てもただの雑魚。

なのに、違う。この男は、そこらへんにいてる雑魚じゃない。

本当に命を懸けないと、突破………出来ない。

メイアは無意識のうちに、後退おとすっていた。

かつて感じたこともあった感情を抱き、唇を噛む。

初めて戦いの場に立った時に感じた感情　　恐怖を抱いた。

瀕死でありながら、強烈な威圧感を放つ凧という存在に恐怖した。

メイアは凧に隙を見出せず、活路も見えず、ただ時間だけが流れた。

ふと魔力を感じ、メイアは後ろに跳ぶ。

メイアが立っていた場所に、ほぼ透明の剣が数本突き刺さる。

魔力を感じた方向に目を向けると、そこにはライルが立っていた。

「二対一、いやミス・リディアも入れると三対一だけど。まだ続けるかい？」

「王女はどうでもいいが、お前もそれなりの使い手。……  
ここは退く。けど次は無い」

そう言い残し、去っていくメイア。

気配が無くなったのを確認してから、凧は意識を手放した。  
完全に意識が無くなる直前、リディアの声が聞こえた気がした。

十一話『強襲、救世の使徒』（後書き）

凧はどうなるんでしょうね？

皆様の予想通りなんですがね。

ではでは、次回まで御機嫌よう！！

## 十二話『決着』（前書き）

投稿遅れてすいません。ゲームに浮気してました。  
今回はいつもより長い、というか最長なので勘弁してください。

## 十二話『決着』

アルダイタンス伯爵家別荘、凧に宛がわれた部屋

体中に包帯を巻かれベッドに寝かされている凧を、リディアとライルが心配そうに見つめ、アインスは悔しそうな表情で齒噛みしている。

先ほど凧が倒れた時すぐに治療を開始したのだが、あれほどの威圧感を放っていたことが奇跡のような状態だった。

まず頭は出血していただだけで大したことはなかったのだが、問題は腹だ。

出血量は尋常ではなかったし、何より肋骨が十本近くいかれていた上に内臓にもダメージがいつていたので、その場にリディアが居ないと手遅れであったかもしれないのだ。

凧の意識は未だ戻らない。しかしそれも受けたダメージを考えれば当然だろう。

リディアは己の無力さを恨んだ。

何で私はこんなに弱いのか？何でもっと強くなろうとしなかったのか？今日みたいに関人の時を狙われることもあるかもしれないのに、いつでもどこでも凧は来てくれる。それに甘えただけなのに、甘えてただけだって言うのにッ！

自らの感情の奔流に、リディアは耐え切れず思いを零す。

「強くなりたい。……一人でも戦えるくらい。味方が来るまで持ち堪えられるくらい。凧に頼りつきりにならないくらい！私は強くなりたいッ！！」

「……今まで戦いを知らなかった嬢ちゃんが、そのレベルまで到達するのは並大抵のことじゃねえぞ？」

アインスの問いにリディアは力強く頷く。

今まで戦いに度に怯えていた少女はそこには居なかった。

弱い存在だが、尚も立ち上がり強く在ろうとする『真の強さ』を手に入れた勇者<sup>リディア</sup>が居た。

そんな彼女を、眩しいものでも見るかのようにして目を眇めて見つめるアインス。

彼は自分が関わった少年少女達が、雄雄しく気高く成長していくのを嬉しく思っていた。

ふっ、大した奴らだな。この年でこんなに立派になりやがって。

親離れしていく子を見るってのはこんなもんなのかね？

「覚悟は出来てるみてえだな、なら良い。これからもう一回連中が来たときの配置を決める。作戦なんぞは特になしだ。全力でやりやあ、んなもん関係なくなるからな」

「分かったよアインス。……僕とミス・リディアは、ここで凧を見てればいいかい？」

「ミスは要らないよ、ライル君。ファーストネームでいいから」

「分かったよりディア」

「その方針で良いな。まあ一人はさつき散々煽ってやったから、確実に俺を狙ってくんだろ」

「あなたは本当に、人を怒らせるのが得意だね」

「それも戦法だ。護衛対象が多いなら、気を引かせておいて損は無えだろ。話を聞く限りじゃあ、もう一人のお嬢ちゃんをビビらせたんだろ」

そうやって凧に視線をやるアインス。

先ほど凧は、メイアに久しく感じさせなかった恐怖を感じさせた。となれば、彼女は凧を狙って動くだろう。

凧が死力を尽くして得た結果は、充実した迎撃体制だった。これにより効率的で、効果的な待ち伏せを行えるのだ。

三人が動く。

救世かれらの使徒へのリベンジが始まる。

伯爵家の別荘から離れたところにある森の開けた場所で、メイアと

ユリウスの二人は魔力を回復させていた。  
ユリウスは木にもたれかかりリラックスしているが、メイアは眉間に皺を寄せ不機嫌だということを隠そうともしていない。  
茶化すようにユリウスが話しかける。

「おい、メイア？どうしたんだ、不貞腐れちまってよ。．．．．．  
もしかして、追い払われたのを根に持ってんの？」

「．．．．．うるさい」

ギロツという擬音が聞こえそうなほどに鋭く睨みつけるメイア。  
おほー怖いよ怖いよーと余裕たつぷりなユリウス。  
彼が居ないと自分に屈辱を味あわせたあの男<sup>ナギ</sup>を叩きのめすことが出来ないので我慢する。

一人で突破出来るなら、こんなふざけた奴なんか潰すのに。  
それもこれも全部あの男のせいだ。あいつが居るから、私はこんな屈辱を感じているんだ！  
あいつが、あいつが。あいつがっ！

歯が砕けそうなほど強く歯軋りするメイア。  
その心の中には、強烈でドス黒い感情が渦巻いていた。  
そんなメイアを愉快そうに眺めながら、ユリウスが声を掛ける。

「メイア〜。魔力溜まるまであとどんくらいよ?」

「最低でも一時間は掛かる。……………戦術でも練ってれば?」

「うん、そうだな。閣下も仰っていた通り、あの男は厄介だったかな。この『灼熱の志士』が完膚なきまでに叩きのめしてやるうかね。お前さんも『寡黙なる巨砲』なんて大層な二つ名を貰ってんだから、奴らを任務達成のために頑張れよ」

「……………」

激闘が再開される。彼らもリベンジに燃えていた。幾ばくの時を経て、二人は別荘を再び襲撃する。

空が赤みを帯び始めた時刻。彼らがやってきた。正面玄関から、激しい爆発音が聞こえた。

「来たか。……………ライル、ここは任せませ」

「任せてくれ。僕も強くなったからね。一筋縄ではやられないさ」

「んじゃ、行ってくらあ!」

扉を勢い良く開け、駆け出していくアインス。  
彼の戦いは、熱く燃える火のような激しい戦いとなる。

正面玄関のエントランスは、先ほどの爆発で調度品や床に敷き詰められていたタイルが吹き飛んでいた。  
爆発の名残が残っているのか、黒い煙が辺りに漂っている。

「まだ来ないのか、奴は？・・・っ！」

目標としている人物が来ないことに、ユリウスが苛々した様子で呟く。  
しかし直後にその場から飛び退く。  
二階から放たれた一筋の赤い光が、ユリウスの居た場所に突き刺さる。

ユリウスが目を向けると、そこには不遜な表情のアインスが居た。

「ほーう。あれを避けるたあ、やっばお前<sup>つえ</sup>って強えわ」

「貴様！……ふん、あの程度の攻撃を回避するなぞ、たわいも無いことだ」

「まああれくらい避けられなきゃ、刺客として送られる訳ねえわな」

「ふん、その強がりがいっつまで持つかな？」

「お前を倒すまでに決まってるんだろ」

「良く言った！それでこそ、このユリウスが倒すに相応しい！」

そう言つて、ユリウスは影から剣を取り出す。

何の変哲も無い銀色の剣。だが、剣身に刻まれた赤い文字が普通の剣ではないことを如実に示している。

対するアインスマ火の聖霊王から授けられた剣を影から取り出す。その剣を見て、ユリウスが驚愕の声を上げる。

「馬鹿な！『ヴェステイク火の聖霊剣』だと！」

「そついやそんな名前だったな、こいつ。でもお前の剣も精霊から貰ったんだろ？」

「一精霊と、聖霊王を比べるなっ！……いやそうか。何の問題も無いな。ここで貴様を打倒し、ヴェステイクを手に入れれば、もはや何も問題も無い！」

「へっ、分かりやすいなお前。だが、分かりやすいってのは良いことだけどなあ！」

アインスが二階からユリウス目掛けて、高く飛び上がる。

ユリウスはこれを好機と見たのか、先ほどアインスが放った火属性ヒート・エレメンタル最高速魔法の『火の閃光』を放つ。

だがその攻撃を見抜いていたアインスは、ほぼ同時に『火の閃光』を放った。

互いに直撃した魔法は、熱量を伴った衝撃波を撒き散らした。

二人はその衝撃波に吹き飛ばされる。

ユリウスは受身を取り、アインスは空中で体勢を整え着地する。

必殺のつもりで放ったのだろうか、ユリウスは今の一撃で仕留められなかったことに歯噛みする。

271

「くそっ！」

「どおした？もしかして、今の一撃で仕留めるつもりだったのか？」

「ぐっ。……今の一撃は小手調べだ。それに、あの程度でくたばってもらってもつまらんだろう？だから、この展開は望むところというものさ」

「はん、強がんなよ！」

アインスは剣を腰溜めにして突っ込む。ユリウスは上段に構えて突っ込んでいく。

二人が互いに間合いに入った瞬間、赤と銀の輝きが閃いた。

剣と剣がぶつかり合う。鏢迫り合いには持ち込まず、弾きあう。その場で一手、二手三手と高速で剣戟を繰り返す。

アインスは大柄だが、ユリウスは細身だ。

力押しでどちらが不利かは明白で、一度ユリウスは後ろに跳ぶ。そのチャンスを、アインスは見逃さない。

「もらった！・・・ファイア・ランス『炎の槍』ッ！」

体勢が整いきっていないユリウスの周りに、数本の炎の槍が現れる。反応もさせずに倒すため、展開から一秒経たずに発射される。だがユリウスの顔に焦りはなく、笑みが浮かんでいる。

「ふん。この程度の炎で、俺の『ヴォルフ』を突破出来ると思っているのか？」

ユリウスに向かっていた槍は、彼が持っている剣に吸い込まれていた。

槍を吸い込んだ剣は、赤みを帯び始めた。  
その光景にアインスは息を呑んだ。

「それがお前の『保有能力』か？・・・いや、違うか。その『ヴォルフ』とやら、か？」

「その通りさ。この剣、ヴォルフは火属性のものを吸い込むことが出来るのさ。例えばネが割れたとしても、何の支障もない。どう立ち向かう？」

「簡単だろ、んなもん。剣でぶちのめしやいいだけだろ？」

「俺に剣で挑むとはな。既に俺は貴様の攻略法を見出しているぞっ  
！！」

ユリウスは咆哮とともに、アインスに肉薄する。  
その速さは普通に走るよりも、数倍ほど速い。

くっそコイツ。『クイック・ムーブ』持ちかよ。

だが、俺だって出来んだよっ！

高速で接近するユリウスに、同じく高速で立ち向かうアインス。  
予想外の反応に、僅かにユリウスの動きが鈍くなる。

「!?!?…まさか貴様も『高速歩法』持ちだったか。だが、それだけではな!」

「舐めんなよ。こちとらテメエよりも、馬鹿みてえに速い奴と戦ってた。その程度の速さじゃあ、全く何の自慢にもなんねえぜ」

「ほざけ、一教師風情が!」

「言ったな?教師を舐めてると、痛い目にあうぜ!」

両者共に『高速歩法』を発動しながら、剣戟を交わす。加速により威力が増したので、剣と剣が絡み合うことに火花が散る。だが互いに勝敗を分ける決定打を叩き込めずにいた。

こいつ、デケエ口叩くだけあるな。

認めるのは癪だが、この男は俺と渡り合うほどに出来る。

図らずも同じタイミングで同じ事を考える二人。目線を合わし動き出すのもまた、同時であった。

アインズが出て行った後の風の部屋

sideライル

「ねえライル君。ナギ、いつになったら起きるのかな？」

「僕にも分からないな。でも、下手な気休めを言うよりかは、現実を直視した方がまだマシさ」

「………何で？」

「期待するよりは、自然と起きると考えた方が気が持つからね。リディア、君の待ち方だと彼が起きたとき疲れていると思うよ？」

彼女は献身的だが、それで体調が芳しくないというのならナギが起きたときに、彼はあまり喜ばないと思うからね。

自分の為にリディアに苦勞をかけた、と。そんな風に受け取ってしまっただろうね。

それは彼の望むところではない。だったら、彼の理解者たるこの僕が釘を打っておこうか。

「それでも、私は良いもん。ナギがこんな大怪我をしたのは私の責任だから……」

「やれやれ、ナギはそんなこと考えてないよ。彼はそんな押し付けをするような人間だったかな？」

「ち、違うよ！ナギはそんな人じゃ、あ……」

「ほらね。ナギならきつと、俺がやりたいからやったただけだ、とか言うだろうね」

「私、ナギのことをまだ理解出来てなかったんだ。・・・ライル君、教えてくれてありがとう」

「いやいや、どういたしまして」

全く、こういうのは彼女の護衛たる君の役割だろ、ナギ？  
僕に押し付けやがって。起きたら『風剣』の的にしてやる。  
・・・？

部屋の外から感じるこの魔力は、確か・・・。。。

「そこから離れるんだ、リディア！」

「え？」

くそ、展開出来るか？いや、やらなければならないんだ！  
間に合ってくれよ！

「・・・『バースト・シールド暴風の盾』ッ！！」

展開と同時に、さっき聞きなれた爆発音が響く。  
『暴風の盾』が揺らいだけど、防げたようだ。

「……………強い盾。やはり見過ごせない」

「褒められたよ、嬉しいね」

「喜んでる場合じゃないよ、ライル君!？」

「強敵との戦いにおいて、余裕を持ってない奴は真っ先に死ぬ。アイ  
ンスが言ってた」

「それは楽観論。戦場では気を抜いた者から死んでいく」

「リディア、離れていてくれ。護衛対象の君が前に出っていたら駄目  
だからな!」

「うん、分かった」

さて、戦闘に不向きな彼女が前に居ると危なっかしいからね。  
それはさておき、どうやら彼女は随分とシビアな世界を生きてきた  
ようだね。

現実的な考え方は、アインスのそれと似ているよ。

爆発というものは直撃させれば、ほぼ確実に致命傷を与えられる。彼女は女性らしく小柄だから武器を使った近接戦はせずに、爆発する魔法の剣を使って生来の器用さを活かして人体の急所を狙う戦法を執るのだろう。

だからこそ基本的に接近戦で狙ってくる箇所を、彼女が今まさに振るっている剣の軌道を読みやすいのさ！

「さらに自分も人体の構造を把握していれば、軌道を読むのも難くはない！」

「・・・経験もあるのね」

「なに、君には及ばないさ」

軽口を叩きながらも、頭の中はフル稼働中さ。

しかし頭の中の思考と、実際の動きの合致はとても難しいね。

なにせ彼女の剣を振る速度が速い。

以前ナギに全力でダンを振ってくれと頼んだことがあったのだが、

その時の速度と何ら遜色のないほどの速さだ。

まさしく桁違いというに相応しい存在だね、彼女は。

超人的な人間性能のナギと互角の速さなんて、夢であってほしいが生憎と現実だからね。

そういえばアインスが基本的に強い奴は『高速歩法』という『保有能力』を持っていると言っていたが、恐らく彼女も持っているんだろう。

それなら、まだ納得もいくというものだね。

「……しぶとい。いい加減に逝きなさい」

「ッ!？」

逝きなさいと言いなながらも、何故床に爆発の剣を叩きつけたんだ？  
お陰で距離を取れたけども。  
しかし距離を取ったのは向こうも同じだったみたいで。

「吹きすさべ荒れ狂う突風、弾き飛ばすは勇者の兜、頭蓋をも揺さぶれ」

マズイ！あれは大魔法だ！

大魔法以上は詠唱が必要とアインスが教えてくれたが、まさかこんなところで役に立つとはね！

もう他の速い魔法も間に合わない！？  
だったら。

「これで、なんとか威力をつ。」  
『ウインドーラ・ブレスト風槌の打弾』！」

「無駄よ。『白夜の旋風』」

ウインド・エレメンタル  
よりもよって風属性の大魔法とは。  
だが威力は幾分減ったはず。  
これならまだなんとか。

「甘いことを考えているようなら訂正しておくけど・・・」

「・・・??」

「大魔法はたかが中級の中位魔法に邪魔されたくらいじゃあ、ビク  
ともしないわ」

「なっ」

そして凄まじい質量を伴った巨大な風が、襲い掛かる。

その蹂躪に、為す術も無く痛めつけられる。

リディアは、ナギは大丈夫だろうか？

彼女も防御の魔法は使えるだろうか、何とかなっただろう。

だがナギは？・・・彼は動くこともままならないはずだ。

方向は違うはずだが、あの規模だ。少し離れているくらいじゃあ直  
撃しているかもしれないな。

・・・蹂躪がやっとな終わったようだ。

彼女の名は知らないが、僕がまだ立っていることに驚いているだろ  
う。

敵とはいえ、そんな間抜けな顔を見るのは楽しいな。

「……………何故立っていられるの？」

「決まっているさ。……倒れていられない理由が、魂こゝろにあるからさ」

「何を言っているの？」

「誓ったからね、彼オレと。負けが決まった訳じゃないときは、必ず立っている」

「生憎だけど、もう負けよ。……これで、その誓いごと壊してあげる。……燃え上がれうごめく火炎、溶かし尽くすは光の石、闇をも抱け」

駄目だ、意識が持たない。

予想以上にあの『白夜の旋風』が効いていたみたいだ。

倒れ伏して見上げる彼女は、美しくもあるがとても強い存在でもあった。

彼女のように、強くなりたいものだ。

流血で視界が滲む。しかし、何故もつと意識が続いてくれないのか。

「さようなら、なかなか貴方は強かったわ。……『爆熱のほうよ

う  
「

「ただだぜ。『聖神の極光』！」

彼女から放たれた青く爆発のように広がった炎は、過去に二度見た  
白いオーロラに阻まれた。

彼女がひどく驚いた顔で何かを言っている。

「……全。意識がまだ続いたなら、彼女に一言くらいは物  
申したのに。」

でも、もう意識が途切れる。

まだ戦意はあるけども。

「後は頼んだよ。……ナギ」

「おう、任せろ」

素晴らしく頼もしい返事だよ、ナギ。

最後に見えたのは、それぞれの得物を構えて対峙する二人の姿だっ  
た。

side  
end  
ライル

## エントランス

二人の戦いは未だ続いていた。

剣戟を交わしていたかと思えば、離れて魔法を撃ち合う。だが決して堂々巡りではなく、お互いの体の所々に傷が出来ている。ここで体格の差で僅かにアインスが有利だ。

「ふっ、ふっ。このままだと、俺の方に流れが来るな?」

「調子に乗るな。この戦いを制するのは、『灼熱の志士』たる俺だ!」

「……随分とその二つ名に拘るな」

「当然だ。これは我が閣下から受け賜たまわったものなのだからな!」

「……かなり心酔してるようだが、その閣下とやらはそれほどの人物なのか?」

ユリウスは、よくぞ聞いてくれたと言わんばかりに話し始める。

「そう、あのお方は素晴らしい。そこらへんにいる政治とはこうだ、統治とはこうだと実際には行動に移さなくせに偉そうにしている愚かな貴族連中と、それに付き従いおこぼれに預かるうとする愚民共をまとめて肅清しようとする行動に移されているのだ！」

「じゃあ最近町でよく聞く各国の貴族の変死体っていうのは・・・」

「その通り、我々が連中を始末しているのだ！あのような世界のゴミである存在は、このアンスタインには存在してはならない。だが、悲しいかな。我々には憎むことは出来ても、公的に抹殺することなど出来ない。よしんば出来たとしても、また別の屑が現れるだろう。それでは本末転倒だ。」

だから我々は外道に堕ちた。何度も這い戻ってくる蛆虫のような連中に、必殺にして必滅の裁きを下せるように、敢えて修羅となったのだ！」

大袈裟とも言えるほどに大仰な身振りで話し続けるユリウス。しかしアインスはその様子を不審げに眺めていた。

こいつ、そんなにばいばいと組織の方針みてえなこと言う奴だったかな。

取り敢えず黙ってたけど、何か急に変わったな。・・・変わったよな？

ユリウスは、そんなアインスの様子には気付かず話を締めくくる。

「だからまずは足がかりとして、王女様には死んでもらう。我々救世の使徒が、このレッサーの王族を始末したとなれば、このグライデアに激震が走るだろう！その任を邪魔する貴様は、今この場で始末してくれる！」

「早い話が、俺を殺してやるって事か？」

「そうだ」

「なら、俺だつて簡単にはやらねえよ。確認しなきゃなんねえことがまだまだ有るからな」

決意の色が強く浮かんでいるアインスの顔を見て、ユリウスも表情を引き締める。

再び激しい戦いが始まろうとしたとき

轟音と共に、別荘が揺れた。

「メイアか！」

「ちっ、ライル！？」

ユリウスはすぐにその正体に気付いたが、アインスは知らないためつい顔を音の方向に向けてしまった。

それは、強者であるユリウスからすれば大きな隙になる。

「戦闘中に目を逸らすとは、愚かなことを」

「！しまっ」

強烈な一撃により、ドゴオン！と激しい音と共にアインスは吹き飛ばされた。

崩れかかっていたエントランスの壁を突き抜けて、外まで転がっていく。

そこでユリウスは止まらない。

一対一では、相手の死体を確認しなければ終わつたとは言えない。故に、止めの一撃を放つためにユリウスは切り札を使う。

「燃え上がれうごめく火炎、溶かし尽くすは光の石、闇をも抱け」  
爆熱のほうよう『！』

ユリウスから放たれた黄に近い青の炎が、アインスの吹き飛んでいった場所に着弾し爆ぜる。

最後までじつと見ていたが何の反応も無く、確実に直撃した。アインスの死体を確認する前に、押さえきれずに笑いがこみ上げてきた。

「ふふふ、はは、ははは。アーハツハツハツハ！！ざまあねえぜ、あのクソ教師！なあにが簡単にはやられねえだ。こんな簡単に、影も形も無く燃え尽きちまつたつてのによお！ハ！ハツハツハ！！」

良く出来た喜劇でも見たかのように、笑いが止まらないユリウス。アインスを馬鹿にし、そしてまた笑うということを二、三回繰り返すユリウスだったのだが突如としてその顔が凍りついた。そして黒煙の奥から、

「この程度で終わりか？」

という声が聞こえた。驚愕するユリウス。あまりの事態に声が震えそうになるが、構わずに言葉にする。

「ばっ、馬鹿な！何故だ、何故生きている！『爆熱のほうよう』は確実に貴様を葬ったはずだぞ！」

「おいおい、その決め付けはいけねえなあ？何で俺が死ぬのが確実なんだ？戦場ではな、予想外のことなんざな、掃いて捨てる程もあるんだよっ！！」

アインスから莫大な量の火のエレメンタル体が噴き出す。  
再びユリウスの表情が驚愕に染まる。

まさか、これで凌いだのか？！

いや有り得ん。あの時確かに俺はあの男に直撃したのを確認した！  
ならば何故……！

困惑した様子のユリウスに、アインスは気軽な調子でネタばらしをする。

「なあよ、俺が持つてるコイツはよ、何なんだ？」

「……火の聖霊剣『ヴェステイク』ではな……、まさか。まさか、まさかまさかまさかッ……！」

「気付いたか。その通りだよ。こいつは火の聖霊王から貰ったもん  
だ。だったらその眷属の火の精霊が与えた剣の能力なんぞ簡単にコ  
ピー出来るって訳だ。まっ、流石に大魔法は吸い込みきれなかつた  
がな」

「な、んだその能力は！汚いぞ！」

「ああん？お前は馬鹿か。命を懸けた勝負に汚いもクソもあるかつ  
つこの」

「うぐぐ。・・・だが直接斬りつけば！」

「俺がおねんねしてる間、なんにも対策してねえと思うか？」

「何だと!？」

宣言して、『ヴェステイク』を構えるアインス。

何のつもりかと訝しむユリウス。

答えはすぐに示された。

「『火の閃光』」

「はっ、そんなもの容易く回避してくれるわ！」

「これで終わると思うなよ?・・・『火の閃光』」

「何だとツ!？」

『ヴェステイク』の剣先から二本目の閃光が迸る。

慌てて避けるが、左腕を掠めていった。

熱さと痛みが同時に襲ってきたため、否がおうにも顔が歪む。

何故詠唱もなしに魔法が撃てるのだと考えるが、すぐに答えに辿り着いた。

「……『スヘル・コール詠唱保存』だと！」

「やっぱり知ってんのな。なかなかマイナーな技能なんだがな」

「……なんと厄介な」

『詠唱保存』。魔法を発動させるためにはルーンや詠唱をすることが必要不可欠だ。

だがこの技能は最終工程である発動させる魔法の名称を口頭で発する一段階前で留めておき、他の魔法の詠唱を可能とする高等技能。しかしこれにはデメリットもある。

待機状態の魔法の分も魔力を消費していくのだ。

つまりかなりの魔力量があるか、何らかの抜け道的な方法でもない限りはおいそれとは使えないものでもある。

アインスは前者の方法でも十分いけるほどの魔力量はあるのだが、今回に限っては後者の方法を使った。

アインスが使った抜け道的な方法。それは　　。

「周りにやこんな火のエレメンタル体があんだから使わねえ道理はねえわな」

「くっ、だが俺にはヴォルフの火を吸収する能力が」

「お前よ、いつまでそんなに頼ってんだ？」

ユリウスの言葉を遮り、呆れた表情で『ヴェステイク』を構える  
アインス。

当然言葉を遮られたユリウスは、怒りに顔を赤く染めている。

「それがどうした。この能力チカラがある限り、俺を倒すことは叶わんぞ  
！」

「お前のそれ。速い魔法ヤッと威力の高い魔法ヤッは吸い込めねえんだろ？  
……速い魔法は吸収が間に合わず、威力がデケエのは単に吸  
い込みきれない」

「ツツツ!!」

アインスの言葉に驚愕を隠せないユリウス。  
彼の言葉は、紛れも無い真実であった。

「そつ、それが分かったからといって、何になると言うのだ!」

「つうかお前よ。俺がどんだけ残してると思ってた?」

「……精々一、二発だろう」

「過小評価もいいところだぜ、それ？・・・答えはな」

そこで一旦言葉を区切り、『ヴェステイク』を頭上に掲げる。

ユリウスは魔法の詠唱を始めるが、時すでに遅し。

アインスの周りにはどんどんと火の球体が現れる。

一個や二個ではない。

十個、二十個を超えて四十個ほどまで増えた。

ユリウスは顔面蒼白となっている。

そしてアインスは、

「ええと、分かんね。・・・まあだいたい四十だ。・・・行

け、『火の閃光』！」

「ば、馬鹿なああああああつ！！」

ユリウス目掛けて、剣を振り下ろした。

同時に赤く輝く矢が飛んでいく。

急所は外すが、確実に戦闘不能へと追い込む数十の矢。

その矢が消えた時には、意識を失い倒れたユリウスがいた。

それをその場に立ったまま数分ほど見続けていたアインスだったが、やがて疲れたように座り込んだ。

仰向けに倒れこみ、止めを刺さなかった男に目をやる。

そして楽しそうに笑った。

「こんな簡単に殺せる奴を生かしておくなんか、んつとにあのバカに感化されちまったようだな」

そんな非難するような言葉とは裏腹に、彼の顔には未だ楽しげな笑みが浮かんでいた。

凧の部屋であった場所

凧とメイアがお互い構えた姿勢のまま、向かい合っている。先に口を開いたのは、メイアであった。

「謎ね。・・・どうしてあれだけの傷を負って、こんな早く意識を取り戻せたのかしら」

「俺のチカラの恩恵さ」

「そう」

興味がなさそうに返し、手に爆発する剣を携えて駆け出すメイア。風は真つ向から向かっていく。

突きを出す一瞬前に『高速歩法』を使い加速するメイア。

『加速』により、メイアとすれ違いながら回避する風。

その時同時に彼女の首筋に手刀を叩き込むことも忘れない。

その予想外の箇所への攻撃に、僅かに動きが鈍るメイア。

その隙を風は見逃さない。

『加速』により更に速度を上げ、回し蹴りをいれようとする風。

しかしメイアは二人の間の床に剣を叩きつけて爆発させ、大幅に距離を取る。

「何で。何で？・・・何でこんなにも動きが違つのか？」

「俺は物覚えが良いんでね」

「ふざけないで！」

風としてはまともに行ったつもりだったのだが、メイアからしたらふざけてるように聞こえたのだろう。

とはいえ戦場で馬鹿正直に能力を教えてくれる間抜けはそうはいないだろうが。

凧の物言いに激昂したメイアは、限界まで早く詠唱を始める。しかし先ほどの光景を見ていた凧は、彼女の詠唱を止めるための一手を打つ。ダンに極々微量の魔力を籠めて放つ。半透明の白い弾丸が、詠唱のために足が止まったメイアに襲い掛かる。

「あぐつ!?!」

「……少ししか籠めてないのに何であんな馬鹿威力なんだよ」

凧が放った白い弾丸はメイアを軽々と吹き飛ばした。

彼女は受身を取れず、床を数メートルほども転がっていく。

だがかなりの量を溜めれば大型魔獣すら簡単に消滅させる凧の『聖神の極光』の超劣化版というようなもので、この威力はなんら不思議ではないだろう。

それはさておき。

ぼやきながらも足を止めない凧。

素早く起き上がるうとしたメイアの喉元にダンの切っ先を向ける。

「こいつで終わりだな」

「……………早く殺せ」

「悪いがそうもいかねえな。こちらそっちら救世の使徒の情報が著しく足りてねえんだからよ、こういう時に少しでも情報源を増やしたいんだよ」

「……そんなのは知らない。私は絶対に喋らない。死んでも話したりはしない」

強い意志を込めた眼でまっすぐに凧を見据えるメイア。  
やっぱ一筋縄じゃあいかねえよなと困り顔になる凧。

何とかして情報を引き出したいけど、宮殿まで何にもさせずに連れて行くななんて無理だしな。  
ここでなんとかしかねえと。

とりあえずまずは対話が重要だよなと考えた凧はダンを構えたままメイアと向き合う。

「なあ一つ聞いてえんだけどさ」

「何？」

「何でお前はそこまで救世の使徒に拘るんだ？」

「別に私はあの連中には拘っていない」

「え？・・・じゃあ何で従ってるんだ？」

「私が従っているのは、閣下ただ一人」

凧は内心、これはまだいけるのか？とたたみかけるチャンスを探う。そんな凧の心情には気付かず、淡々と話し続けるメイア。

「私があの人に会ったのは、だいたい三年前」

「割と前だな」

「そう、あの組織が出来たのは四年くらい前だから私は古参の部類・・・あの人は戦場で返り血を浴びて赤く染まった私を見て綺麗と言ってくれた」

「は？何だよそれ、おかしいぞ！」

「私は何がおかしいかは分からない。けど、戦うことしか出来なかった私を見て、綺麗だと言ってくれた。そして自分と一緒に来ないかとも言ってくれた。・・・それは戦うことしか出来ない私を認めってくれたってことだった。・・・だから私はあの人に従う。あの方は私の世界を変えてくれ」

「ふざっけんなッ！！あの方は戦うことしか出来ないテメエを綺麗と言って認めたであ！？違うだろうが！・・・お前、よく考えろよ。」

戦ってる人間を綺麗と言う奴が、まともな考え方をしてる訳ねえだろうが!!」

「!・・・あの人への侮辱は許さない・・・!」

「侮辱は許さない?・・・そんなことを言ってる時点で、テメエは洗脳されてんだよ!よく考えろよ。世界を救うなんてお題目掲げるくせに、何で強い奴ばっか集めてんだよ!」

「!!!」

凧の言葉に、初めて心の底から驚いたという表情をするメイア。

そして凧はこの戦うことしか知らない少女と話しているうちに、彼女が本当は何を欲していたか、何を望んでいたのかを何となく理解し始めていた。

だから凧はこの流れを崩さない。

本当のことを言っただけだから。

「お前、本当は綺麗と言ってもらったとか、認めてもらったとかそういうのはどうでも良いんだろ?」

「・・・違う」

「ただ戦うしか出来なかったテメエが見てた世界と違う世界を見せられるんだっつたら、どこの誰である

うとも良かったはずだ」

「違う」

「そしてその誰かが、たまたまテメエの言うあの人だっただけじゃねえのか？」

「違う！」

「ただ戦うことしか出来なかったテメエは、誰かの温もりが欲しかっただけなんじゃねえのか！」

「ッ！！」

凧の言葉を、必死で耳に入れまいとしていた少女の動きが止まる。かつて望んだことを、かつて欲しがったものを、かつて何よりも必要としていたものを目の前の少年は寸分変わらずに言い当てたのだ。少女の顔が歪む。

今まで決して見まいとしていた心の奥の奥に存在する望みが願望が、何よりも欲しかった戦い<sup>あの</sup>続けた日々そのまま、磨耗せずに今この瞬間に蘇ったのだ。

その忘れていた激情がメイアの胸を絞めつける。

あまりにも強いその感情は、子供の頃とつくに涸らしつくしたと思っていた涙を溢れさせた。

凧は、ダンを手の届かない位置まで投げる。

メイアは、その意味不明な行動に目を見開く。

「何、してるの？」

「お前は人の温もりが欲しいんだろ？・・・なのに、あんなもんは要らないはずだ」

「相棒よ、そりゃあ酷いぜ？」

「良いだろ別に」

「まあ構わんがね、こついつのもさ」

「だろ？・・・で、だ。お前はどうしたいんだ？」

「え？」

「お前、本当は戦いたくねえんだろ？だったら、このままどっかに逃げろよ」

「・・・無理よ」

「いけるだろ？お前なら、さ」

「確かに技量はある。けど、数千人の構成員がいる彼らからは逃げ切れないわ」

「数千ツ！？」

初めて耳にしたその圧倒的物量に驚きを隠せない。

ちなみにレツサー王国の正規軍は陸海空合わせて、およそ二万だ。逃げようとしても逃げ切れないと自分で言っておきながら、彼女の表情に悲壮感などない。自信ありげに続けるメイア。

「でも、もう私は大丈夫。貴方から、とても大切なことを教わったから。だから、」

「いやそんな覚悟しなくてもいい」

「私は、つて……何故？」

「俺は今回バズーの討伐をすれば、騎士になれるって王様から言われてるんだ。……その権限を使えば、お前の待遇くらい何とかなるんじゃないか？」

「貴方、それ本気？」

「本気も本気だよ。それにお爺ちゃんから教わったんだ。目の前で泣いてる女の子を放っておくことはするんじゃない、つてさ」

「……ふふふ。何それ、馬鹿みたい」

「お、やっと笑ったな」

「あ……」

人前で笑ったのが、何年前も前なのだろうか。彼女はただそれだけで頬を赤く染める。  
それを見て凧は決意した。

この誰かと一緒に笑ったことの無いおバカを、誰かと一緒に笑えるようにしたい。絶対に。

そんなことが、そんな不条理があってはならないんだから。

その思いを言葉にする。

「お前が誰かの温もりを欲しいと言うなら、俺がお前に温もりを与える一人目になってやる。だから、もう安心しろ。お前は世界で一人なんかじゃない」

「……………あり、がとう」

一旦収まっただけの涙が再び溢れ出る。

今度の涙は、止まる気配を見せてはくれなかった。

## 十二話『決着』（後書き）

如何だったでしょうか。

今回は凧とメイアの方を頑張りました。  
てかこれ、メイアにフラグ立ってる？

いかん。これは凧とリディアの双方向のはず。いやいや三角関係も  
楽しそうですがね。

そういえばダンがすごく空気です。伝説の聖剣のはずなのに。  
どこそこのガンダくんの剣みたいですねw  
では次回まで御機嫌よう！

十三話『騎士叙任』（前書き）

今回は繋ぎみたいなもんです。

にしても伏線を張るのって楽しいです。

あれ、私だけですか？

### 十三話『騎士叙任』

アルダイタンス伯爵家別荘、リビング

いつもの四人と、もう一人がソファに座っている。片側にはアインスとライル。

もう一方には凧とリディア、そしてメイアがいた。アインスが重々しげに口を開く。

「で、お前はそのお嬢ちゃんを宮殿に連れて行くってか？」

「おう。こいつはもっと他の世界を見なきゃいけないんだ。だから連れて行く。俺から言えば、きつと王様だって理解してくれるはずだ」

「理解はしてくれるだろうが、納得はしてくれないと思うぜ？ なんとなくあの王様は筋金入りの親馬鹿だからな。娘を傷つけた不届き者には死刑、とか言うかもな？」

「だったら俺が助ける。メイアが死ぬくらいなら、騎士なんて位は要らない」

「・・・ナギ」

「ナギ、それってどういう事かな？」

ちなみにメイアは凧に自分のことは大体話し、他の全員にも自己紹介している。

もっともライルとリディアには警戒されたのだが。

その後で今後の彼女の扱いを決めていたのだ。

つか王様って親馬鹿だったのかー。そうかー、分かんなかったなー。それよりもさっきの言い方だとメイアに誤解されるような言い方だな。訂正するか？

いや男に二言はねえしな。ってかやつぱり騎士の位はリディアの護衛のためにも必要だしな。

って、何で俺はこんなことを考えてるんだ？何かおかしいぞ。

あーそう言えば、さっきからライルが妙な視線を送ってくるなー。いやいやそれよりもやばいのは「ナギ・・・そろそろこっち向こうか」。。。。。。。。。。。

その言葉に大人しく従った凧が見たものは

「何か言うことは？」

「さ、さあ？何が何やらさっぱりですなー？あ、あはは、は」

笑っているが目が笑っていない、修羅と化したリディアだった。

あ、あれー？おかしいな。俺、リディアを怒らすようなこと言ったかな？

鈍感の尻にそんなことが分かるはずもなく、素直に聞いてみることにした。

リディアではなく、メィアに。

「な、なあメィア。・・・俺さ、リディアを怒らすようなことって言った？」

「分からない」

「だよな！そ、そうだよな！」

リディアの視線も圧力が強まる。

ひっと悲鳴を上げながら、目を逸らす尻。

さらに怒りのボルテージが上がるリディア。

メィアはさりげなく横にずれて避難している。

リディアは尻の顔を両手で挟み、自分の方向に向かせる。

「ナギ、私、怒ってないよ？」

「で、では何故片言なんでしょうが、お嬢様？」

「うん、私ね怒ってないの。凄く怒ってるのよ、ナギ?」

「余計に質が悪い!?!」

「だからチャンスあげるわ」

「へ、チャンス?」

希望が見えたと言ふ風だが、その考えは即座に破壊される。リディアが言うチャンスによって。

「何故メイアちゃんを連れて行くのか、何故メイアちゃんを助けるのか、そして何故私の専属の騎士になるのが嫌なのか、簡潔に答え。あつ、百文字でね」

「は、はああ!?!そんなん言える訳が」

「無いの?」

「い、いえ。是非とも弁明させて下さい」

「どつぞ?」

余裕たっぷり首を傾げるリディアはとても可愛かったが、今では

その顔に浮かぶ笑みは悪魔の笑みに見える風。

風は全力で考える。

百文字とは短いようで長い。

たかが百文字されど百文字、ということである。

頭を抱えてうんうん唸っている風を見て、満足そうにしているリディア。

ふん！メイアちゃんに構ってばっかで！

もつと私のことも考えてよ。

そんな風に考えるリディアだが、それは決して口にはしない。

恥ずかしいには恥ずかしいのだが、言葉に出来ないほどではない。

口に出すのも大丈夫だが、当人の風に言ってしまうえばきつとあまりの羞恥に死んでしまおうと考えているのだ。今のリディアなら確実にそうなるだろう。

ほぼ毎日同じベッドに寝ておいて何を今更、と思うかもしれないがそれが乙女なのだ。

そんなことを考えているうちに、風が出来たと言いながら顔を上げた。

「よし、しっかりと数えとけよ」

「良いから早く」

「……………」。メイアは心が疲れていた時にあの連中に漬け込まれたからやりたくもないようなことをやってきたんだ。だからこいつの心を正しい物にするために一緒に連れて行くんだ。で騎士の位

云々は言葉のあやつていうやつなんだよ。………ぴったり百だろ？」

「句読点いれたでしょ？」

「別に句読点くらい良いじゃねえか。そんな細かいことまで気にするなんて、付き合いたての彼女かよ」

「な！ななな何を言ってるのかな、ナギは！？」

凧の発言にこれ以上ないだろうというほどに顔を赤くするリディア。しかし凧は全く気にも留めない。鈍感とは恐ろしいものである。

二人が漫才をしていると、横からメイアが会話に参加してきた。

「ナギ、そんなことまで考えてるの？」

「そんなことって？」

「私のためにわざわざ王様にかかけあつなの？」

「まあ、いんじゃないかね？……お前がきちんと更生するってんなら、俺も王様も異論はないと思うしな」

「………うん。私に新しい世界を見せてくれるなら、私は何

度だって生まれ変わる」

「じゃあ文句はねえぜ」

そう言つてニカツと笑う風。つられてメイアも笑う。  
こんな日常でよく見られることを、彼女は今まで経験したことがな  
かつたのだ。

しかし面白くないという表情をした人物もいる。  
リディアだ。

二人が笑い合っているのを人を殺せそうなくらい鋭い目で見ている。  
いや正しくは睨みつけている。

ナギったら、あんなに楽しそうに笑つて。

それにメイアちゃんのあの表情。絶対にライバルになる顔だ。  
うぐぐ、負けないんだから！

そしてリディアがとつた行動は風の腕に抱きつくというものだった。

「うわぁ！何してんのリディア!?!」

「べ、別に私が何したって……いいでしょ、もっ……」

「はい？今何て言ったの?」

「別に何だっでもいいじゃない!」

「いいけど、流石にこれは恥ずかしいつつうか、腕に当たってるつつうか」

「……わざとだもん」

それを聞いた凧の顔が赤くなるが、リディアの顔はもっと赤かった。そろそろ場の空気を変えるために、わざとらしくアインスが咳払いをして用件を語りだす。

「あー、イチャイチャするのに文句はねえがナギに聞きたいことがあるんだが」

「別にイチャイチャしてなんて」

「嫌なの？」

「えっ、嫌じゃ……ないけど」

二人がそのまま見つめあう。

そこで邪魔が入るのはもはや基本と言っても差し支えないだろう。アインスが再びわざとらしい咳払いで割り込む。

にやけながら。

「あー、あ、ゴホンゴホン！・・・えー、質問なんだが何で初対面のお前がそっちの嬢ちゃんの望みや事情なんて分かったんだ？」

「さあ？・・・俺にも分かんないんだけど、何となくメイアの心の叫びが聞こえた気がしたんだ」

「心の叫び・・・ねえ。そんな抽象的なこと言われてもな」

「でも実際そんな感覚だったんだよ。・・・それに他に表しようが無かったしな」

「まあいいか。・・・あん？お前、前髪に白髪二本くれえあるぞ」

「マジかよ。アインズ抜いて」

「・・・いいぞ」

頭を差し出す風を見て、ニヤリと笑うアインズ。

幸いなのかは分からないが、俯いている風からはその悪役のような笑みは見えていない。

風の頭をがっしと鷲掴みして、



「聖への神化が、だよ。……髪の毛が白く変色するのはその第一段階だ」

「はあ。何が何やら分からんが、これは偶然じゃないってことか？」

「そつだ。いずれ相棒は人智の枠外の存在になる」

「いや、そんなこと急に言われても、さっぱり分からんのだけど」

聖への、しんか・・・進化？人智の枠外の存在？何じゃそらと唐突に出てきた単語に頭を悩ませる風。

その後も様々なことを話し合っていたが、窓の外に迎えの馬車が来たので一行は馬車に乗り込み、宮殿へと向かっていく。

もちろん、新たな情報源たるユリウスを連行するのを忘れない。

アルダイタンスでの戦いは、再び彼らの勝利で終わった。

アンスタイン某国某所

「ええい！またしても失敗したというのか！」

憤慨し円卓に拳を叩きつける部下を見ながら、ダレイクスはまだ見ぬ敵に思いを馳せた。

あの二人を退けるか。神話に語り継がれる『聖なりし者』……  
やはり悔りがたき存在だな。

計画の修正が必要となってしまうたが、なに、これは然程大きな問題ではないな。

いずれ相見<sup>あいまみ</sup>える時が来たならば、この私が直々に動けば良い。

ふふふ、敵となる者は、大きければ大きいほどに戦いがいがあると  
いうものだな。

報告書に目を通したまま動かないダレイクスに、参謀と思しき緑色の  
ローブの男      リグルドが心配げに声をかける。

「閣下、いかがなされましたか？」

「む？いや、何でもない。……聞け、同士諸君よ。もはや  
敵は侮るに難い存在となった。……だが、このまま無闇に我らの  
強き同士を送るだけで良いのか？……いや、良くななどない  
だろう。故に私は計画の修正を行うことにした」

石造りの広間は、未だに静まり返っている。  
ダレイクスは続けて変更内容を告げる。

「当初は『セイント・パライ聖の神子』である彼女を狙っていた。そしてその後には覚醒する『ダーク・パライ闇の神子』たる彼女を、我々はこの手に収めるつもりであった。だが、それに痛手が伴ってしまう以上は先に彼女を奪取することにする。……リグルド、かの国にいる間諜からの報告書を集める。明日、再び会議を開く」

「畏まりました、閣下。まとめて提出致します」

「よし、では解散だ」

誰も居なくなつた石造りの広間で、ダレイクスは人知れず笑っていた。

ペテルギア宮殿、パトリックの執務室

レッサー王国国王パトリックの執務室は、荘厳な雰囲気満たされていた。

精霊に愛されている二人が主役となる騎士の叙任式。

それを祝福するかのように、精霊達が踊っている。

彼らの周りには赤、青、緑、黄と四つの属性の光が漂っている。

そして僅かに白の光も混ざっている。

それらが織り成す幻想的で美しい光景は、物語の一部分を切り取っ

たかのようにさえある。  
荘厳で美しい執務室の中で、叙任式は滞りなく進んでいく。

「……では略式ながら、貴殿をこのレスサー王国の騎士に叙任する。己が為すべきことが何なのかを忘れず、日々の精進に励むことを誓うか？」

「誓います」

「よろしい。ならば、貴殿に騎士の称号を授けよう。これからは『ウィダリエ騎士』・ナギ・ハツキと名乗るが良い」

「ありがとうございます……。( ) つつてもいつかは帰るんだし、貰っても意味ねえだろうな。帰るまでの身分証明と思えば、それで良いのか？」

今まで深く考えていなかった問題が急に頭をもたげてきた。  
いつ帰れるのだろうか、どうやって帰るのだろうか。  
そもそも元の世界へと帰れるのだろうか。  
思考が止まらない。こういう大事なことというのは、いざ考え始めると止まらないものだ。  
たとえ目の前に困り顔のパトリックがいたとしても。

「ナギ君、もう立っても良いのだが……」

「……………うえっ？あ、すみません。ぼーっとしてて……………」

「なら良いのだが。あと精霊からもいつもの口調にしてほしいとの声が届くから、その通りにしてやってくれ」

「ああ、なんか王様を前にしたらなんかちゃんとした言葉遣いにならないとってなるからさ」

朗らかに笑う凧を見て、パトリックは安心する。

やはり彼を選んで正解だった。

だが同時に不安にもなった。  
何故かと言えば。

いくら本当に改心したとはいえ、こつも簡単に敵を信じて宮殿に連れてくるのはいかなものか。

しかしそれすらも彼を素直な子だと見てしまうから困ったものだ。

アインズと話している凧を見て、パトリックは思う。

そして願わずにはいられなかった。

どうか、彼が幸せになる道を歩んでほしい、と。

そう、願わずにはいられなかった。

十三話『騎士叙任』（後書き）

今回出てきた『聖の神子』は誰か皆様お分かりですよね？

……『性の神子』。ジュルリ。

おや、今のはNGでお願いします。

## 十四話『シユライトへの招待状』（前書き）

お久しぶりです、クアンタです。  
遅くなってしまってますね。

出来れば今週中には、あと二話くらいは投稿したいです。

PS

お気に入り登録が50までできました！  
これからも拙作をよろしく願います！

## 十四話『シュライトへの招待状』

レッサー王国、ペテルギア宮殿パトリックの私室

「ふうむ、もうシュライトから終戦記念祭の招待状が届く時期になったのか。いや、老いれば時が経つのは早いものだな」

ソファに腰掛け、今朝届いたばかりの書簡を読むパトリック。

その内容とは、およそ数十年前に終結した戦乱の世をともに駆け抜けた親交の深い同盟国同士で祝宴を開くので参加して欲しいというものであった。

彼にとってこれは別段驚くようなことではない。

毎年開かれているこの祝宴は、いわばお互いの王族がどれほど成長しているかという見せ合いでもある。

それと同時にグライデア大陸の南東部は平和であることを証明するためでもある。

要約すると、『せっかく戦争終わったんだし、どんちゃん騒ごうぜ！』ということだ。

……これは流石に適当に訳しすぎだが。

思い返せばもう四十年来の付き合いだな。

そういえば最近は体調が芳しくないと聞いている。

まったくあやつは私を心配させることしかないからな。

そうだな。今度の終戦記念祭では、そのことも含めてたっぷ

り飲み明かすでしょう。  
なに、二国の王が揃って泥酔しているなど、平和の証だと言えるだろう。

遠い昔のことや一週間先まで迫った大きな祭りを見ているかのよう  
に、パトリックは目を細める。

彼が目を向けているのは、西の方角。

つまりは、シュライト大公国の方角だ。

レッサー王立魔法学院、中庭

相も変わらず、月末には授業が再開するというのがアルダイタンス  
領から帰ってきて二週間もの間ずっと、凧とライルは模擬戦を行っ  
てきた。

そのなかにメイアの姿も見える。

彼女はライルの才能に注目し、さらに磨き上げることにしたのだ。

おかげでライルは凧とも互角に渡り合えるようになった。

環境が整っているライルと、万全とはとても言えない環境の凧を比  
べること自体がおかしいと言ってしまえばそれまでなのだが。

魔力をほとんど使い果たしてしまったライルは中庭の芝生の上に寝  
転んだ。

そこから少し離れた場所に凧が座り込んでいる。

「はあ、はあ、お前……強くなりすぎだろ」

「何を言ってるんだい、君は？……あんなに連射してるのに、掠りもしないなんて」

「避けるのに、精一杯で……まともに攻撃に移れねえんだよ」

「……二人とも実戦における動き方は熟してきてるわ。でも……足りていないのは、経験」

「まあ、模擬戦はやってきたつつつても、実質戦闘経験なんて皆無だしな」

「僕もこんな激しい修行なんて、ついぞやったことはなかったからね……正直、今までの魔法の修練なんてお遊びに見えるくらいさ」

そのまま雑談に突入するかと思われたが、『ヴェステイク』を持ったアインスが中庭に姿を現した。

しかも当人であるアインスが妙にわくわくした様子で近づいてくる。これには流石に三人も眉を顰める。

「一体何なのだ？」と、言わんばかりに凝視している。

「なあアインス、どうしたんだ？変な顔してよ」

「……いや、今にして思えばダンとコイツが妙に似てるなーと思  
つてな？」

言われて、全員がダンと『ヴェステイク』を交互に見つめる。  
なるほど、確かに柄や鍔の意匠、剣身の形が似ている。  
他にも何か無いかと隅々まで目を光らせると、されるがままに黙っ  
ていたダンが口を開く。

「なあよ、お前さんら。そんなにジロジロ見んでも、柄尻の精霊文  
字見りや早えじゃねえの？」

「そんなもんがあつたんだな。……何じゃこりゃ？」

「なんか書いてんな？……読めねえけどな」

「……私に見せて」

「いいけど、読めんのか？」

「私は救世かれらの使徒の解析班の一人でもあつた。だからそれなりに解  
読も出来る」

説明もそこそこに、尻からダンを受け取って柄尻に書かれた四つの

絵のような文字を食い入るように見るメイア。

その姿は遺跡で発掘されたものを熱心に鑑定している考古学者のようであった。

しばらく見ていたメイアだが、やがて残念そうな顔でダンを尻に返す。

それが意味するのは解読出来なかったということだ。

「ナギ、悪いけど読めないわ・・・」

「そっか。別に読めても読めなくてもいいんだけどな」

「・・・普通の人間にゃあ読めなくて当然だぞ」

「どづいうことだよ」

「レア・オウン・アビリティ聖霊王から与えられた剣の精霊文字だったなら、まだ稀少保有能力の『インチラモツモ生きる運命の者』と共鳴反応を起こして解読できるんだよ。  
だがな、原初の二剣たる俺ともう一振りの方は、どちらかの『神子』か覚醒した原初の二神でなけりゃ読めねえようになってんだ。今の相棒は目覚める段階にすらなっちゃんない。大人しく諦めな」

「・・・何か役立たずって言われたみたいだな。つつかお前って実は凄い剣だったんだな」

今更感があふれるその言葉に、思わずダンが嘆息する。  
そんなダンに、アインスが声を弾ませて問いかける。

「なあ、じゃあ今『ヴェステイク』の全体が赤く光ってんのって、その『生きる運命の者』ってのが関係してんのか？」

「なんだとう！？」

ダンがアインスの方向に視線（？）をやると、確かに『ヴェステイク』の全体が赤く光っている。

予想だにしていなかったのか、すっかり黙り込んでしまったダン。一方で、当人のアインスも、現在の持ち主である凧もまったく事情が呑み込めずにお互いに、きよとんとした顔で見合うばかりだ。ちなみにメリアはそんな凧の顔を見て、ナギ可愛いと頬を赤くしていたりする。

そこへリディアが慌てた様子で走ってきた。その手には手紙を握っている。

「み、みみみ皆！大変だよ！何ていうか、すごく大変だよ！」

「リディア、一旦落ち着けよ……。ほら、吸ってー」

「す、すううう」

「吐いてー」

「はあああ」

「……………で、落ち着いたか？」

「うん。…………それで用件なんだけど」

「何なんだ？」

凧に促されて、深呼吸するリディア。

そのお陰で落ち着いたようで、中庭に駆け込んでまできた用件を話し出す。

長くなるので割愛するが要約すると、『終戦記念祭を開催するので、王族の方は必ず参加すること。護衛を連れてきても構わない』という内容であった。

第三王女であるリディアは参加しなければならないのだ。

そして、非公式ながらも彼女の護衛となった凧も必然的に参加しなければならぬ。

「……………はあ、めんどくせえ。俺もそれに参加しなければならぬねえの？」

「仕方ないんだよ、ナギ？…………私だって、本当なら無理にナギを連れて行く訳にはいかないと思ってるんだけど……………」

「え、いやいや、無理につて訳じゃないんだけど。・・・ほら、俺つて異世界出身だろ？そんな大舞台に出る機会なんてなかったしさ、その、緊張してんだよ」

「・・・じゃあ私からお父様にナギは、人の目に付くような場所で待つてもらおうように言っておくね」

「大丈夫だよ、リディア。護衛がいないと、お前が馬鹿にされるだろ？」

「んじゃあよ、臨時で俺達を護衛にしたらいいんじゃない？」

「・・・私？」

凧とリディアの微妙にかみ合っていない問答に業を煮やしたのか、アインスが自分とライルを指差しながら言う。

メリアが不満ありげに自分も付け足す。

三人の言葉に、リディアが感動したような面持ちで何回もうんうんと頷く。

リディアは、このことをお父様に報告してくるねと足早に去っていく。

例の三人はやれやれとでも言いたげに肩を竦める。

この数ヶ月凧で慣れたつもりだったのだろうが、やはり何の見返りもなく十割の善意で自分の力になってやるという申し出に慣れていなかったのだろう。

彼らは一週間後に迫った終戦記念祭に備えて、しばらくは休養をと

ることにした。

向かうはシユライト大公国。

そこは、神話に記された最後の決戦の地。

そこで二人の『神子』は出会う。

お互いに自身がどんな存在かも知らず。

平和を破る存在が、平和を祝う場であつ。

十五話『夏夜の祝宴』（前書き）

今回は短めです。

ですので、次回は長めにしたいと思います。

## 十五話『夏夜の祝宴』

シュライト大公国首都ガラ

太陽が中天をわずかに越えたあたりで、リディア一行はガラ城に到着した。

シュライト大公国はレッサー王国とほぼ変わらない歴史を持つ。かつて戦争が日常茶飯と云われていた時代で戦果を挙げ、大国へと発展したという歴史。そして同じ王家から分かれたという歴史。

現在では旧レッサー王国と呼ばれていた国は双子の王子によって崩壊した。

二人は王としての資質が類を見ないほどに素晴らしかった。

あまりの高さ故に次の王をどちらに据えるかで七日七晩議論した末に結論は出ず、王は病床に臥せてしまった。

そのまま王は死んでしまい、次の王はいなくなった。

国は国として機能せず、叛乱が起きた。

どちらの王子を国王にするのか。

そのまま三年が過ぎた。

三年という期間の間、彼らは各国に根回しして国を二つに割った。それが現在のレッサー王国と、シュライト大公国の始まりと云われている。

馬車の点検もそこそこに、リディア一行はガラ城に通された。

ガラ城は古い外観だが、雄々しく力強い印象を与えてくる。ペテルギア宮殿とはまた違った華美さも感じられるあたり、王城にかけられている金がどれほどのものかが分かる。

「はああ。やっぱり王城ってでかいなあ」

「それもそうだよ。そうじゃなかったら国のトップとしての面子が無くなっちゃうから」

「見栄って大事なんだな」

「ナギ、ちょっと身も蓋も無いことを言うんじゃないよ・・・」

アンスタインに来てから、凧は本当の意味で見るもの全てが新鮮という状態なので、キヨロキヨロしてしまうのも無理はないが凧は気付いていない。

他の招待客がそんな凧を、微笑ましいものを見るかのような生温かい視線で見ていることに。

アインスとメイアは気にしていないが、貴族であるライルと王族のリディアは世間体を気にしなければならないので、赤面している。幸いというべきなのか、凧はそんな視線に全く気付いてない。

結局、この後ガラ城の中に入るまで二人は羞恥心に襲われ続けるのだった。

シュライト大公国某所

紺色のローブに身を包んだ女　　ラーシャは、木で作った即席のテーブルに広げたシュライト大公国の地図を見ながら、周りにいる三人のローブを纏った人物たちに声をかける。

「・・・今回は私の能力を使った大規模襲撃をかけるんだが、あんたら得意じゃ無かったわよね？」

「まあ・・・わたっしは対人が基本だけど、そういうのもイケくはないかな？」

「小生も、右に同じ」

「私はイケるよ。・・・つか戦法からして乱戦でこそ真価を發揮する能力だし？・・・生き物に使ったらスプラッタなことになるけどね、アハハハッ」

ならいいかと頷くラーシャ。

少々キャラが濃い連中だが、あの閣下御自ら見初めた連中だから心

配事はないしと今回の作戦の成功を半ば確信する。

しかし不安になることもあった。

間諜の報告によれば、あの小僧共も来てるっていうじゃない。

はあーヤダヤダ。あいつらが関わったらほぼ失敗してんのよね。

ってか全部だったかしら？

どっちでもいいか。ここでその因縁を断ち切るだけだし？

ほくそ笑む彼女の背後には、三桁は軽く下らないだろうほどの魔獣が控えていた。

時刻は既に黄昏時<sup>たそがれどき</sup>。

夏夜の祝宴が始まっていた。

会場となっているのはガラ城大広間。

その大きさは巨大と言っても過言ではない。縦にも横にも大きいのだ。

そんな大広間の片隅で凧とライルは皿を手にとり立ち上がった。

凧は目でリディアを追っているのだが……。

そんな凧を見て、情けないともいうかのようにライルが話しかける。

「ナギ、そんなにリディアが気になるなら二人で出かけてきたらいいじゃないか」

「……リディアは一国のお姫様だぞ。俺みたいなのがどうこう出来るかよ」

「君は聡明でもあるが、同時にへタレでもあるな……」

「うっせ」

自分でも否定しきれないのか、反論しない風。

戦闘においては戦意が沸いてくるのだが、日常における度胸が必要な時になぜか風はへタるのだ。

そこへメイアが戻ってきた。

両手にもっさりと料理が盛られた皿を持って。

「ただいま」

「おうお帰、ブフッ」

「うびぢやああああ！目、目にいいいいいいいい！！」

あまりにも予想外なその光景に、つい風は飲みかけのジュースを嘔

き出してしまった。

ライルの顔面に。

そのお陰で貴族らしからぬ悲鳴をあげてしまったライルに、周りの招待客が不憫そうな視線を投げかけてくるが、生憎と誰も気付かない。

「……………ナギ、下品」

「悪い。ちよつとビックリしてさ……………」

「こらあ、僕に謝らねばならんのじゃないかい、君は!？」

「はいはい、メンゴメンゴ」

「誠意と謝意が欠片も見当たらない!？」

あまりにもな扱いに、周りの招待客は彼への同情を隠せない。

どこかからとても聞き覚えのある笑い声が聞こえたので、ライルはその方向へと肩を震わせながら歩いていった。

ただそれだけなのだが、彼の背中には哀愁が漂っていた。

ライルがどこかに行ったので、その場に残ったのは凧とメイアになった。

凧は食べかけの料理に手を付け始めた。

涼しい顔をして同じく食べ始めるメイアだが、内心では今までずっと隠されていた乙メイアが暴れ始めていた。

やばいやばいやばい。隣にナギがいてる。

どうしよう、でも今はリディアがいないし、攻めるなら今の内なんだけど、男の子にどんな話題で話せばいいのかなんて分からない……。

ああ、黙々と料理を食べてるナギ可愛い……ってそうじゃなくて、どんな話題なら男の子って喜んでくれるんだろ。こんなるんだつたらあの鬱陶ユルウスしかった男に聞いておけばよかった。でもあの時点だと私はナギのこと嫌ってたから。

ああもう私の馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿。

なんでナギのこと嫌ってたの？

こんなにカツコイイのに……。

暴走しているメイアは気付いていないのだが、凧との顔の距離が十センチを切っている。

それに気付かないメイアはちょっと暴走してるところではないが、そんなメイアに気付かない凧も凧である。

ようやく気付いた凧がメイアの方に振り返る。

あまりにも近距離なため、振り向きざまにメイアと唇が重な

。そこで凧の意識が途切れた。

シユライト大公園、首都ガラより数キロ離れた平原

シユライト大公国の観光地でもある『サースク平原』に、平原を埋め尽くすほどの大量の魔獣が集まっていた。

魔獣たちの中心にガラ近辺にしか棲息しないガドツソスの亜種『ガラソス』が四匹いた。

それぞれの背中にはラーシャと、黄、藍、紫のローブを纏った救世の使徒のメンバーが乗っていた。

ラーシャが大量の魔獣たちに号令をかける。

「目的地はガラ。そして目標は『闇の神子』<sup>ダーク・バラント・バラ</sup>だ。狙えるんなら『聖の神子』<sup>セイ</sup>も狙ってもよし。最優先は闇の方だから間違っではいけないぞ。

「……よし、進め！」

前線に立っていた中型魔獣を先に進ませ、残ったわずかばかりの大型魔獣を進ませ、最後に自分達が乗っているガラソスを走らせる。

前を見ていると隣を走っているガラソスに乗った藍色のローブの男ジャックが話しかけてくる。

「ラーシャ。どうかしたのか？」

「いや、今回こそはいけるかと思ってね」

「ハハハ、気にする必要は無いさ。何せわたっし達、『三騎士』がついているからね」

「……………そうだね頼りにさせてもらっよ、『左の騎士』」

返すラーシャの言葉に力は無い。

それもそうだろう。

何故なら彼女は、こんな自信家と同じようなパートナーと一緒に風たちに挑み、そして敗北したのだから。

以前はなんとか逃げれたが、今回はそうもいかないだろう。

今回はこれほどの戦力を引き連れているのであるからして、失敗など許されない。

そして彼女は一度失敗している。

ダレイクスの慈悲によって不問とされたが、今回は成功しなければならぬ。

そんな強迫観念が、ラーシャを襲っていた。

十五話『夏夜の祝宴』（後書き）

首都への襲撃っていいですよね。

あと、妄想が暴走する女の子も。

そんな回でした、今回は。

次回は大規模戦闘です。では御機嫌よう！

十六話『挟撃』（前書き）

今回は結構詰め込んだ感があります。

あと、『神子』が二人出ます。

やっと揃いました。

そろそろ読みは『みこ』ではなく『かみこ』です。

某シンフォニアは関係ないよ！

## 十六話 『挟撃』

シユライト大公国首都ガラ、ガラ城リディーア一行の部屋

側頭部に鈍痛がするなか、凧は起き上がった。

彼は知らないことだが、パーティーの時に彼が振り向こうとした瞬間、横合いから空の銀のコップが飛んできたのだ。

それは見事に凧の側頭部に直撃し、振り向こうとした体勢のまま気絶したのだ。

銀のコップを投げたのはリディーアだった。

なにやら不穏な気配を感じて凧が居る方向を見れば、メイアとの顔の距離がありえないほど近かったので、思わず中身を飲み干したコップを投げてしまっていたのだ。

リディーアがいたのは、彼らがいた場所から大体三十メートルほど離れた場所だ。

そこから寸分変わらずに凧の側頭部に直撃させられたのは、ひとえに恋する乙女パワーと言えるだろう。

もちろんそんなことを露程も知らない凧はただ首を傾げるばかりだ。

そこへ、元凶であるリディーアが部屋に入ってきた。

見知らぬ肩までの黒髪と満月のような金瞳きんめの超美少女を連れて。

「あれ、起きたんだナギ」

「こんばんわ。…………へえ貴方がリイちゃんのこい」

「ちよ〜と静かにしててね、ネリス？」

「分かりましたわ」

何か、仲良いなこの二人と他人事のように眺める風。  
実際他人事なのでおかしくはない。

リディアが説明しろと言っても無いのに、慌てて説明しだす。

「ナギ、あのねっ、この子は私の幼馴染のネリスなの。ペテルギア  
宮殿に居てる頃はほとんど誰とも喋ってなかったけど、毎年開かれ  
てた終戦記念祭で帰るまでずっと話し倒すくらいには仲が良かった  
の！」

「へ、へええ」

「…………リイちゃん。剣幕が凄すぎて引いておられますわよ」

「あっ！…………えへへ、今のは忘れてもらえる？」

こくこくと頷く風。

なんだか場の空気がいたたまれなくなりそうなので、話題を変えよう。と風はネリスと呼ばれた少女に話しかける。

「なあ、えっとネリスって言ったっけ？リディアと仲良いみたいだけど？」

「ええそうですね。そうそう自己紹介が遅れましたわね。……  
・シュライト大公国第四公女ラーナネリス・ルナ・シュライトですわ。以後お見知りおきを、王女の騎士様？」

「おう、よろしく！」

そのあまりにも軽すぎる挨拶に、つい風を凝視してしまうネリス。そして愉快そうな笑みを浮かべて、傍らの幼馴染リディアに振り向く。

「リイちゃん、この方は本当に身分など気にしないお方なのですね」

「だから言ったでしょ？……ナギは細かいことは気にしないって」

「これは流石に気にしなさすぎですわ」

「なんかついていけないんだけど……。もしかして俺、呆れられてる?」

「いえいえそんなことはありませんわ。器が大きいと申しますか、無礼講と申しますか……。」

「今確実に無礼って言ったよね!？」

「気のせいですわ、オホホホ」

「……ねえナギ、ちょっとネリスと話したいことがあるから、悪いんだけど席を外してもらえる?」

「いいけど」

ベッドの横に立ってかけられていたダンを取り、そのまま出て行く。扉を閉める時までリディアの視線を感じるような気がしたが、気にせず扉を閉める。

ガラ城リディア一行の部屋近くのテラス

出入り口近くに置かれている椅子に腰掛ける。風。

階下の大広間からは未だにクラシック調の音楽が聞こえる。  
凧はその音楽を聞きながら、夜空に煌めく満月を眺める。

異世界でも月って丸いんだな。

今まで何も気にしないでずるずるとこんなところまで来ちゃったな。

……学院長やアインスはきつと帰れるって言ってたけど、  
実際のところはどうかんだろ？

いつかは何とかなるって思ってここまで来たけど、サッパリ何も分  
かりゃしない。

まあ元の世界にいてる人の中で、俺のことを心配してくれる人な  
んてお爺ちゃんとお婆ちゃんくらいだからどうしても戻らなきゃい  
けないってほど思っただけ……。

実のところ、凧が今の今まで取り乱さなかったのは順応性が高いと  
いうだけでなく、この元の世界に帰りたいたいという思いが薄かったか  
らだ。

だが、周りには誰もいないという状況が、凧の郷愁の念を強くする。

せめて……せめて二人には俺が無事でやってるって。

俺は元気でいてるって教えたい。

死にかけてた時もあったけど、異世界なんていう空想上みたいな場所  
でも上手くやれてるって。

そう……自慢したいな。

知らぬうちに凧の頬を涙が伝う。

視界が滲む。

自分が泣いていることに気付いた凧は、手の甲で目の下を強く拭う。  
それでも涙は止まらない。

大粒の涙が、滂沱と流れ落ちる。

今度は服の袖で思いつきり拭う。

それでも、涙は止まらない。  
理性で押し止めようとしても、自分が持つ帰巢本能の強さに驚くと共に抗うことなんて出来なかった。

背後から足音が聞こえる。

ゆっくりとして、それでいて優雅な足音。

アンスタインに来てから、おそらくは一番聞いたのではないかという足音だ。

その正体に凧は考える前に気付く。

凧は背中を向けたまま、足音の主に話しかける。

「……………リディア。もう、いいのか？」

「……………うん」

二人とも、それっきり口を開かない。

数秒か、あるいは数分か。

自分達では分からないほどの時間が流れ、それでもなお二人は黙したままだ。

幾ばくかの時が過ぎ、ようやく凧が口を開いた。  
その顔にはどこか自嘲的な笑みが浮かんでいた。

「なあリディア、俺って駄目だな。……………今まで平然として

た癖に、こんな時に泣き出すんだ。  
それで今まで溜め込んでた分を吐き出すんだ。…………馬鹿み  
たいだろ？」

「おかしくないよ。ナギは、おかしくないよ。泣いたっていいじゃ  
ない。泣くのはおかしいの？」

…………私はナギみたいに強くないから分からなかった。ナギ  
がそんなに苦しんでたなんて…………」

「いいんだ。もう俺は…………吹っ切れ、ってリディア？」

凧の言葉を無視して、リディアは凧を背後から抱きすくめる。

その唐突な行動の真意を計りかねる凧。

首に回された細い両腕が小さく震えている。

それが嗚咽を堪えているのだと理解した。

リディアは止まった凧の涙の代わりとなる涙を流してくれているの  
だ。

その優しさに、凧の胸が熱くなる。

抱きしめられ、触れ合う箇所から温もりを感じる。

再び涙が伝いそうになるが顔を上に向け、零さないようにする。

その状態でリディアに話しかける。

「ありがとうな、リディア」

「うん。……ねえ、ナ」

リディアが凧にあることを言おうとした時、首都ガラの西門と東門が同時に爆発した。

突然のことにリディアは凧は体を離し、テラスの柵からわずかに身を乗り出し爆発した方向を交互に見ている。

「ナギ、これって……!!」

「たぶん、いや十中八九救世あこの使徒だ」

「どうしよう、どうしたらいいのかな!？」

「叩くしかないだろ」

「……私は避難ひんなんしといた方がいいよね？」

「おう。待ってる、お前には傷一つつけさせやしない」

「う、うん」

凧の言葉に思わず赤面する。

意中の男性に面と向かってこんなことを言われたのだ。

状況を考えると言われても、こればかりは仕方ないだろう。

凧はそんなリディアの様子を気にせず、街の方へと目をやる。

その時、遠くから透明なものがまっすぐ凧たちへと飛来するのが見えた。

その飛来するものが何か、リディアは理解した。

「『アクア・ランサイト水鬼の槍』！貫通魔法だから、受け止めないで叩き落してナギ

！」

「おう、『セイント・バスター聖神の燐光』！」

かつて『聖神の極光』の超劣化版として放った攻撃を制御し、飛来する魔法と相殺できるようにした迎撃または牽制用に手に入れた新たなダンの活用方法。  
それが『聖神の燐光』。

槍に対抗し、矢の形に整え、射出する。

矢は槍と正面からぶつかり、見事に相殺する。

第二波を警戒して辺りを窺う凧だが、ズドオオオンと凄まじい音を発してガラ城の城壁を破壊して近づいてくる巨大な影がいた。

かつてトワイライトで相対した大型魔獣のガドッソスの亜種ガラソスだ。

ガラソスはガドッソスに酷似しているが、違うところがいくつかあった。

まずガドツソスは全体として紫色だったが、目の前にいる怪物は全体的に緑色だ。

そして通常は一本しかない角も、怪物は二本ある。

さらに大型魔獣の中でも小型と言われるガドツソスの二倍ほどある体躯。

そして一番の相違点。

それは、

「ハーツハツハツハ！御お機嫌よう、お二方あ！わたっしは救世の使徒が誇る『三騎士』がお人！

『左の騎士』、ジャック様さあぁー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

その背中に馬鹿を乗せていることだ。

二人はその馬鹿を見て唾然としていた。

濃すぎるキャラ、衝撃的な登場、シユライト大公国の国獣の登場。

最後はリディアしか知らないが、それでも二人が凍りつくのに不足は無かった。

回復した風がまずしたのは、目の前の馬鹿の無視という名のリディアへの指示だ。

「あー、えっと、とりあえずここから離れるリディア。ここに居るとお前も巻き込みまうからさ」

「でも、ナギが心配なんだけど……」

「大丈夫だから。今回はかしはちょっと危なっかしいから」

「分かった。……けど、約束して。怪我してもいいから、無事に帰ってくるって」

「怪我すんの前提かよ……。約束は守るから早く行け」

「絶対だからね！」

そう言って駆け出すリディア。

もう見えてないだろなと思いつつも、後ろ手に手を振る風。

なぜだか風は手を振り返された気がした。

そう思うと力が溢れてきたような気がした。

改めて風は、目の前で奇妙なポーズを取っているジャックを見据えた。

ジャックは、終わったのかと言いながら腰に提げていた剣のような斧のような武器を持ち上げた。

「んー、最優先ではないとはいええむぎむぎ神子を行かす訳にもいかんしなー。おうい、ガラススよ。あの王女様を追って来い。裏口か

ら出るだろつから、先回りだ」

「グワウ！」

「え、命令すんなって？……. . . . . はあいはい、分かりましたよ。行ってください、カビヤロー」

「グガアア！！」

「ぬわあ あああ！」

ガラススが体を震わせ、背中に乗っていた馬鹿ジャックを地面に落とす。

それを尻は、何だこの馬鹿はと見ていた。

それよりも尻には聞き捨てならない言葉をあつた。

リディアを追って来い？

てことは、またあいつが狙われてんのかよ。

最優先じゃないつつつたから、狙いは他にあるのかもしれないけど、あいつも狙われてるんだつたら護衛の俺が見逃す訳にはいかねえよな。

椅子の肘掛に立てかけてあつたダンを手に取り、鞆から一気に引き抜く。

「よおう、なんか相棒さ、久しぶりに漲ってんじゃねえ？」

「まあな。お姫様と約束もしたし、負けるわけにやあいかねえからな！」

「その意気だぜ、相棒。あいつは馬鹿だが、実力は確かだぜ」

「分かってる。分かってるから、張り切んだよ」

ガラソスが駆け出す。

その巨体からは予想も出来ないほどの速さで先ほど開けた穴からガラ城の外へ出て行こうとする。

もちろん、それを黙って見ている風ではない。

柵に足を掛け、零距离の瞬間加速で一気にガラソスの頭を捉える。その頭をダンで貫こうとした刹那、背後から殺気を感じてダンを後ろに振る。

「ひゅう〜。まさか、あれを止めるたあね。なかなかやり手だな」

「そいつあどつも」

空中で剣を絡ませるが、ジャックによって弾き飛ばされる風。芝生を削りながら着地する。

二人の攻防の間にガラソスは壁の穴から出て行く。

凧は舌打ちしてそれを眺めるしかなかった。

目の前の藍色のローブの男は、そう簡単には見逃してはくれないからだ。

思えば自分が高速でガラススに飛びかかった時も、この男は反応していた。

それは凧の動きが見えていたことに他ならない。

それはこの男が強者であることの、何よりも証明だった。

「その白い剣。そうか、お前があの方が仰っていた『聖なりし者』か」

「そんなんはどうでもいい。とりあえず、お前を倒してリディアを追いかけないといけねんだ。……つうわけで、さっさと行かせてもらおうぞ」

「構わんさ。やる気ないやつと戦うのは御免こうむりたいからな」

腰を落とし、得物である剣と斧が合体したような武器を構えるジャック。

その構えからは、歴戦の戦士のような圧力を感じる。

実際にそうなのか、そうじゃないのかは凧には関係がなかった。

この男を突破しない限りは、リディアを追うことも出来ない。

先に動いた方が負ける、なーんて言葉があるが、この状況だと動かねえと負けだ。

こいつらの目的は最初に会った時からずっとリディアのはずなんだから。

凧も体勢を低くし、ほぼ最高速度でジャケットに突っ込む。ガラ城の中庭で、死闘が始まる。

## ガラ城裏門

遠くの方で煙が吹き上げているのを見ながら、パトリックは隣に立つ公王しんおうを見た。

シユライト大公国公王サルダ・ソウル・シユライト。

自分と同じくもう五十にも届こうかという壮年の王の顔には、苦虫を噛み潰したかのような表情で埋め尽くされていた。

その心情は、同じ王であるからこそ理解できる。

その国の頂点である者が住まう都を蹂躪されている。

ただそれだけではない。

煙が吹き上げている場所には愛する民が何人いたことか。

その場所を作り上げるのに、一体どれほどの時間と人を要したか。

『聖父』と謳われるサルダは、その光景を見て胸を痛めているのだ。

「まだ、近衛は来んのか」

「慌てるなサルーダ。辛抱強く待つことも、戦の場に立てぬ私たちの務めだ」

「そうだな」

「それにあまり気負いすぎても、またぞろ病床に臥せることになるぞ」

「ふ、余計なお世話だ」

パトリックの軽口に笑みを零すサルーダ。

この男はいちいち小さな事でも気を病む自分を慮って言うてるのだ。それを嬉しく思うサルーダ。

両国が深い親交を結んでいるのは、歴代の王同士が良好な仲を築いているからだ。

そして二人はもう五十年に及ぼうかという仲だ。

二人の口元には笑みが浮かんでいる。

この状況に悲観などしていなかった。

両者ともに自国の兵を過小評価などせず、信頼しているのだ。毎日続いている厳しい訓練。

その成果を今こそ見せるために、彼らは戦っているのだ。

数分後、三十名からなる一個小隊が彼らのもとに駆けつけた。

最精鋭たる彼らが護衛についたことにより、現在のガラ屈指の布陣

となった。

王二人が完全なノーマークと知らずに。

首都ガラ、西大通り

パーティーを途中で抜け出し、掘り出し物とかはないかとぶらぶらしていたアインスは、突如発生した爆発音に身構えた。

爆発音。まさかお嬢ちゃんがこの記念祭に参加してるのがバレたのか？

……考えにくいな。今の今まで暗殺みてえな手法をとってた連中が、いきなりこんな策をとるってのか？  
それとも、ここまでしてでもお嬢ちゃんを手中に収める必要があるのか？

そこまで考えたアインスだが、それ以上思考を続けることは出来なかった。  
何故か。

数メートル先の角から数匹のオークが現れたからだ。  
しかも以前ニダの森で遭遇した幼体ではなく、成体のオークだ。  
その大きさはおよそ四メートルほど。

巨体から発せられる威圧感は、新兵なら失禁してしまうほどのものだ。

獲物を見つけたオークたちは、顔を見合わせて喜んでい  
る。  
アインスはニヤニヤした顔でその様子を見ている。

「おおー、もしかして加齢臭がしてきたおっさんを食う気がよ  
やめとけやめとけ、自分で言うのもなんだが、きつとマツズイぞお  
？」

「ウガ、ウガガア！」

「ウギギ、ウギアア！」

「悪いな、俺はお前らがなんつつてるか分かんねえや」

「ウガオア！」

アインスの言葉を見無視して、先頭の三体が突っ込んでくる。  
それを、アホだなあお前らと呆れながら眺めるアインス。

真ん中のオークが振り下ろした棍棒を避け、その肩を蹴って跳び上  
がる。

腰に挿したレイピアのような杖の先端を三匹に向ける。

「生憎、まだおっさんは死ぬわけにはいかないんでね。……」

「グランド・ボンバー  
直下爆発」！

「ウボアアア！」

「ウギアアア！」

足元で起きた爆発は、三匹を容赦なく焼き尽くす。衝撃で真後ろにいたオークが吹き飛び転がっている。

残ったのは四体。

左から迫るオークの脚を『ファイア・ランス炎の槍』で溶かし、右から迫るオークの当身を避けて眉間に『ヒート・レーザー火の閃光』を撃ちこむ。

二体は緩やかに石畳の大通りに崩れ落ちた。

手に持った槍を高速で振り回すオークの突撃を紙一重で次々と避けるアインス。

「どうしたよ、そんな大層なモン持ってて、人間一人仕留められねえのかあ？ このデブが！」

「ウゴゴガアアア！」

アインスの挑発に怒ったのか、さらに激しさの増す攻撃。しかし、優雅な舞のようにアインスは巧みに避ける。

「おいおい、武器つてのはぶんぶん振り回すだけじゃあ駄目なんだから？ まあ、お前にはもう聞こえてねえだろうがな。……さて、もう十分魔力は溜まったし、三匹纏めて一気に貫いてやるぜ」  
トルネード・ランサイト  
「渦巻く風槍」！」

透明な三本の竜巻の槍がそれぞれのオークの腹を削りながら貫く。分厚い脂肪で作られた天然の鎧を強引に突破し、臓物を引き裂きながら背中側から槍の先端が突き抜けていく。おそらくこの場にアインス以外に一般人が居たならば、確実に吐いていただろうスプラッタな光景だった。それをアインスは無表情に眺めていた。

やれやれ、まだ俺にも残虐な一面が残っていたか。つっても昔の俺なら多分これが当然とってたから、こんなこと考えるだけ俺も甘くなっただってことだな。

とりあえずこいつらは焼却処分だなーとか考えていたアインスに巨大な影が差す。

曇ってきたのかと見上げたアインスが見たものは、

「先の戦い、見事であったぞ。小生は貴様を称讃しよう」

シユライト大公国の国獣ガラソスト、その背に乗った紫色のローブを纏った偉丈夫であった。

「ガラソス？ しかも、明らか強そうな感じだな、お前」

「一見して小生の実力を見抜くか。侮りがたきかな」

「……これは俺も本気出すしかねえか」

「小生はその賢明な判断を肯定しよう」

「こいつがあれば、負ける気はしねえなっ！」

言葉と共に自らの影から赤い剣を抜き放つ。

火の聖霊剣『ヴェステイク』。

この剣を手にしてから、数多の危機を乗り越えてきたアインスの切り札だ。

ヴェステイクを見て、紫色のローブの偉丈夫の顔が驚愕に変わる。

「馬鹿な、ヴェステイク火の聖霊剣だと？」

「知ってたのか。そう、こいつは火の武具の頂点。そんじょそこら

の奴程度じゃあ黒焦げにしちまうぞ」

「くっくっく。そうか、貴様も強者の証を持つか」

「………貴様『も』？」

「いかにも。そしてとくと見よ、小生の  
『三騎士』が一人  
『中央の騎士』キングの切り札をな！」

キングがアインスと同じく自らの影から剣を抜き放った。

その剣はヴェステイクと対をなす形であった。

それは青かった。

剣身、鐔、柄の全てが青で構成されている。

アインスは手に持つ愛剣に目を落とし、そしてもう一度キングの剣を見る。

見れば見るほど色以外の全てがそっくりだった。

もはやそっくりなどという表現どころではなく、完全に形が一致していた。

「驚いたか？　これが小生の半身でもあり、水の聖霊王『ウンディーナ』から授かった水の聖霊剣『ウンデステイク』だ」

「名前まで似通ってんのかよ」

「それも仕方ないだろう。何せ命名したのは、聖神『ジュピテリウ

サ』だからな。ウンディーナから聞いた話によれば、それぞれの聖靈王に肖あやかっているらしいぞ?。」

「そんなんはどうでもいいが、この場に火と水。相反した属性の聖靈剣があるってことあ、どう考えてもガチバトルしろってことじゃねえか?。」

「ふん。小生もその案に乗ったぞ。貴様、名は何と言うのだ?。」

周りを見渡すアインス。

数回ほど左右を見てから、キングへと向き直った。

「アインス・ルミル・スヴァン。元グランソ帝国魔法騎士隊長の少佐だったんだが、今はレッサー王立魔法学院のしがない教師だ。」

「ほう、それにしてもわざわざ周りを確認するぐらいなら、そんなことは言わねば良かったのではないか? 少佐殿?。」

「ああ、あれは大した意味はねえんだよ。」

「何だと? では一体何のために……………」

「これのためさ。『雷の三叉槍』」

アインスが魔法発動の最後の工程を行うと、天から巨大な電撃で出来た三叉の槍が降ってきた。

キングはそれを察知し飛び退いて難を凌いだ、気付かなかったガラソスはそれをもろに食らった。

断末魔をあげることなくあまりの威力に即死したのだ。

電撃の槍の破壊はそれだけで止まらず、ガラソスを中心として石畳の道路を蜘蛛の巣状に罅入れた。  
それを気にせず、アインスはぼやく。

「惜つしいなあ。直撃してたらお前も即死だったろうに」

「小生の弱点は小生が最も把握しておる。よもや高位魔法である雷の魔法を使ってくるとは思わなんだが、それも弱点の一つであれば万が一にも注意しておくのは当然だ」

「んまあ、雷それの魔法を使える奴は限られてるしな。ただ、目の前のおっさんが雷それの魔法を使ってきたってだけだろ？」

「そうだな。……そこな魔獣共の死骸は邪魔だな。小生が始末してやるっ」

キングがウンデステイクを振るうとオークたちとガラソスの屍骸を覆うように水球が現れた。

何をするつもりかと訝しんでいると、劇的な変化が現れた。

圧倒的な水圧によって屍骸が潰されていつているのだ。

アインスがその光景を食い入るように見ていると、キングが笑った。小生はこのような細かいことすらも会得しているのだ。そんなことを言われているかのような感覚になった。

完全に影も形もなくなった魔獣のことなど、すでに二人の認識の外から出ていた。

両者共に剣を振りかぶり、そして振った。

それだけで彼らの中間で轟音とともに爆発が発生した。

アインスが放った爆発と、キングが放った水球。

通常ならば、水球は爆発などしないだろう。

しかし詰められた水の聖霊王の魔力が、火の聖霊王の魔力と反応し、その結果凄まじい爆発を引き起こしたのである。

残ったものは爆発の影響で発生した薄い霧だけだった。

かすかに立ち込めた霧が晴れる。

アインスも、キングも。

お互いに向き合ったままだった。

ただ変わったといえる箇所があると言うならば、それは彼らが笑っている。

その一点につきるだろう。

首都の中心で始まる死闘があるならば、首都の片隅で始まった死闘もあつた。

十六話『挟撃』（後書き）

ライルとメイアは空気ですが、あとから出番増やします。  
それと、拙作ではトンデモ理論が大量発生します。

別にドリルは威力が360倍とかは言いませんが、アインズとキングの戦いみたいなことは多々あるかもしれないませんが、なに、気にすることはないでしょう。

それではみなさん、御機嫌よう！

## 十七話『死闘』（前書き）

今回はわりかし早めに出来ました。

今まで短いのが多かったので、前話と今話は長いです。

出来れば次回も長くします。

どうでもいいですが、全話のサブタイトルを変更しました。

じゃないとサブタイトルにつけようと考えてる案がパーになっちゃいますので。

ではどうぞ。

## 十七話『死闘』

### ガラ城中庭

中流貴族の別荘程度ならすっぱりと納まってしまいそうな大きさの中庭で、金属が弾き合う音が聞こえる。

広大な芝生の舞台にはたった二人しかいなかった。

凧とジャック。

二人はつい先ほどから戦いを始めたばかりで、その身にはあまり傷はついていない。

とはいえこれは手を抜いている訳ではなく、双方ともにペースを考えて戦っているので膠着状態になってしまっているのだ。

「中々に手強いな。流石は我らが閣下が注意しておくよう仰るだけはある」

「買い被ってくれるのは感謝するが、きつと無駄だと思っぜ？」

「無駄ではないよ。敵を知っておくのもまた、戦の場に赴く者の義務でもあるのだからな」

軽口を叩き合うが、二人の体には未だに傷はない。

手加減はしていないが、どちらも攻めに転じる機会を窺っているの

だ。

剣戟を交わしあうのだが、互いの得物が絡み合うばかり。だがこの膠着状態から抜け出すためにジャックが動いた。剣斧を思いきり地面に叩きつけるジャック。粉塵が凧の視界を遮るように撒き散らされる。

かつてこれと同じような手を使われたライルから聞いたことがあったのだ。

この一見しただけでは、全くの無意味に思える行動をメリアにされてはめられた、と。

だからこそ予想がついたのだ。即ち。

距離を開けての魔法を発動させるための布石だということ。

それをさせないためにも、凧は『加速』を使って高速で接近する。しかし、ダンが切羽詰まった声で叫ぶ。

「駄目だ相棒、横に跳べ！ 串刺しにされるぞ！」

「なっ！？」

横に跳んだ直後に、剣斧の切っ先が凧の顔の横を通りすぎていった。あと一瞬でも動くのが遅れていたら、あるいは後ろに跳んでいたら、凧の首から上はきつと地面に落ちていただろう。

だが、凧はあの必殺の一撃を回避してみせた。  
例えダンが警告したとはいえ、実際に動いたのは凧なのだ。

ジャックの顔は驚愕で染められている。  
当然だ。

今まで何人もの強敵を葬り去ってきたであろう一撃を、自分より二回りほども年下の少年に避けられたのだから。

その驚きようは、まさに筆舌に尽くしがたいものがあった。

凧はあまりの事態に隙だらけとなったジャックの右脇腹を切り裂く。  
前に出た勢いを利用して、ジャックの胸の中心を蹴って吹き飛ばす。  
ジャックは受け身を取りながら、心の中で感情を爆発させた。

馬鹿な！ このわたっしの、この『左の騎士』ジャック様の必殺の一撃を………避けやがっただとお！？

しかも、あまつさえ二撃も加えるなど有り得ん！

結局のところ、ジャックは相手がまだ若い凧であったということに  
慢心していたのだ。

自分は強いからそこらの奴では敵いすらしない。

自分は優れた戦闘者だからこんな小僧には敗けるわけがない。

それらは正しいだろう。

ジャックは強い。

だからこそダレイクスにも見初められたのだ。

だがそれは自身の強さへの盲信には繋がらない。

そして油断した結果が、この様であった。

ジャックは自分の右脇腹を一瞥してから、凧へと視線を向ける。  
その目は純粹に敵だけを見ている目であった。

ジャックは風を今までの誰よりも強い敵と認めたのである。自分が先に手傷を受けたのは痛手であったが、それでもどうしてもジャックは気分が高ぶるのを押さえられなかった。

「確かナギと呼ばれていたか？」

「おう」

「良い名だ。わたっしの人生最大の敵であるお前と出会えたことを信じてもない神に感謝しよう。」

そして、わたっしの目を覚まさせてくれたことにもな。そんなお前を舐めたままでいるのは、お前に対する侮辱だろう。よって、お前はわたっしの全力で擦じ伏せてやる……！！ 感謝しろよ、ナギ」

「ハッ、どうせやるなら楽な方でやらせてほしかったんだがな」

そうは言っている風なのだが、ジャックの言葉を受けてさらにやる気を出したようだ。

構える風を見て、腰を落とすジャック。

眠っていた獅子は目覚め、その実力を発揮する。

全力で戦えば、『三騎士』のリーダーである『中央の騎士』キングをも打倒すると評された実力を。

## ガラ城裏門

近衛に護られていた王二人はそこに居ず、すでに避難済みであった。その代わり、そこにはネリスがいた。

誰かいないかと見に来たのだ。

だが裏門まで来るのが僅かに遅れ、そこにいたはずの父とレッサー王と近衛はいない。

おかしいですわね。緊急の事態になると、ここに近衛の方がいらっしやると聞いていたのですが……。

こうなったら自分で安全な場所に逃げるしかありませんわねと考え込むネリス。

だがその時、近くの草むらが揺れた。

バツと振り返るとそこにいたのは、

「ラーナネリス公女殿下？　こんなところでどうされたんですか？」

頭に葉っぱを乗せ、ぽかんとしているライルだった。

ライルの顔に見覚えがあったネリスは安心しつつも、彼にその素性を問うた。

「あなたは確か、リイちゃ、いえリディア第三王女の……」

「ええ、サイヤン伯爵家次男のライル・アルダ・サイヤンと申します。もしよろしければ、私が貴方をエスコートしてもよろしいでしょうか？」

「ええお願いしますわ、騎士様？」

ライルが草むらから出てきた時、凄まじい音と共に近づいてくる気配を感じた。

裏門で待ち伏せしろと言いつけられた弩級の怪物にして、緑の体色のシユライトの国獣。

その巨体が裏門から突っ込んできた。

「あれは！」

「シユライト大公国の国獣、ガラソス！」

「何故彼がここに！？ 彼らは『サースク大森林』のはるか奥地で眠っているはずですわ！ なのに、何故ガラにまで現れているのですか！？」

「それは分かりませんが、おそらくは操られているはずですよ。以前私たちは魔獣を操る女と戦ったことがあります。おそらくはそ奴の

仕業かと。」

「国獣を操って、その国の首都を襲撃するなど、侮辱の極みですわ  
!?!」

ガラソスがゆっくりとした動作で顔を二人に向ける。

『サースク大森林』を通る際に彼らと遭遇したことがあったネリスは、向けられた瞳に何の感情も宿っていないのを見て絶句した。

そして、ふつふつと怒りが湧いてきた。

優しげな色を写していた『優しき巨獣』の瞳は、暗くどんよりと濁っていた。

ネリスはガラソスを救ってやりたかった。

元の優しかったガラソスに戻してやりたかった。

しかし自分にはそんな力なんてない。

そこで彼女は自分を庇うように立つ少年に目をやった。

「ミスタ・ライル。彼を救ってあげて下さい。元の優しい彼にして  
あげて下さい」

「.....」

「ミスタ？ どうされましたの？」

ライルは悔しそうに唇を噛んでいる。  
ネリスはなんだか嫌な予感がした。  
とても嫌な予感が。

ライルは押し殺した声でネリスの懇願に答えた。  
無慈悲な答えを。

「その前に一旦離れましょう公女殿下。……………先のご質問の  
答えですが、それは出来ません」

「何故ですの!?! 以前戦ったことがあるなら、解除法も知っ  
ているでしょう!?!」

「いえ、そ奴には逃げられています。そして撃退したのも私  
ではなく、私の師なのです」

「……………くっ、何とかありませんの?」

「殿下、差し出がましいかもしれませんが、申し上げますが救いと  
はただ取り戻すだけではありません。時には介錯することも救いな  
のです」

「殺す、と言うのですか?」

「その通りです」

尚も詰め寄ろうとするネリスに、ライルは何故かと言つたと前置き

して話し出した。

ガラススは夜目が利かないので、手当たり次第に暴れまわっている。植えられている花が宙を舞う。

アーチのように育った木が薙ぎ倒される。

ネリスは出来る限りその暴虐を見ないようにして、ライルの言葉を聴く。

「文献によると、かつて戦場で魔獣を従える魔法使いがいたようなのです。ですが現在も昔もそんな魔法はありませんでした。ではどうやっていたかと言えば、それは『オウン・アビリティ保有能力』のチカラだったんです。それもただの『保有能力』ではなく、非常に稀な『レア・オウン・アビリティ稀少保有能力』だったんです。……その名も『ナラ・ルーカー醜い傀儡師』」

「『醜い傀儡師』、ですか」

聞かされた内容確かめるように口の中で転がすように呟くネリス。その通りですと頷きながら、ガラススの方へ視線を向けるライル。そのまま自分が調べた『醜い傀儡師』についての概要を話す。

「……『醜い傀儡師』によって操られた魔獣を解放する手段はただ一つです。それは魔獣の撃破です」

「それが……救いなのですね？」

「ええその通りです殿下。……師や友人ならば、他の方法

を見出だしたかもしれませんが、生憎と私は凡人でして、他の方法など思いつきませんでした」

「いえ、それほど攻略が困難な能力だと私も思いますわ。……  
・戦うことすらも出来ない私に、貴方を責めることなど出来るはずがありませんわ」

「そう仰っていただけなら幸いです。……では、私はこれからガラスと対峙してきますが、生憎と私は凡人ですので援護をしていただけないでしょうか？　もちろん、殿下には危害など及ばないよう致しますので……」

「フフフ、頼もしくも愉快なお方ですわね。援護ですか、よろしくつてよ」

言って腰に挿していた指揮棒のような杖を抜く。  
正直なところ、戦い慣れしていないネリスが居たところでさして戦況に大差はない。

だがそれでも、魔法とは立派な武器となりえる。  
ライルは一秒でもいいから気を引いてくれることに期待しているのだ。  
たったそれだけで師匠アインスに鍛えられた『高速詠唱』クイック・リードが真価を發揮するのだから。

ライルは牽制代わりに『風剣』エア・セイバーを放つ。  
いつも模擬戦を行っている面々からはもはや彼の十八番であると考えられている魔法だ。

もちろん彼も自身の十八番であると自負している。まだ透明ではないが、夜にはほぼ完全に見えなくなるほどに透けているため、夜目が利かないガラソスには効果抜群だろう。

実際にガラソスは全く気づかず、放った数本全てが首筋や胴体、脚部の甲殻の隙間から見える皮膚に突き刺さった。鮮血が溢れ出る。

突如走った（と感じた）痛みでガラソスが吼える。

「上手いこといったみたいだね。……殿下、援護お願いします」

「えっ、ちよっ。ああもう、援護すればよろしいでしょう、援護すれば！」

落ち着いたかと思った矢先に再び暴れ始めたガラソスに狙いを定めるライル。

近距離から魔法を放とうと近づくとライルだったが、突然ガラソスが彼のいる場所に振り返った。

振り返ると同時にその前足をライルがいる場所に叩きつけるガラソス。

魔法の方向をガラソスから自分へと向ける。

「ウインド・パンチ  
疾風拳」！」

ウインド・エレメンタル  
風属性最速の魔法『疾風拳』を自分に向けて放つことにより、綺麗に吹き飛ばすライル。

全身に鈍い痛みが走るが、お陰で即死級の一撃を避ける事が出来た。距離を取ったお陰が分からないが、ガラソスはライルを見失ったようだ。

巨体が体を揺らしてキョロキョロと首を振っている様はどこか滑稽だ。

一旦落ち着く事が出来たので、ライルはガラソス特有の能力を思い出した。

そういえば、ガラソスは確か近距離に存在する魔力を感知する事が出来たんだっけね。つまり、それは近づくのは自殺行為だったことか。ナギには痛いだろうね。

何せ『加速』は魔力によって発動しているからね。まあもしもの話をしても関係ないし、いかに遠くからダメージを与えるかを考えないかね。

まずは攻撃してみないと分からないからと言いながら、ウインドローフレスト『風槌の打弾』を発射するライル。

ちょうどその一撃は真横からガラソスの頭部を揺さぶり、たまたらたたらを踏んでいる。

その隙を見逃すまいと、ライルは追撃する。

「『ウインド・バンドーラ疾風の拳槌』！」

高速で射出された魔法はガラソスの頭部を叩きつける。  
ガラソスはその威力に耐え切れず倒れる。  
好機と見たのか、ライルはネリスに指示を与える。

「殿下、この隙に畳み掛けてください！」

「分かりましたわ！……アイスト・ランス『土の槍』！」

倒れ伏したガラソスの巨体の下から一本の太い槍が突き出た。  
その槍は容赦なくガラソスの甲殻を突き破り貫通した。

先ほどとは比べ物にならない激痛に、さっきよりも強烈に吼えるガラソス。

槍をへし折り、首を振り、吼えながら走り出す。  
進行方向にはガラ城の堅固な城壁が聳そびえている。

万全の状態で体勢を固定していたなら、城壁は易々と突破されていただろう。

だが今のガラソスは万全というには程遠いだろう。  
凄まじい音を立て城壁に突っ込むが、僅かに罅を入れただけに止まる。

ぶつかった衝撃でガラソスは再び倒れ伏している。  
そして二人のことは既に意識の外だろう。  
ライルは隙だらけのガラソスに引導を渡すため、今まで誰にも知ら  
さずに鍛錬していた魔法を詠唱しはじめる。

「吹きすさべ荒れ狂う突風、ヌーレニシヤ・ フォル・ニシテイ 弾き飛ばせよ勇者の兜を」ハレヌフィニア・ オルストラトロイ

「な、何ですの！ その魔法は！？」

ライルは答えない。

否、答えるだけの余裕が無いのだ。

古代アンスタイン語詠唱。

その別名を創世期語詠唱ともいうこの詠唱は、発動者にかなりの集  
中力と人間には発声が困難な呪文の詠唱を要求するのだ。

始めは散々だった。

何度も集中力が揺らぎ、暴発したことなどザラであった。

その度にライルは立ち上がり、何度も何度も詠唱を続けた。

そして彼は会得したのだ。

古代アンスタイン語詠唱を。

「ニーヤ・ニーアーニス 頭蓋すらも揺さぶれ……これで、終わりだ！  
フロージ 旋風』ッ！……」  
『シトラ 白夜の

かつてその身で受けた魔法を、自らの物とし鍛え上げた。  
その果てがこれだ。

目の前にはあらゆるものを吹き飛ばす蹂躪があつた。

かつてその身で受けた魔法は、その威力を何倍にもして放たれた。  
花を、木を、城壁を、そしてガラソスを。

範囲内の全てのものを蹂躪しつくす。

蹂躪の旋風が収まったとき、そこには何も残ってなかった。

ライルは力が抜けたのか、へたりと地面に座り込んだ。

そこにネリスが啞然とした顔で近寄ってきた。

「……今のは一体何なんですか？ あんな魔法、聞いたことも見たこともありませんわ」

「今のは、まあ、私の切り札みたいなものですよ、殿下」

「そついつごとにおきますわ」

ガラソスの襲撃を切り抜けた二人は裏門を後にすることにした。

首都ガラ某所

「くそつ、ガラソスが一体やられただと!？」

「あらあ、駄目な子ね」

「ええい、あの時の小僧か！　ここまで出来るようになってるなんてええ！」

どこかの塔の上でラーシャは憤慨していた。

国獣などというからどれほどかと思えば、あっさりとやられたのだ。その気持ちも分からなくも無い。

しかも大量の魔獣をその能力の下に支配しているのだ。

細かい操作も出来ないのだからまともに戦うことはほぼ不可能だろう。

黄色のローブの女が妖艶な笑みを浮かべてラーシャに向き直る。

「ねえもう私も行っていいかしらあ？　そろそろつづつづしてきたんだけど」

「………まあここを見つけるなんてそうそう出来ないだろう

し、行つてきなよ」

「ありがと〜う！ 頑張つてくるわぁ、あなたも頑張つてねえ〜！」

そして塔から飛び降りた。

だがラーシャはすでに見もしていない。

そもそもダレイクス自らが見初めた輩だ。

自分が生身で相対すれば瞬殺されるだろ〜うほどの使い手だ。  
心配する必要などどこにも無いのだ。

だが、一抹の不安があつた。

凧たちの存在だ。

「……………あの小僧共がいてるお陰で、  
散々失敗したけど今回は、まあ大丈夫だろ〜うね」

その眩きは風にかき消された。

首都ガラ、西大通り

赤と青が高速で交差する。

その度に金属がぶつかりあう甲高い音が響く。

絡み合った二つの色が離れば、今度は魔法が飛ぶ。

場所はアインズとキングが遭遇した場所からもう二百メートルは離れただろう。

そこに到るまでに大小の破壊跡が残っている。

それほどの激しい戦いであった。

「………『フレイム・エッジ灼熱の双爪』！」

「………『ウォタル・ファンク水流の双牙』！」

アインズの剣の先から二つの炎の爪が現れ、キングに向けて放たれる。

対するキングも二つの水の牙を飛ばす。

それぞれの真ん中でぶつかり、凄まじい爆発が発生する。

「ちっ、しぶてえ野郎だな」

「小生も貴様がここまでの使い手とは思わなんだぞ。………」

しかし、これで終わりだ！」

「！！」

今までよりも速い速度で接近してきたキングに、驚きわずかに動きを止めてしまうアインス。それは決定的な隙となった。

ぬうんという力強い声とともにウンデスティークが横薙ぎに振るわれる。

ぎりぎりですエスティークを割り込ませるが、魔力によって腕力を強化していたのか一気に吹き飛ばされるアインス。

距離が開いてしまいまともな体勢でないため、キングに魔法を使わせる時間を与えてしまう。

「アクア・ドロー、『アクア・ウィップ』、ジェイク・フォール、『天の滝』、ウイニク・アクア・ドロー、『流撃の水槌』」

「くっそ………こんなん、避けきれ、うごあつ！」

魔法の弾幕を回避しきれなかったアインスが吹き飛ばす。十数メートルは吹き飛ばされ、数回転ほどして止まる。げほつと口から血を吐き出し起き上がろうと足に力を込める。

だが、無情にも顔を上げたアインスの視界に入ってきたのは、詠唱

をしているキングだった。

その目には敵を、アインスを必ず殺すという意味が籠もっていた。

「飲みこめ さざめきの大渦、喰らいつくは巨大な腕、芯の髄まで  
砕け」

そこから離れようとしてもダメージが大きかったのか、なかなか思  
うように体が動かない。  
痛みを我慢して立ち上がった瞬間にキングの魔法が完成する。

「『怒濤の大蛇』ッ!!」

「『!』」

巨大な水の蛇はアインスが居た場所に突っ込み、圧倒的な破壊をも  
たらした。

辺りに砂埃と水蒸気で出来た煙が漂う。

キングはいかにも不満だという表情でいる。

なんだ、かの火の聖霊王に認められた者だというのに、これで終い  
か？

なんと弱き奴だ。久しぶりに小生を楽しませてくれるかと思ったの

になあ。

最後になんぞ唱えていたが、結局不発に終わったようだしな。

強力な兵を一人始末したし、そろそろ別の場所に行こうかと踵を返そうとした瞬間。

煙の中から何かが突っ込んできた。

その手に赤い剣を携えている。

アインスだ。

しかしただ突っ込んでくるアインスを見て、やけになったかと思っただキングは赤い剣を弾く。

そして胸に深々とウンデステイクを突き立てた。

しかしそこで違和感を覚えた。

何故これほどまでに浅い感触なのだ？

いや、これはそんなレベルではない。

もはや無いと言ってもいいこの感触。

………もしや！

乱暴にウンデステイクを振ると、剣を携えた男は霧のように消えてしまった。

直後、右腕が軽くなった。

いや、その表現は正しくない。

正確には、右腕から先の感覚が消えた。

見ると、二の腕から先が綺麗に無くなっているではないか。  
そして背後を振り返ると、

「どうした？ 幽霊にでも会ったような顔してよ？」

「 なっ！ 貴様、何故………?! 」

「 『分身』<sup>ドッヘル</sup> 」

「 ツツツ！ 」

キングの顔が驚愕で固まった。

消費する魔力が多いくせに、何も出来ないただ発動者と同じ格好の分身を生み出すだけの、もはや大道芸くらいにしか使い道の無い無駄な魔法。

それが『分身』<sup>ドッヘル</sup>。

しかしこの無駄な魔法にも取り柄はあった。

それは、消費する魔力が多ければ多いほど密度が濃くなり（見た目だけ）発動者に似るのだ。

その能力のお陰で囿としても使える。

とはいえ、そんなしょうもない使い方をする魔法使いは一人も居ないのだが………。

しかしアインズはその特性を利用し、キングを出し抜いたのだ。

もちろん使い道がないと思いつき込み、全く予想だにしていなかったキングはうるたえる。

「馬鹿な。あんな、あんな魔法に欺かれただど!？」



えた。

最後の止めを火属性で行ったのは彼なりの親切であった。

「火葬は葬式屋の代わりにやってやったんだ。……そうそう、こいつはもう使わねえんだろ？  
だったら、俺が貰っとくぜ」

転がっていたウンデステイクを拾い、傷だらけの体で彼は走り出した。

弟子が心配だったからだ。

いくら強くなったとはいえ、自分が苦戦するほどの強さ。

加勢しないと負けてしまうかもしれない。

弟子を信じてはいるが、どうにも不安だった。

## ガラ城中庭

高速で剣戟を交わす音がする。

連続で甲高い金属音が鳴り響く。

強烈なジャックの一撃を、尻はいなし流し避ける。

ジャックは凧の体捌きに舌を巻いていた。  
まだ年若い凧がこれほどの高速戦闘を行っているのも驚きといった表情だ。

だがそれ以上に驚くべきは彼の表情には余裕があったという点だ。

「ナギ、お前は評価するに値する。だがそれだけだ。……  
それ以上はないな！」

「うぐっ」

より激しさを増すジャックの攻勢。

凧は防戦一方だ。

その内、防ぎきれずに体の各所に傷が出来ていく。

見ていられないとでも言うようにダンが騒ぎ出す。

「おい、相棒！ こいつ相手に出し惜しみは危険やで！ 全力を出せ、全力をっ！」

「分かってるよ！」

「そんな話を聞かされちゃあ放っておけないな」



起き上がろうと腕に力を込める凧だが、あまりの痛みで地面に手をつくしか出来ないでいた。

ジャックは攻撃の手を止めない。

一息に凧のもとまで近づき剣斧を振り下ろす。

凧は横に転がって避け、同時に『聖神の燐光』を放つ。

白い弾丸は防がれるがジャックを後退させることに成功する。

素早く起き上がると背中が鋭い痛みが走る。

どうやら先ほどの一撃は避けきれず掠めていたようだ。

その際マントもさっくり落ちていたが、凧は王様に怒られるかなと思いつつも気にしないことにした。

「そろそろ終いにしようぜ」

「それは同感だな。わたっしは未だ無傷だがな、ハハハハハ！」

「こっから逆転ってこともあるだろ！」

「違うな！……『疾風拳』！」

ぼんやりとした緑色の塊が高速で飛んでくるのを見て凧は反射的にダンを振った。

その結果見事に凧は『疾風拳』を切り裂いた。

予想外の事態についてジャックの動きが止まる。

凧は好機とばかりに突っ込む。

ダンを上段に構え、一気に振り下ろす。

剣斧で受け止められるが、凧はジャックの真似をした。

足や拳を使つての格闘。

『加速』アクセラレイションをフルに使つた回し蹴りがジャックの左脇腹に食い込む。

「じつ!?!?.....くそがつ!」

「避ける、相棒!」

「危ねえ.....うおわ!?!」

剣斧の一撃をバックステップすることで回避した凧だったが、跳んだ先には予想外の物があつた。

ジャックの剣斧によつて切り落とされた、凧のマントの切れ端だ。それを踏み、足を取られたのだ。

視界には夜空が見えた。

なぜだか凧にはそれがゆつくりと流れていくように感じた。

視界の隅でジャックが剣斧を振りかぶり接近してくるのが見えた。

『加速』を発動させる。

肉体への反応速度を加速させ、倒れていく姿勢を無理やり回転させた。

肉体が無茶な動きに悲鳴を上げるが、凧は無視して両足をしっかりと地面につけ踏ん張る。

ジャックが驚いているのが見えた。

回転の勢いをそのままにダンを投げる。  
綺麗な軌道を描いて、ダンは深々とジャックの腹に突き刺さる。

「がはあ!？」

「ダンを返せ、この馬鹿がッ！」

ジャックの手前で跳び、ダンを掴んで両足を揃えて蹴りを繰り出す。  
所謂ドロップキックだ。  
いわゆる

しかしこれに圧倒的な速度の助走があればどうだろう。  
亜音速の助走の恩恵で、ジャックはへぷるばいやあと訳が分からない悲鳴をあげながら吹き飛んでいく。

風が膝がぐつと崩れそうになる。

さっきのダメージがここにきて影響を与えてきたのだ。

ジャックも立ち上がる。

しかしこちらは風と違って膝だけでなく今にも倒れそうなほどに全身がガクガクしている。

「もう、寝ちまえよ。………起きたら監獄だろっけぞ」

「そうはいかな。フフ、フフフ、ゴホッ。フウ、フウ………」

生憎とわたつしは閣下に任務成功の報をお知らせせねばならんのだ。こんなところで、捕まつてたまるか！」

ジャックは腹を抑えながら『クイック・ムーブ高速歩法』を使って、中庭から離れるために走り出す。

凧にはもう追うだけの余力がなかった。

ジャックは一度だけ振り返り、また会おうとだけ言ってそのまま去ってしまった。

凧はその場に仰向けに倒れこんだ。

「……………なあダン。俺、もっと強くなりてえよ。元の世界に帰る間でいい。それまで、後悔しないくらい、大切な人たちを護れるくらい強くなりたい」

「なら鍛えるしかねえよ。今よりも、もっとな」

そうだなと返す凧。

いつも見ている夜空は、不思議といつもより生き生きとして、輝いて見えた。

## 十七話『死闘』（後書き）

これで残りは瀕死の馬鹿と、ラーシャと残った『右の騎士』だけで  
すね。

正直『右の騎士』は期待しなくていいです。  
いつもの展開ですから。

注目していただきたいのはあの馬鹿です。

予想外の・・・ていうか、逃がした時点で分かりますよね。

それは次回を楽しんでもらうとしましょう。

それでは皆様、御機嫌よう!!

十八話『果たされた目的』（前書き）

今回も伏線（？）を投入です。

まあこれが私の平常運転ですし、止める気もないですが。

しかしあれですね。

なんか伏線張りすぎたら、またかよとか思われるかもしれませんが、それがいいんですが。

なんか途中で変になったかもしれませんが、ご覧あれ。

## 十八話 『果たされた目的』

ガラ城廊下

中庭でのジャックとの死闘を乗り越え一息ついていた凧は、まだ城内のどこかに居るであろうリディアを探すことにした。フラフラする体を平衡に保ちながら走る。

しばらく走る内に人影が見えた。

影に隠れて見えづらいが、女性のすらっとしたシルエットが見える。凧はそのシルエットの正体をリディアと思って近づく。

だがダンが急に叫ぶ。

「避ける相棒！ あれはお前の嬢ちゃんじゃねえぞ！」

「え？ ツツ！！」

シルエットが何か呟くと土の塊が飛んできた。それを床に転がって避ける凧。

後方で爆ぜる土の塊。

衝撃波が凧の総身を打つ。

凧が立ち上がると、シルエットがゆっくりとした動きで近づいてくる。

シルエットは月の光に照らされ、その正体を明かす。

すらっとした長身で、黄色のローブが目立つ妖艶な雰囲気のスレンダーな茶髪碧眼の美女であった。

その口元には嫣然とした笑みが浮かんでいる。

「あら、あれを避けるなんてなかなかじゃない」

「ありがとよ。ついでに通してくれるとありがたいんだが？」

「それは無理ね。だって肝心のターゲットを見つけても、護衛の騎士がいたら邪魔じゃない？ だったら先に弱ったアナタを倒した方が良いでしょう？」

「ま、一理あるな」

「………どうすんだよ、相棒。見た感じあの馬鹿よりは強くないが、それでも十分強いぜこの女は。言っちゃなんだが、今の相棒じゃあ勝ち目はねえと思うぜ？」

悔しいがダンの言つとおりであった。

ジャックとの戦いは凧の予想以上に体力を使わせた。

凧は今かるうじて走っているようなものだ。

その状態で、強者揃いの救世の使徒の魔法使いとの戦いなど出来る

はずがない。

凧はピンチであった。

初めてメリアと戦っていた時と同じくらいに。

凧は女との距離を取る。

じりじりと距離を取りながら、逃げる準備を始めていた。

何とか振り切れればいいが、それでも駄目だった場合は戦うしか方法は無いだろう。

そうなった場合、自分は勝てるのかと凧は思った。

逃げ切れるかどうかは分からないがやってみなければ分からないのだ。

やる価値は十二分にあるだろう。

ふと、上の階から何かの気配を感じた。

すわ新手かと身構えた凧だが、直後に二人の間の天井が爆発した。

瓦礫が降り注ぐ。

落下地点の周囲に砂煙が舞う。

同時に人の降りてくる気配がした。

凧は目を凝らして煙の奥を見つめた。

そして、その人物と目が合った時、凧の顔が綻んだ。

「ナギ、助けに来たわ・・・」

「メリア！ 来てくれたのか！」

「・・・・・・・・ナギは上から行って。ここは私が引き受ける」

「助かる！ 危なくなったら退くんだぞ！」

「うん」

瓦礫を蹴って上の階に跳ぶ風。

それを安心したという表情で見送ったメイア。

それから目の前で悔しそうにしている女の方に顔を向ける。

「……………獲物を逃がされて悔しい？」

「くっ、よくも……………閣下から聞いたわよ。我ら救世の使徒の一員でありながら、裏切った奴が居ると。よくもまあこのこと私たちの前に出てこれたわね」

「当然。貴方達程度じゃ、私には脅威足りえない……………まともな相手してほしいならあの人か参謀か、それかゴーゴンでも連れてこないと無理」

「ぐぐ、かつては四番目に居たくせに」

「所詮、過去は過去。今の私は、アフラス・ステア四番星じゃない」

そう吐き捨てるように言い、爆発の剣を作り出す。

その目には強い意志が宿っている。

彼女は凧やライルたちとの交流を持って知ったのだ。

世界はまだまだ捨てたものではないと。

だからこそ計画のおおまかな概要を知っているメイアは彼らとは相容れないだろう。

窮地に陥った凧を助け、女に剣を向けているのがその証拠だ。

女は敵意を隠そうともせず、メイアに食って掛かる。

「アナタ正気！？ 私たちに剣を向けても、潰されるだけってのが分からないの！？」

「それを決めるのは貴方じゃなく私。それに本当に強い人は、心が折れない人だと私は知った。ナギが、そう教えてくれた」

「そう、なら危険分子であるアナタはここで始末するわ」

言葉と同時に影から短い槍を取り出し、先端をメイアに向け駆け出した。

その顔は怒りと蔑みと憎しみが浮かんでいた。

対するメイアは爆発の剣を発動したままぶらりとした格好でいる。

その顔には何も浮かんでいない。



彼女の小さな口から朗々と詠唱が流れる。

「落ちよ稲妻、白斑しんぱんの閃光せんこうを刻め、『裁きの雷光』」

巨大な一本の稲妻が、落下した女めがけて落ちた。雷が木に落下したような爆音が轟いた。

大魔法を行使した影響で城が揺れたがメイアは気にせず尻の後を追うことにした。

その顔にはどこかまともな生き方を見失った女への憐憫があった。

## ガラ城裏門

静寂が支配していた裏門はいましたがた現れた人物によって壊されていた。

「ネリス！ 大丈夫だったの!？」

「あら、リイちゃんも無事だったようですわね。その様子からすると……あの騎士様が頑張ってるのですか？」

「うん。ナギは今頑張ってくれてるんだよ」

すでに戦闘は終了し、当の凧は三人のところを目指しているのだが、今のところはそれを知るすべはないだろう。

ネリスが意地悪そうな表情をしてリディアに近づいてくる。

そして小声で話しかけてきた。

「……ならリイちゃん。貴女からあの騎士様に、手ずからのご褒美を差し上げたらどうですか？」

「うっ、うっご褒美!？」

「そうですね。例えば(ゴニヨゴニヨ)とか、(ボソッ)とかどうでしょう?」

「あわわわわ、そんな、そんなの出来ないよ」

ネリスは頭を抱えた。

この幼馴染みの親友は昔からこうだったのだ。

生来の奥手が故に、サプライズなことを考えたり実行したりするのが大の苦手だったのだ。

しかも相手は（リディアが誰にも気づかれていないと思っている）  
意中の相手の風だ。

この奥手少女が、そんな相手にサプライズを仕掛けようなど出来る  
のかと聞かれれば、すかさずネリスはノーと言うだろう。

しかし親友であるからこそ彼女は奥手な親友に手を貸そうというの  
だ。

「あー、じゃあ、貴女の得意な事って何かないかしら？」

「ええと編み物でしょ、あとは料理に掃除洗濯と、えとお菓子作り  
かな！」

「リイちゃん、貴女本当に王族ですか？　どこの世界に家事が万  
能な王女が居ると、あぁここに居ましたわね」

「ひどいよネリス。私にも他に得意な事だつてあるもん！」

「へえなら言つてご覧なさいな」

言われてリディアは考え出す。

しかし次第に頭を抱えて、ううんとかあれ、おかしいなとか唸りだ  
した。

その様子をネリスは勝ち誇った笑みで見ている。

「あら、どういたしましたの？　もしかして他には何もいないなんて仰いせんわよね？」

「うぐつ！　ネリ……って……あるもん」

「え？　今なんと仰いました？」

「ネリスと違って胸あるもん」

赤面する二人。

リディアは羞恥で赤面しているのだが、ネリスは違うようだ。

「どうやら昨年会った時よりも変わったリディア（の胸回り）」と比べないようにしていたのだが、当人によって言及されてしまった。つまり何故黙っていたのにわざわざこのタイミングで言うのかと怒ったのだ。

「リイちゃん。それは私に対する宣戦布告と受け取ってもよろしいですか？」

「う、女に二言はないもん！」

「それは男性ではなかったかしら？　まあいいですわ、精々必死になってあの騎士様をその胸で誘惑なさったらどうですか？」

「ネリスの意地悪」

「先に仕掛けたのは貴女というのを忘れなく」

うぐうと呻くりディア。

この親友は口が強いのだ。暖簾に腕押しじゃなくて、鉄を素手で殴った時くらい強く返ってくるのだ。

しかも小さく呟いても聞き咎めるほどの地獄耳でもある。

そこに、ある意味で一番来てほしくなかった人物が現れた。そう、凧だ。

「あつ、皆無事だったんだな！」

「やあ、どうやら君はあまり無事でもなさそうだけどね？」

「あー、まあな」

「どうしよネリス。あんな話したあとにナギと顔なんて合わせられないよ！」

「いいではありませんか。何を怯む必要があるんです」

「ネリスは凶太いからそんなことが出来るんだよ。普通の繊細な女の子なら無理だと思うけど」

「……後で覚えてらっしゃい」



見える）彼女を見て目を白黒させて困惑している。

「ダメダメダメダメダメダメダメ、絶対にダメ！！ ナギは私だけの騎士なんだから、持っていくなんて絶対にダメ！！」

「あら、それなんだったらいくらかお金渡しますわよ？」

「そんな問題じゃないの！ とにかくナギを連れていくなんてネリスでも許さないからね！」

「ふふっ、正直になればよろしいのに。私は騎士様がすムグ」

急いでネリスの口を塞ぐリディア。

視線がなにをすると訴えているがとりあえず黙殺することにした。口で負かされた仕返しではない。断じて。

リディアは視線で余計なことは言うなよと言い（？）聞かせた後、凧のもとへと歩いていく。

その脅迫といえるよう行動を見ていた二人は顔が引き攣っていた。

「ナギ、おかえり」

「お、おう、ただいま。……そうだ。これだけは言っておくよ」



「アインス。どこに行ってたんだ？」

「ちよつとそこらをぶらぶらと、な」

「まあいいか。……にしても疲れたぜ。あいつむっちゃ強かったからな」

「なんでえよく見たら傷だらけじゃねえか。嬢ちゃんこいつを治してやれよ」

「はいはい」

凧を治癒するためにリディアが近づいてくる。

それにライルが、アインスが、ネリスがぞくぞくと集まってくる。

だが　凧はどうしようもない焦燥感に駆られた。

このままではいけない。何かを見落としている。

そんな感覚に陥った。

周りをきよるきよると見回す凧に何かを感じたのか、同じように周りを見るアインス。

突然の行動に他の三人はついていけないようだ。

「一体どうしたんだい？　何かあると言うのかい？」

「何か……言いようのない感覚がするんだ。このままじゃ、いけない。……なんつうか、そんな感覚が」

「でもよ何にもねえぞ」

「それは分かってる。あるいは上手く隠れてるかもしれない。とにかくここに居てちゃ駄目だ」

額をつき合わせて悩む二人に三人は首を傾げるばかりだ。

そこにメイアが歩いてきた。

どうやら初めからここに居ることは分かっていたらしい。

全員の視線がメイアを突き刺す。

そう、今彼らの背後には隙が出来た。

メイアが驚いている。

誰もその理由に気づかない。

否、一人の意識は途絶えた。

そこでようやくメイアは声を絞り出す。

「後ろ・・・！」

「え？ なっ、ネリス!？」

「いつの間に・・・。」

「高度な気配隠蔽術だな」

「てめえ・・・。またぶちのめされてえか！」

彼らの視線の先にはネリスを肩に担いだぼろぼろの男がいた。  
ジャックだ。

彼はシニカルな笑みを浮かべながらじりじりと下がる。

凧はダンを握り締めジャックに肉薄しようとするが、アインズに手で制される。

「なんで止めるんだ！」

「落ち着け、わざわざ公女を人質にするんだ。そこには何らかの意図があるんだろう。それに連中は無意味なこととはしないと俺はふんではいる。つまり連中はどうしても公女を手中に収めたいのだろう。

あいつらの目的のためにも、そう簡単に公女を殺しはしないはずだ。……だから公女が殺される前に。俺達で助け出すんだ。それまでは我慢しろ。下手なことをすると、例の『醜い傀儡師』<sup>ナラールカー</sup>が介入してくる。そうだろ、ライル？」

「そこで何故僕にふるのか分からないが、その案には僕も賛成かな。向こうは手負いだがかっちも手負いだ。なにより魔力の消費が著しいからさ」

「ふん、もう相談は終わりでいいな。……ナギ、貴様と次に会った時こそが貴様の命の最期だ。わたっしの顔を忘れるな」

「当たり前だ」

ジャックの姿が一瞬で消えた。

『高速歩法』と魔力強化を同時に行使したのだろう。

凧は拳を思い切り地面に叩きつける。

血が溢れるのも構わずに何度も叩きつける。

そっと肩に手が置かれた。

「ナギ、それ以上やったら手が……」

「いいんだよ、これは俺のせいなんだ。俺があの時止めをさしてたら、ネリスは連れて行かれるなんてことはなかったんだ。……  
・俺の、俺のせいです！」

「ナギ……」

「ああ嬢ちゃんは下がってる。これは同じ男だからこそ解決法が分かるってもんよ」

アインスはリディアを押しつけて凧に近づく。

右手が強く握られている。

その拳を思い切り振りかぶる。

リディアが止めようとしたが、時すでに遅かった。

バキッという音が静かな裏門にこだました。

凧ははじめ呆然としていたが、やがて殴られたと気づいてアインスを睨みつける。

「アインス、何しやがる！」

「ああん？ んなもん簡単だよ。てめえがつけあがったこと言うてうだうだしてやがるから、そのお仕置きだ」

「俺がいつ、つけあがったって言うんだ！」

「今だよ、今」

「何だと!？」

「今のお前を見りゃ誰だつてそういう。誰かを護れなかったからって嘆くのは構わねえよ。だがそれで起こすべき行動を起こさずに、ただ腑抜けてるのはどうしようもなくナンセンスだつっつんだよ。いいか？ お前は伝説の英雄なんて大層なタマじゃねえ。いいか、お前はナギだ。ただ強いチカラを持った前まではただの一般人だったそこの通行人Aだったやつだ。そんな奴がいきなり人を護れなかったただのあいつを殺してればだの、はつきり言つて笑いものにするならねえな。いいか。お前は小せえ存在だ。んなことも分からなねえ脳無しだ。でもなお前にはチカラが有るんだろ？ここにきて、変わったんだろ？だつたらまた変われ。お前が大切だと思う人を、今度こそ護れるように………変われ、ナギ」

「………分かった」

私も変わりたい

「リディア？ 何か言ったか？」

「え？ 何にも言っていないけど」

あれ今の何だったんだと思いながら、凧は決意を固めた。

今度こそ大切な人を護りきるために。

この手から零れ落とさないために。

変わることを恐れず、一步を踏み出す事にした。

この心理状態から一步踏み出すという簡単なことがどれほど難しいか、計り知れないだろう。

凧は良き師に出会えたことに感謝した。

彼が居なければ、自分はいつまで沈んだままだっただろうか。

他の皆も見えてくれた。

感謝してもしつくせないほどの感謝だ。

凧は立ち上がる。

先ほどの弱弱しさは感じられない。

未来に向けて力強く歩き出そうという姿が、そこに在った。

「ありがとう皆。うだうだしてても仕方ねえよな。………必ず助け出そう、ネリスを」

「そうこなくっちゃね。そうじゃなければ君じゃない」

「……私も手助けする」

「世話の焼ける弟子だな、お前はよ」

「私も手伝うよ。ううん、私も頑張る！」

こうして彼らは再び立ち上がった。

ネリスを目の前で浚われたという出来事を風は忘れないだろう。そのことで彼は傷ついた。

しかし師の叱咤によって彼はより強くなって立ち上がった。より強く固い結束を手に入れた。

シユライト大公国。

ここが風が生まれ変わった地であった。

アンスタイン某所

全体的に石で造られた円卓が設置されている広間。

普段は陰湿な雰囲気しかないその広間は、いまはジャックを褒め称える声で満たされていた。

「よくやったジャック」

「ありがたきお言葉にございます閣下」

「よい。そなたの今回の功績は私なその言葉では足りぬだろう」

「いえわたつしは閣下のお言葉で十分でございますれば、褒賞など必要ありません」

「そう言うな。……ふむ、よし。ならばそなたには穴となつていた『アフラス・ステア四番星』の位を賜わそうではないか」

「！ ありがたき幸せでございます」

ダレイクスは広間に集まった全員に背を向ける。  
その顔に微笑を浮かべる。

『闇の神子』は手中に収めた。

ならばこれから『聖の神子』も、と言いたいがこちらには既に外に出せる手練れはおらぬか。

しかしそれも仕方ないか。

計画コード『アンスタイン導かれた世界』。

……彼女をここに招待し全ての準備が整えば、世界の救済は成し遂げられたも同然だな。

それまではこの俗世を楽しむのも一興か。

世界は緩やかに変わるうとしていた。

緩やかに。

哀しき運命を背負った、背負わされてしまった一人の男の手  
にゆつて。

## 十八話『果たされた目的』（後書き）

次回からは、ちょっと救世の使徒から抜けて旅行編です。なぜこのタイミングと思われるかもしれませんが、色々必要なんです。

郷愁の念が溢れてきた風にとって大事なターニングポイントなんです。

あと奴も来るんです。

あいつが出るから一応は救世の使徒は完全には外れてませんね。そう言えば捕まってる二人、空気になっちゃったな。

協力的なメイアが居てるからあの二人は必要ないんですよー。どっかで見せ場作るかな。

さて次回も読んでいただいでる読者様にあつと言ってもらえるのを書きますかね。

では皆様、御機嫌よう！

十九話『新たな一幕への当選』（前書き）

すみません、リアルが忙しかったので遅れました。  
前置きはこれくらいにして、本編をどうぞ。

## 十九話『新たな一幕への当選』

レッサー王立魔法学院、リディアの私室

夏休みが終わるまであと数日。

リディアは窓から朝日が漏れているのをぼんやりとした目で見ながら起床した。

あくびを噛み殺しながらゆっくりと上体を起こす。

隣に風はない。

彼女が起きる一時間ほど前から第二練兵場でいつもの四人で模擬戦でもしているのだろう。

そのことを考える度に彼女は、自分の無力さに苛まれる。

私は何をやっているのだろうか？

私はなぜ戦えないのか？

私はどうして勇気を振り絞って戦おうとしないのだろうか？

かつて変わろうとした。

かつて変わりたいと決意し、どうするかも沢山考えた。

なのに答えは出なかった。

自分でも分かっているのだ。

自分が戦いに向かない性格をしていると。

だからつい先日のガラ襲撃の時には風だけに戦わせ、彼女はのうのと逃げ回っていた。

それが自分でも許せない。

変わりたい。でも何も出来ない。  
そんなジレンマが、彼女の思考を埋め尽くしていた。

## 魔法学院食堂

魔法学院の食堂は夏休みの間も開いている。

諸々の事情があつて実家に帰らない者。

仕事があつて残らざるをえない教員。

そもそも学院に住んでいる学院長。

そんな面々がいまだに学院に残っているため、食堂は閉める訳には  
いかないのだ。

その食堂に五人の人影がある。

尻をはじめとしたいつもの顔ぶれだ。

「やっぱり運動後の食事は最高だな！」

「その意見は理解が出来ないよ、相変わらずね」

「成長期なんだからしっかり食えよ。じゃねえと俺みてえなガタイ  
がいいダンディなおっさんにはなれねえぞ？」

「いやそれはお断り」

「右に同じ」

「おう……マジかよ」

男組はやいやいと騒ぎながら飯に食らいついている。  
どこでも騒げる太い神経は、女子には理解出来ないだろう。

対する女組はのんびりとその様子を見ながらさくさくとシルバーを動かしていた。  
彼女らの視線は一人にしか向いていないのだが、それはごく愛嬌だろう。

「よく朝からあんなに食べられるよね。私なんて軽食でもおなか膨れるのに」

「貴方は少食すぎ」

「……メイアちゃんのおなかの中が見てみたいな」

「これはっ、戦場ではろくに食べられなかったから、その反動とか、その……」

「別にそんなの聞いてないんだけど」

あははと乾いた笑みを浮かべたりディアの言葉に、赤面するメイア。彼女はあまり表情筋を動かさないため、顔色が変わるのはけっこう珍しかったりする。

和気藹々とした雰囲気ですり込んでいた彼らだが、そのうちに話題は先日のシュライト大公国での襲撃へと移っていった。

「……しっかし、あん時は投入されてた人数が増えてたな」

「今までは二人だったのに、あそこでは四人来てたな」

「そうだね。しかもこっちは絶対的に情報が少ないから、少しでも彼らについての情報が欲しいんだけどもどうなんだい、メイア？何か有益な情報とかは無いかい？」

「残念だけど、まだ呪印は解除しきれていないわ」

「はあー。その呪印ってのは全員に使われているのか？」

「そうよ。ただ例外として参謀である r g r d には使われていないわ」

「え？ 今なんて言ったんだ？」

メイアの説明の中に不協和音ノイースが混ざった。  
それこそが呪印の効力なのだろう。

解除できてきているらしいが、どうにもこの調子だと完全な解除は  
当分先なのだろう。

「……なあみんな。俺達はその時どうすりゃあよかっただろうな」

凧が言ったあの時とはネリスが連れ去られた時のことだ。

あの時、凧が『加速』によって自身への負担を省みない音速突破の  
突撃を行っていたら、瀕死の様相を呈していたジャックからネリス  
を奪還出来たやもしれないだろう。

だがそれは可能性の域を出なかった。

いかに瀕死であったとはいえ、メイアが言う『あの人』が見初めた  
強者だ。

そう簡単に奪還させてくれただろうか。

答えは否だろう。

人は追い詰められると何をしでかすか分からないものだ。

これもメイアが言っていたことだが、どうやらこの作戦は彼女が、  
あるいはリディアを確保するための作戦であったようだ。

そして条件は命さえあれば無問題とも言い含められていたらしい。  
下手をすればあの時ネリスは一生ものの傷を負っていたかもしれない。  
い。

それを防いだのは凧の横で飄々としているアインスだ。

やはり人生経験が豊富なだけあって、即座にその場における最も妥

当な答えを導き出した。

彼は自分達の力でネリスを救出することを選択したのだ。

幸いにも救世の使徒のほぼ全てを知っているメィアがいる。

彼女の呪印さえ解ければ、あとは彼らの本拠地に乗り込むだけである。

凧が立ち上がる。

その手には空になった食器があつた。

ライルが、アインスが、続々と立ち上がる。

慌ててリディアもシルバーを動かす。

「さて、腹ごなしといくかあ？」

「良いよ、じゃあ表に行こうか」

「おっさんはパスな。これから趣味の時間だからよ。せいぜい頑張れよ」

アインスは後ろ手に手を振って歩いていく。

二人は気にした風もなく、談笑しながら第二練兵場へと歩いていった。

二人が出ていったあと、漸くりディアは完食した。

「……遅い」

「皆が早いんだよ。私だって頑張って早く食べてるんだよ？」

「でも遅い」

「うう、いじわる」

言いながらリディアは食器を持って立ち上がる。

メイアはすでに返却済みだ。

リディアは、旅行券の応募当たってるかなと思いつつ、メイアと連れ立って自室へと歩いていった。

## 第二練兵場

十数分に及ぶ模擬戦は、久しぶりに決着がついた。  
勝者は凧だった。

二人は並んで大の字になって練兵場の芝生に寝転んでいる。  
ライルが凧に話しかける。

「久しぶりに負けたね。最近は決着がつかずに引き分けてパターンが多かったから、今回のこれは君が強くなったってことでいいのかな」

「さあな……でも、お前も強くなったのは確かだろ」

「そう思いたいね……そういえばナギ。君、髪の毛が半分くらい白くなってきたるね」

「そうだな。それと関係してるかどうか分かんねえけど、本当の事言ってるのか分かるようになってんだよな、最近さ」

「本当の事？　つまり、嘘ついてるか分かるってことかい？」

「たぶんそうなんだと思ってるけど、」

そこで一旦言葉を区切る。

そして懐かしいものを思い出しているような声色で続ける。

「元あっちの世界に居てた時に感じてた感覚なんだ、これはさ」

「……そうなんだ……ナギ、これは私見なんだが、それはもしかしたら『保有能力』なんじゃないかと思うんだけど、どうだろうか？」

「ああうん。確かに俺もそうかなとは思っけどさ」

「まあそれについては我らがお師匠様に聞けばいいさ」

「そうさな……よし、そろそろ戻るか」

「そうしようか」

体を伸ばしながら起き上がる二人。

全身をほぐしながら立ち上がり、寮の方に帰ろうとしたところに「  
ちらに歩いてくる人影を見つけた。

リディアだ。

その手には一枚の紙があった。

二人はなぜだか、また厄介ごとに巻き込まれそうな予感がした。  
具体的には言えないが、なにか嫌な予感がする。

そんな二人の心配はよそに、彼女はにっこり笑顔で駆け寄ってくる。

「二人とも！ 団体の温泉旅行が当選したよ！」

ああさっきの予感はいかかかと頭を抱えながら頷く二人。  
また何かあるんだろうかと、そう思わずにはいらなかった。

アンスタイン某所

石造りの広間。

そこには二つの人影があつた。  
救世の使徒の、一番と二番だ。

「閣下？ どこかに出られるのですか？」

「うむ。『ガラクタの溜まり場』には、久しく足を運んでいなかったのにな……」

「以前に、閣下が仰っていた場所ですね」

「そうだ。今年中は……いや、計画が成就するまではもう行けぬだろう。時間が空いた今こそが、最後の息抜きとなる……お前もほどほどに羽を伸ばすといい。この僅かな空白の時間を有効に使えよ」

「そうしますよ……閣下は故郷に戻られるのですね？」

「ああ。あそこの温泉は私の全てを癒してくれる……帝国温泉、ワナキヤ。全てが終われば、お前も行くといい。あそこは、実に素晴らしい」

「……その時は、閣下も共におられるのでしょうか？」

ダレイクスはその問いに即答した。

勿論だ、と。

リグルドはその答えに満足したのか、ふっと笑った。

ダレイクスはさっと広間から出て行った。

リグルドは出口をぼんやりと見ながらそのまま立ち尽くしていた。  
自身の意思に関係なく口が動く。

「……この計画は貴方が死す事がほぼ前提だというのに、どうしてそんなことを仰るのでしょうか……しかし、あれほどの器量のお方だからこそ、私は、いや私たちは貴方に惹かれたのかもしれないね」

眩きは無人の広間にこだました。

十九話『新たな一幕への当選』（後書き）

次回は出来れば明日に投稿したいです。

……出来ればですが。

二十話『帝国温泉ワナキヤ』（前書き）

連日投稿です。

宣言通りいけました。

今回はサブタイがあれなので、温泉イベントです。  
ただ一っただけ言っておきます。

絶望しろ、（男性）読者よ！！

## 二十話『帝国温泉ワナキヤ』

グランソ帝国、温泉街　ワサウル　の旅館

グランソ帝国は古来よりの歴史を持ち、グライデア大陸一の軍事力を持つ大国だ。

かつてアンスタインが出来る直接の要因ともなった『創世の戦い』からわずか数十年後に建国された最初期の国でもある。

そんなグランソ帝国の注目すべき点は軍事力がまず挙げられるが、そのほかには何があるかと言えば、それは国内に多くある温泉だ。グランソ帝国は火山が多いため、近辺には複数の温泉街が作られるほどに温泉が多い。

数ある温泉街の内の一つである、ここ　ワサウル　も季節を選ばず利用客でこったがえしている。

ワサウル　の中央に位置している旅館に凧たち一行は居た。

「いやー毎度毎度お嬢ちゃん達の運の良さには驚かせられるな」

「私もびっくりしちゃうよ。いつつもこういうのは当たり前とか引くんだよね」

「……ある意味では呪いみたいだな」

「えー、ひどいよ」

「ははは、冗談だよ」

談笑する二人を見て、メイアはなんだかもやもやしてきた。どうにも落ち着かないので尻に近づこうとするが、ライルに止められた。

彼に非難めいた視線を送るが、そしらぬ顔で流された。

「メイア。あの二人の間に入っていけるかい？」

「え？」

「僕が言うのはなんだか変だけど、君にはあの間に割ってはいる自信はあるかい？」

「……あんまりない」

「何故だか僕には、いや君にもあの二人はあれで完成されていると感じるだろう？」

メイアは首肯する。

素直に認めたということとは、どうやら分かっていたらしい。しかし、それでも、彼女は気づいてないふりをしていた。

それほどに彼女の中での風は、大きく心の中に存在していたようだ。その様子を見て微笑んだライルは、前でやいのやいのと騒いでる三人に話しかける。

「早速だけど、温泉に入りに行かないかい？」

「お、今日はお前が仕切る日か？」

「似合ってねえぜ」

「君たちがいつまでも話し込んでいるからだろう。早く湯に浸かりたいね」

「そうだな、さっさと行こうぜ」

まずは必要な荷物を部屋に置くために、一行は充てられた部屋に向かうことにした。

ワサウル温泉街近辺の温泉ワナキヤ、男湯

「おおー。こいつあなかなかのもんだな」

「デカイなあ。これだけデケエと泳げるんじゃね、これ？」

「いいなそれ。いつぺんやるか？」

風の言ったことに、にやつと笑いながら同意するアインス。

二人のマナー完全無視な考えにライルはこめかみを指で押さえながら諫める。

「そんなことしたら他の客に迷惑だろう。君たちはそんなことも分からないのか」

「へ、一昔前のお前なら、市民如きが僕と同じ湯に浸かるなどか言っただけだな」

「確かにな」

「あ、あの頃のこととはもう忘れてくれ！」

昔のやんちゃしてた頃を思い出したのか、顔を赤くして反論するライル。

アインスはこのまま弄るのも悪くないが、正直飽きたと感じて別方

向で弄ることにした。  
ちょうど視線が下の方向で固定された。

「ライル。お前のん、小えちっせなあ」

「な!?! だったらナギのは!」

「残念ながらこいつのはでかいぞ」

「言つとくが、俺のは俺が居た学校では上位に食い込むほどのデカさだぜ」

「そんな……馬鹿な……」

この世の終わりを見たかのような顔をしているライルだが、風が助け舟を出す。

「まあ、気にする必要はねえよ。上には上が居るって言うが、下にも下が居るもんだ。だろ?」

「そうか。つまり僕は敗北者じゃない!」

「いや、お前がこの中で一番小さいのは変えようのない事実だけだな」「

「くっそおおおおおおおおおおお！」

ライルが心底悔しそうな表情で叫んだ。

先ほどの絶望感は漂っていないが、代わりに哀れさを誘うものが浮かんでいた。

同じ男が見たならば、「まあ、元気出せよ」と言ってしまうかもしれないほどの、それほどの哀愁が浮かんでいた。

叫び声を聞いてか知らないが、一人の男性が近寄ってきた。

ここは男湯なので、わざわざ男性と表記するのはくどいかもしれないが。

男は穏やかな顔で、三人に話しかける。

「随分と楽しんでおられるようですね」

「え？ は、はあ」

「急に話しかけてすみません。なにぶん、ここには良く来ますので楽しんでおられる方を見るのは、私の趣味でもあるのですよ」

「いえいえ。我々も、些かマナーというものが欠けていたようです。ご親切にしてくださいまして、感謝します」

「いいえ……こうやってお話したのも何かの縁ですし、良い所を紹

「介しましょうか？」

「良い所ですか。では是非、お願いしてもいいでしょうか」

「構いませんよ」

アインズと男性から離れた場所で、凧とライルはひそひそと何事か話していた。

一部を抜粋すると、「アインズってまともに話せるんだな」とか、「確かにアインズは無礼さが否めないけど、一応教員なんだよ？」とか、「そっぴい教師っての忘れてたな」など本人が聞いたら確実にキレルようなことばかり言っていた。

幸いな事と言えば、それは彼が聞いていなかったという一点につきるだろう。

そんな馬鹿弟子の会話など露知らず、まだ彼は見知らぬ男性と話していた。

「へえ、そこは『ガラクタの溜まり場』というのですか」

「といっても、私くらいしかそう呼んでいませんがね。かの場所はまだあまり知られていませんし、仮に知っていたとしても誰も信じない場所ですよ……何せそこは山奥ですから誰も行くこととしないから、はや噂の一つにしかなくなっていません」

「……なら何故あなたは知ってるんです？」

男性は、まだ壮年のように見えるのだが、昔を懐かしむ老人の顔を  
していた。

それと同時に思い出したくないものを思い出してるような表情でも  
あった。

「昔、あそこらへんを歩き回ってましてね。その時たまたま『ガラ  
クタの溜まり場』を見つけたのですよ」

「なるほど。ということは行くとなれば時間がかかるのではないで  
すか？」

「いえそんなことはないですよ。私が見つけた独自のルートがあり  
まして、そこを通ればもの一時間で着きますよ」

「山奥なのに一時間ですか。それはまた随分と近道できますね」

「ええ。今はやることがあるのですが、それが終わればここで観光  
ツアーでも開くのもアリかと思っっているんですよ」

アインスは笑って、それもいいですねと返した。

男性も笑って返事をした。

会話が終わって男性はところどころ白髪が混ざっている少年を見つ

けた。

彼はその少年に近づく。

「どうしたんだい？」

「え？ あ、ああいや何でもありません」

その少年とは凧であった。  
彼の傍らにはライルもいる。

男性はいたずらっ子のような表情で凧とライルになにかを呟いた。  
それを聞いた二人は、急いで女湯との間仕切りに近づいていった。  
アインスが不思議そうな顔をして男性に寄ってきた。

「あいつらに何言っただんです？」

「ふふ、あの間仕切りには小さい穴が空いてるんです。その場所を  
教えてあげただけですよ」

「……あなたはそんな人には見えませんがね」

「私は自分が堅物だと言った覚えはありませんよ」

「確かにそうだ」

はははと笑い合う二人。

この男性は、彼が思っていた以上に愉快な人物だったようだ。

一方の凧とライルはというと、見事に言われた穴を見つけ出した。

二人は小声で喜んだ。

だがここで問題が発生した。

どちらが先に見るか、だ。

さしもの二人でもこれは譲れなかった。

見られる方としては覗きの順番を決めるなど言語道断といった感じなのだろうが。

「おい、ここは俺に譲れよ」

「何を言ってる、ここは僕だろう」

「……じゃあじゃんけんだ」

「じゃんけん？ それはなんなんだい？」

ライルはなんだそれと言わんばかりにきょとんとしている。  
それを見て、凧は頭を抱えた。

「じゃんけんの文化がないのか、ここは？　なら今までの勝敗で決めようぜ」

「いいだろう……ええと、確か……あー、十二勝十二敗百十二分だから、どうなるんだろう？」

「お前、最初のをあれ入れてないだろう」

「あ、あれはナシだろう！？」

「ばーか、もろアリだ」

「うぐぐ。い、いいだろう！　君に先行を譲ってやる！！」

「へーいへい、どうも」

早速覗き込もうと、穴に顔を近づける。隣のライルが悔しそうな顔をしているのが分かる。

鼻血、準備よし。

脳内保存、準備よし。

葉月凧、行きまーす！

脳内でコントを繰り広げ、いざ穴の向こうへと意識を向けようとした瞬間。

脳天に木製のものが直撃した。

しかし当事者の風には何が当たったかも理解出来ないまま、意識が闇に沈んだ。

意識が途切れる寸前、彼は思った。

そういえば、こんな前にも有ったような気がする。

そう思いながら、彼は白く濁った湯に崩れ落ちた。



二十一話『ガラクタの溜まり場』（前書き）

すみません。

ちよつと友人らとデュエツしてたもので、遅れました。

今回は一人のワツフル勇者さんが現れたので、とりあえず女湯の描写追加です。

最近はやガグ展開だったので、今回のラストと次回からはシリアスです。

たぶん。

## 二十一話『ガラクタの溜まり場』

温泉施設ワナキヤ、ロビー

帝国温泉でもっとも有名なのは、ここワナキヤだ。

浴場が広く様々な種類の湯があるというのも一つの理由だが、他にも理由がある。

それは立派な造りと、広大で緑豊かな庭園だ。

その庭園はほぼ毎日、近隣住民が散歩に訪れたりするほどの美しさだ。

初見の観光客ならば、その美しさに見惚れるのはいわずもがな、と言ったところだ。

その庭園を二階のロビーからリディアが見下ろしていた。

つい先ほど湯に浸かってきた彼女の長く蒼い髪は、しっとり濡れて上品ながらも艶やかな美しさをかもし出していた。

彼女は庭園に向けていた視線を後ろに向けた。

その先には、頭に大きなたんこぶを作ってソファに寝転んでいる風がいた。

正確に言うのなら風は寝ているのではなく、メイアによって意識を刈り取られたため気絶していると言った方が正しい。

リディアはつい頬を赤く染めた。

彼女が風を好いているとはいえ、別に彼の寝顔にときめいた訳ではない。

正直に言うと彼女は風の寝顔なんてほとんど毎日見ている。

同じベッドで寝ているのだから（性的な意味ではない）。

では何故か。

それを説明するためには少々時間を遡る。

ワナキヤ、女湯

「わー、広いねー」

「うん」

リディアとメリアは、浴場の広さに嘆息した。

いつも彼女達が使っている学院の浴場よりもはるかに大きいからだ。しかも何らかのハーブが使われているのか、ほのかに心地よい香りが彼女達の体を満たす。

ちなみにリディアは宮殿内では一度も大浴場を使ったことがない。風呂に入る際はいつも自室に備え付けられていた個人用の風呂を使っていた。

二人は、流石は有名な温泉と満足しながら、まずは体を洗うことにした。

高級な品を思わせる木の桶を持って同質の椅子に座る。

「なんかこの桶も椅子もすごく高級っぽいね」

「そう？ 私の家の風呂はこんな感じだったけど」

「え？ メイアちゃんってブルジョワ？」

「違う。そこらへんの木を薙ぎ倒して造ったログハウス。今は放置してるけど」

「へ、へえ。そうなんだ」

リディアは顔を引き攣らせた。

それはもう盛大に。

メイアは中々の美少女だ。

自分もまあそれなりに良い方とは思っている彼女だが、それでも彼女は同性でも羨むほどに女性として最高級のスペックだ。

髪は手入れなどしなくてもサラサラで、肌はキメ細かく、胸は……  
良く言えばほどよく膨らんでいるため、それが全体のシルエットを昇華させている。

そんな彼女が、あの爆発の剣でばったばったと木を薙ぎ倒しているのだ。

それはもはやシユールという言葉以外に形容のしようがないものだ。

とりあえずリディアはそこから話を逸らそうとして、メイアに話しかけようとしたが彼女の尋常ならざる形相にひいた。彼女の目はリディアの胸元、もっと言うならおっぱいを凝視していた（性的な意味ではない）。その圧力に自身の胸元を隠しながら身を引く。

浴場にタオルを持って入るのはマナー違反だ。

よって彼女は何も持っていない。

そして彼女は胸元を腕で隠している。

つまり？

つまり彼女の綺麗な形の大きく育った母性の塊　　すなわちおっぱいがぐにやりと潰れた（性的な意味で）。

常日頃からリディアはメイアに、何故そんなに大きいのか、年は変わらないのとか言われていたため、これはやっちゃったと直感した。

そしてそれは間違いではなかった。

それを見るやいなや、メイアはゆらりと立ち上がる。

今の彼女が纏う雰囲気は百戦錬磨の戦士でも裸足で逃げ出すほどに恐ろしかった。

とりあえずリディアは気を逸らすために、ちょっとメイアちゃん！見えちゃ駄目なトコが見えてるよ！　　と言っではみたが効果はなく、そのまま彼女は跳びかかってきた。

もう終わった！　　と感じたりディアだったが、不意にメイアの動きが止まった。

そしておもむろに近くにあった木の桶を手に取り、そして間仕切り

の上らへんすれすれに向けてぶん投げた。  
綺麗な軌跡を描いて、間仕切りの向こう側に沿うように桶は落下する。

スコオオーンと小気味良い音が響いた。

どうやら間仕切りのすぐ近くに誰かいたようだ。

誰かなと思ったりディアだったが、その正体はすぐに分かった。  
何故なら聞きなれた声でナギイイー！ と叫ぶ少年の声を聞いたからだった。

ワナキヤ、ロビー

「うう〜。思い出したら顔が真っ赤になっちゃった」

どうして男の子ってああいうことするかなと口の中でもぐもぐさせ  
ていたリディアだったが、ソファで寝ている風がううんと唸りなが  
ら身じろぎしたので、彼の前まで歩み寄っていく。

「ううん、ん？ おはようリディア」

「おはよう、じゃないよ。今、お昼。それとナギ？ 私は今、謝罪の言葉が聞きたいんだけど？」

「え、謝罪？ 何のことって、あああああああ！！！」

自分が覗きをやったことを思い出したのか、猛烈に叫びだす。そんな彼に対して、私怒ってますと体でアピールする（性的な意味ではない）リディアだが、軽く錯乱している彼にスルーされた。

凧が落ち着いた頃には、彼女はなんだかとても煤けていた。

結局凧は覗きしたこと、彼女を無視したことについて、三十分ほど謝り続けた。

温泉街ワサウルの旅館、玄関前

歴史を感じさせる古い外観の旅館の前には凧達一行と、良い場所があると誘ってきた例の壮年の男性が居た。これから山奥へ行くというのが分かっているので、全員が動きやすいラフな格好になっている。

「皆さんの傘に不備はありませんね」

ただどこにでも例外はあるようで、若干一名ほど格好がおかしいのが居た。

案内してくれるという男性だ。

彼は、何故か頭に鹿のかぶり物を乗せ、妙に薄い生地シャツを数枚重ねて着ている。

それ以外は普通のラフな格好なのだが。

しかし何故か傘を腰に挿している。

さらにそれと似たような傘を全員に渡している。

もちろんその格好に全員が唖然としている。

(ツッコミ属性として) 耐えられなかったのか、ライルがつっこむ。

「ちよつと!?!? その格好は一体なんですかあ!?!?」

「これかい? これはだね、登山おふざけスタイル 鹿ヘッドバー  
ジョンさ」

そう言っただけと豪快なウインクをする男性。

似合わないはずなのに、何故かとても違和感がなかった。

そして名称に完全におふざけと入っていたため、またしてもライル

はつつこむ羽目になった。

そういえば、と風がなにやら思い出したように男性に近づく。全員が彼のその問いに注目していた。具体的には、次はどんなことをやらかすんだと（ライル以外は）期待しているようだった。

「そういえば……俺達って」

「ふむ、なんだい？」

「まだ貴方の名前聞いてませんか？」

後ろの方で誰かがそっちかー！　と言いながら倒れたような気がした。

正確に言えば、金髪碧眼のけっこうイケメンな少年が倒れた気がした風だが、とりあえずはスルーしておいた。

壮年の男性はまるで盲点だったというかのように驚きながら自己紹介を始めた。

……件のおふざけスタイル　鹿ヘッドバージョンをかぶりながら。

「申し遅れたね。私はダニエル。ちなみに今考えた偽名だから、そこところ宜しく頼むよ」

「はあ、偽名で」

「なに、愉快なおじさんさが三割り増しだろう?」

「そんな愉快さなんて要らなかった」

はははと笑う男性、もといダニエル。

気分を良くしたのか、颯爽と歩き出す。

その背中が、なんだか憎めないものであった。

こんな人が案内役で大丈夫かと思いつつながら風達はついていくことにした。

最後尾でただひとり、メイアは頭の中で自分の思考を邪魔するなにかに辟易としていた。

すぐそこまで出かけているのに、喉でつつかえているこの感覚はとて不愉快だった。

言わなければならぬ……なのに心は言う必要はないと言っている。

その不思議な感覚は、アインスが声をかけてくるまで続いた。

温泉街ワサウルから東に一キロほどにある噴き上げの山

ワサウルから東のすぐ近くにある『噴き上げの山』は、麓までは観光名所として有名だ。

現在は夏ということだ。深緑の森くらいしか楽しめるものはないが、これが春や秋だったならば話は別だ。

なぜなら春は山全体に咲きほこる桜は圧巻の一言と言えるし、秋だったならば鮮やかな赤や黄色に変わった葉が見るものの心を奪うのは必至だろう。

だからこそダニエルがここに必ず足を運びたがるのも無理はなくなるだろう。

生憎と今は夏なので、その絶景を拝むことは叶わないが。

今この山の奥を目指している風達がいるのは、ちょうど観光名所になっている深緑の森が広がる麓だ。

視界いっぱいには生い茂る植物を見て、ダニエルがはしゃぎだす。

「おお！ 普段は春や秋くらいしか来れていないが、なかなかどうして、夏のここも壮観だな！ これなら冬のここもさぞや素晴らしいに違いない！」

「ああ、ダニエルさんよ。はしゃいでるとこ悪いが、がらくたの溜まり場ってここに案内してくれよ」

そろそろ彼の扱い方が分かってきたのか、先へ進むことを促すアイ

ンス。

ダニエルも目的地がそこであつたのを思い出し、愉快そうに頷くとまた歩き出した。

勝手知つたる場所とでもいう風に普通に歩いているダニエル。

しかし森というと魔獣と戦つた経験しかない風は、辺りを警戒している。

そんな風の様子についてダニエルはくすりときた。

「何がおかしいんです?」

「いや、君が辺りを警戒しているのが面白くてね……ごほん。ここは安全なエリアさ。ここらへんは人間には分らないが、凶暴な魔獣種が嫌う匂いが漂っているらしくてね。お陰で観光客も入つてくれるようになっていられるのさ……もっとも、もっと先に行くとその匂いも無くなって、うじゃうじゃといえるらしいがね……まあ気にしなくても私たちが行くのは、そこよりも大分手前なんだけどね」

「へえ。物知りなんですな」

「なに、何回も来る内に分かつただけさ」

風の感想に照れた風に返すダニエル。

どうやら褒められなれていないようだ。

ふとダニエルが、お、と呟いて立ち止まった。  
それにならって全員が立ち止まる。  
なんだと前を見ると、それなりに大きい洞窟があった。

彼はその洞窟を指差すと、あそこが目的地だと言った。  
アインスが首を傾げる。

洞窟？

ここがガラクタの溜まり場か？

それとも奥に広げた場所でもあんのか？

……まあ考えても分かんねえし、さっさと行くか。

勇み足で洞窟に向かおうとしたアインスだが、ダニエルに止められた。

「ん？ あそこが目的地なんでしょう？ じゃあさっさと行きましょうよ」

「その状態で行くと濡れますよ？」

「濡れるって、洞窟の中でしょう？」

「そうですね、あそこが最終目的地ではありませんよ。あそこはあくまでも近道です」

「近道い？ じゃあ、あの中は一体？」

「あそこははずばり、『アップ・カレント噴き上げ水流』です」

その説明にアインス以外の全員が頭に？マークをつけた。  
唯一理解したアインスは納得したようだ。

「なるほど、『噴き上げ水流』ですか。噴き上げの山とかけてるわけですね。なかなか洒落てますね」

「そういうことです。初めに傘を渡していたのはそういうことですよ」

「そういうことだったんですね、これ」

渋くもあるが、それと同時にセンスの良さが垣間見える彼の傘を開閉しながらアインスは思った。

もしかしてこれであるの噴射を受け止めるのか？と。

しかし話しについていけない三人は蚊帳の外となっている。

……メイアは分かっているが話には参加していないようだ。

気を利かせたのか、ダニエルが三人に説明しだす。

「『噴き上げ水流』とは、文字通りです。この山の一部では、一定の周期で水が噴きあがる場所はあるのです。そしてそこを使えば、

一気に『ガラクタの溜まり場』へと着きます」

「なるほど。じゃあ、その中が……」

「ええ。『噴き上げ水流』のある場所です」

問いに答えた生徒を褒めるようなにつこりとした笑顔を向けるダニエル。

凧はそれを見て、照れたようにはにかんだ。

「さて説明も終わりましたし、そろそろ中に入りましょうか。そうそう、傘を足場になんかしませんよ。ちゃんと舟がありますから。といっても小さいですけどね」

ダニエルはそのまま洞窟の中に入っていった。

凧達も続いて入っていく。

アインスが珍しくわくわくした表情だった。

余談だが、小さいという単語にライルが敏感に反応していた。

噴き上げの山、最奥部

「だあーっ！ 傘が役に立ってねえぞ！」

「もう一着ほど服を持って来ればよかったな」

「お前らはある意味、自業自得だろ」

びしょ濡れの二人に、鋭くつつこむアイス。

確かに『噴き上げ水流』に対して傘はさほど役に立っていないが、彼らは別の使い方をしたから濡れたので、確かに自業自得でもあった。

その使い方とは、

「あ、ありがとうね、ナギ」

「一応お礼は言っとく」

リディアとメリアへの水飛沫を防ぐということだった。

……メリアは魔法を使って水飛沫が飛んでこないようにしていたからライルの無駄骨だったが、意中の人である風すきなに庇ってもらえたり

ディアは嬉しそうに頬を染めている。

「それにしてもあんな中は予想以上に凄かったな。水飛沫が飛んでくるわ飛んでくるわで、困っちゃったぜ」

「本当にな。横から上から、後ろからも来てたからな。どうせだし、上脱いでいいか？」

「駄目だよ！ 風邪ひいちゃうよ！ でも…… ナギが風邪ひいたら私の責任ってことで、私がつきつきりで看病を……」

そこからは声にならない悲鳴で騒ぎ出すリディア。  
なんとか宥めようと、あわあわしだす風。

そこにダニエルが風へと話しかける。

「ナギ君。見て御覧なさい。ここが私が見せたかった『ガラクタの溜まり場』です」

声につられてその方向を見る風。  
その先に広がった景色を見て、彼は息を呑んだ。

それもそうだろう。

なぜなら……その先にあったものは、彼が居た世界にあった様々なモノであったからだ。

「どう……なってるんだよ。なんでこんなところに、こんなものがあるんだよ……!」

心からの叫びが、こだました。

二十一話『ガラクタの溜まり場』(後書き)

次回の更新は未定です。

早ければ、今日中もあるかなー？

## 二十二話『扉』（前書き）

予告詐欺の達人、スパイダーマン！

ごめんなさい、遅れました。

まあなんと言いますか、なぜか書く気になれなかった今週でした。

予告とか、もうしない方がいいよね。

だってなんか最初らへんからシリアスなんだもん。

なんだもん！

すいません、テンションがおかしいです。

あと今回から少し書き方を変えました。

そろそろそろお気に入り登録が100になります。

これもひとえに読者の皆様のおかげです。

これからも拙作をよろしくお願いします。

## 二十二話『扉』

幾分かは落ち着いたのか、凧は静かになっていた。

だが、先ほどから一転して静かすぎるので、リディアもライルも心配しているようだ。

それも無理は無いだろう。

シユライトで強く思ってしまった故郷への郷愁が、いまだに彼の心に残っていたのだ。

その想いを、この『ガラクタの溜まり場』にあつた彼の故郷のモノが、再び思い起こさせたのだ。

凧の心は、再び不安定なものになってしまった。

リディアを放っておけないという不思議な気持ちと、故郷に帰って心配しているであろう義祖父母を安心させたいという気持ち。

二つがない交ぜになって、凧の心を締めつける。

形容しがたい表情をしている凧を、リディアはただ見つめるしか出来なideいた。

「ナギ……」

「悪いけど、ここを一人で見て回りたいんだけど」

「構いませんよ。ここからまっすぐ行った所に休憩所があるので、私たちはそこに向かいますよ」

「はあ、手間の掛かる弟子なこと」

「……先に行ってるからね？」

「うん」

凧を除いた全員がぞろぞろと歩いていく。

リディアは心配そうに凧を見ていたが、やがてメイアに連れて行かれた。

一人残った凧は目の前の残骸に目を向けた。

否。

彼にとっては、大きな意味を成すモノだ。

彼の視線の先には、タイヤが無いフレームだけの自転車や中身の無くなったペットボトルに、果てはひしゃげた車があった。

しかしそれらのどれも、全てがアンスタイン（アインシュタイン）に来る前には目にしたことがある品々だった。

強く、強くなってゆく郷愁。

自分が生きていた場所がどれほど大切なものだったかを、彼は今知った。知らされた。

それと同時に、この世界も悪くないと感じる自分もいた。

この世界に連れてきた蒼い髪の少女。

自分がのんびりと暮らしていた世界から離れさせた原因であると同時に、この世界に居たいと思わせる原因でもある。

彼女を見ていると何故だか落ち着かない。

お世話になっっているのに大した事は出来ていないから焦っているんだと凧は決めつける。

本当は答えが出ているかもしれない。

それでも彼はそう思う。

そうしないと、元の世界のことなんて忘れてしまいそうになるから。

答えが出ない思考を放棄して、凧はじっくりと見て回ることにした。なるほど、ダニエルが名づけた通り、ここにはガラクタしかなかった。

新品に近いものはあったがそれまでで、しかもそれは芯の入っていないシャーペンだった。

なにか手がかりでもあるかと思ったんだけど、そう上手くはいかねえか。

あいつらは休憩所に行ったし、俺も行くか。

もう用はないとばかりに『ガラクタの溜まり場』から出て行こうと踵を返そうとしたが、そこでふとなにかが視界を過ぎった。

その方向にはもうなにもなかったが、目立たない奥の方に奇妙なものが見えた。

凧は、休憩所なんてすぐに着けるだろうと思ってその奇妙なものを見に行くことにした。

奥に着くと、凧は眉を顰めた。

そこは入り口近くと違って、何も無かった。

中心にはぼつんと、傷がついてぼろぼろになった木の扉だけがあった。

さらにその木を中心に、半径十メートルほどぼっかりと空いていた。雑草一本すら生えていないのは、たとえ異世界の非常識さに慣れた凧とはいえ訝しまずにはいられなかった。

ここだけこんな状態だといかにも怪しいが、元の世界へ帰れる手がかりが欲しい凧は臆せずその扉のノブを掴んだ。

直後、凧の意識がなにかに持っていかれた。

「やっと着いたか、つっても十分しか経ってねえけどな」

元軍人であったため、四十間近とは思えないほど体力のあるアインスはぼやく。

それでも景色を楽しんでいるのか、目はゆっくりと横を行ったり来たりしている。

その言葉に微笑んで、ダニエルは答える。

「ふふ、全行程を入れれば一時間以上は経ってますし、お疲れになるのも当然ですよ」

そう言うダニエルだが、彼も景色を楽しんでいた。

その証拠に彼の目もあっちこっちへ行ったり来たりしていた。

二人が座っているベンチから、少しばかり離れたベンチにリディアとメリアは座っていた。

リディアの顔には影が差していた。

先ほど見た凧の思いつめたような顔を思い出して気が気ではないらしい。

隣に座っているメリアは、どうもうんざりとしたような顔をしている。

彼女が今までまともな交友を持っていたならば、きっと『はいはいご馳走様』とでも言いそうな表情をしている。

「……ナギ、大丈夫かな」

「そんなに心配なら残ってればよかったのに」

「でも、あの時のナギには、何か話しかけづらかったし……」

「……（じゃあ待つてればいいのに）」

どうにも気分が盛り上がりたくないリディアを見て、メリアは言ったことと矛盾していることを考えた。

黙り込んでしまった彼女になにか言おうとするが、言葉が出ず、結局はそのままメリアも口を閉ざした。

交友関係がそこまで広いわけでもなく、対人能力が低い自分が出てくることはない判断したようだ。

実際には凧が戻ってきたらそんなものは関係なくなるのだろうか。

元気がない彼女を見ていると、メイアは妙に落ち着かなくなった。

ライルにはああ言ったけど、どうにも諦めきれない。

勝負してもいないのに、引くなんて有り得ないわ。

……リディアとライルには悪いけど、私はまだナギを、諦めない！

いつも通りのあまり動かない表情の奥で、彼女は熱い想いと共に決意した。

ライルがこの場に居ないが、定期的に彼の叫び声が聞こえることから見えないところで山彦で遊んでいるのだろう。

すでに十七歳だというのに子供っぽいことをしている。

ダニエルはそんな彼を良く言えば穏やかな、悪く言えば生温かい視線で見ている。

この休憩所で彼らは正午のひと時をのんびりと過ごしていた。

それを赤く光る二対の視線が見ていた。

様々な映像が前から流れってくる。

いや、違う。

これは記憶だ。

それも凧の記憶だ。

生まれてから、今までの記憶。

あ、このシーンは。  
俺の父さんと母さんが……死んだって聞いたときの記憶だ。  
そうだ。

あの二人は、二人で出かけたときに事故にあって……それから、俺は笹岡のお爺ちゃんらに引き取ってもらったんだ。

確かこの時は俺は、三歳か。

その時はまだ分からなかったけど、後になって分かったときは大泣きしたなあ。

そう言えば父さんらは死んだんじゃないかと、本当は行方不明って話だけど今は異世界に居るし、再会できるかは分かんねえな。

会えるなら……会いたいんだけどな。

……なんか、こんなこと考えてたらもう会えないみてえだな。

そこで周りの景色に異変が起きた。

周りが真っ暗になったのだ。

もちろんさっきまで大量にあった映像はいまや無い。

どうなっているのかと周りを見るが、何も無い。

本格的に困り始めた頃。

変化があった。

風の目の前で一つの映像が流れ始めた。

それは今の風と寸分変わらず同じ姿の風が、笹岡家の玄関を開いたところだった。

笹岡家は今時の一軒家だ。

玄関は昔の家のような横開きタイプではなく、現代の押して開くタイプのドアだ。

丁度、あのぼつんとあった扉を開いたら、この映像通りになりそうだった。

そう考えた時、彼の体をなにかが駆け抜けた。  
そう、これはただの比喩だ。  
しかし、彼にはそれが本物であるかのように感じた。

もしかして、このドアをくぐったら、俺は帰れるのか？  
俺の故郷に……帰れるのか？

そこで一瞬、視界がぶれた。  
気づくと周囲は先ほど居た『ガラクタの溜まり場』だった。

凧は自身の右手を見た。  
ドアノブを掴んでいる。

これを回し、開き、足を進めたら、帰っているのだろうか。  
もしそうだったら……もし、そうだったら？  
だったらどうするのだろうかと彼は首を傾げた。

そんなものは決まっている。  
帰るに決まっている。

ノブを回そうとしても、彼の手は動かなかつた。  
脳裏に一人の少女の顔が浮かんだ。

リディア。

この世界に来て分からないことばかりだったのに、親切にも色々と  
教えてくれた優しい少女。

凧にとっての第一印象はそんなものだった。  
しかし今は自分の心に何か分からない感情を与えてくる。

離れたくない。

そう思ってしまった。

手をドアノブから離す。

どうしてか、彼女から離れたくないと思ってしまう。

手が、震えている。

何故か。

簡単なことだ。

帰りたいと思う心と、ここに居たいと訴えかけてくる何か<sup>せめ</sup>が闘<sup>め</sup>ぎあっているのだ。

訳が分からないと右手を凝視する風。

だがそこでなにか異変を感じた。

今すぐ休憩所へと向かわなければならぬ。

そんな強迫観念が襲い掛かってきた。

ここに居たいのか、それとも元の世界に帰るのか。

二つの感情で戸惑っているのに、これ以上増えてたまるかと彼は走り出した。

一度扉の方へと目をやるが、ぼろぼろの扉はまるで早く行けと言わんばかりに、何故か力強く感じられた。

絡み合った想いを振り払うように頭を振って、加速した。

その顔に、もう迷いはなかった。

## 二十二話『扉』（後書き）

次回は、大型魔獣戦です。

これは詐欺じゃないですよ!?

こほん。

それと次回で凧の『加速』が進化します。

ぶつちやけ今の状態で限定保有能力にするつもりだったんですが、それだと成長の余地がなくなんじゃないかねと思ったので、あえて保有能力にしておきました。

それとなかなか大事な伏線を張っておいたので、また読み直してみてください。

……なんかすぐに分かると思いますけどね。

それでは皆様、次回まで御機嫌よう!

多分、次回は設定3になったりしてー?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5793u/>

---

AnotherWorld ~ 異世界で覚醒する聖神 ~

2011年10月25日20時23分発行